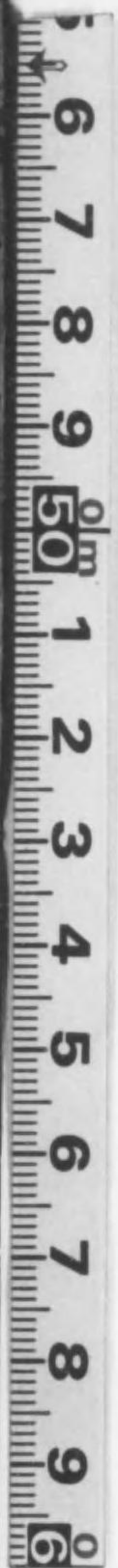


入世二門偈略述

302
123



始



講師 本多主馬速

入曲二門偈略述

昭和十年安居



302/23

入出二門偈略述

目次

玄義篇

一 開講之辭	一
二 本書の末註	二
三 因果十門	四
イ 五念門の義相	六
ロ 五功德門の義相	三
ハ 『論』論註に於ける因果十門	四
四 淨土論の大綱	三
イ 偈頌と解義分との分齊	三

二

ロ 偈頌の大綱……………三

ハ 長行の大意……………三

五 本書の來意……………三

六 一部の大意……………四

七 本偈製作の年時……………四

八 題目撰號の解釋……………五

九 一部の分科……………五

文 義 篇

第一章 正明二門章……………五

第一項 二門之本據……………五

第二項 天親讚……………五

一一 一心讚……………五

三

(一) 歸佛相……………五

1 標能所依……………五

2 明能所歸……………六

3 歎所歸德……………六

(二) 觀察相……………六

1 觀妙土……………六

イ 慧 明……………六

ロ 別釋國土妙相……………七

2 願力勝益……………七

二 二門讚……………七

(一) 法藏因行……………七

(二) 別釋五門……………七

1 禮拜門……………七

2 讚歎門……………七

3 作願門……………七

4 觀察門

5 出第五門

(三) 因行成就

第三項 曇鸞讚

一 他利々他

二 如實修行

三 報土勝益

第二章 兼明相承章

第一項 道綽讚

一 聖淨二門

二 機教相應

三 三信相應

第二項 善導讚

一 眞實行

二 眞實教

三 眞實信

四 眞實證

入出二門偈略述

本多主馬述



義篇

一 開講之辭

此の二門偈は我祖老後の御眞撰にして、『淨土論』の奥義を開き他力廻向の本源を開示したまふ大切な御聖教であります。文は僅かに七十八行百五十六句なれども、義は甚深微妙にして他力眞宗の大宗が此中に蘊在してあります。凡そ我祖の撰述にして漢文に屬するもの四部あり、一に六卷の『廣文類』此は本宗根本の本書にして、前五卷は『大經』に據て眞實の四法を顯はし、後の一卷は『觀』『小』二經に依て方便の四法を

顯はす。廣く經論釋を引用すること六十四部、三經一論を經とし餘の經論釋を緯として錦を織るが如く、眞實の教行信證方便の教行信證衆生往生の因果残る所なく詮はしたまふ。就中方便の四法は「化卷」に出て、經に就かば『觀』『小』二經の顯說、願によらば十九二十の二願、方便化土の往生の因果を顯はし、又前五卷は彌陀の本願に約せば十七、十八、十一、二十二、十二、十三の六願に依て廣く眞實の教行信證眞佛土を顯はしたまふ、(此中六願合すれば五願となる、二十二の願を十一願に收める、凡そ五願建立と云ふ義は覺師の『願々鈔』より起ると開悟院は指示せられたり)所謂三願三經三機三往生の綱格を定め、權實眞假を判じて他力眞宗の教行信證に歸せしむるを主眼とす。然れども此書餘りに廣漠にして下機望洋の歎を抱くを憐み、教相を略して専ら安心に就き、方便を去て眞實を取り、専ら三經の隱彰の實義に依て願力廻向の四法を明したまふが第二の『淨土文類聚鈔』なり。故に『略本』の總結に眞實の四法皆願力廻向に依ることを顯はして「常没凡夫人、緣願力廻向、聞眞實功德(行)獲無上信心(信)則得大慶喜獲不退轉地(不)令斷煩惱、速證大涅槃(證)」とのたまふ。三に『愚禿鈔』上下二卷は我祖廣本に於て已

證の法義を述すと雖も、未だ一代の教相を判釋せず、是故に『禿鈔』上卷には二雙四重の教判を宏張して一代佛教の權實眞假を剖判し、聖道淨土二門相對より唯一絶待に進みて、本願一乘絶待不二の義旨を闡明し。下卷には『觀經』の三心に就きて、自力他力を分別し他流未談の深旨を點示したまふ。已上三部の聖教の中心思想は他力廻向の大宗に在り。此義の基く所は全く『論註』の洪範に依る。是故に我祖八十歳の老後に到らせられ、『論』『論註』の奥旨を開拓し、他力廻向の根元を指教したまふが此の『二門偈』であります。斯かる大切なる御聖教を私如き膚受淺識の窺ひ得べきに非ざれども、海東講師已來度々先哲の講說に乏しからざれば、専ら先輩の指南に循ひ、謹みて本書を講讀せんとする次第で御座ります。

二 本書の末註

因に本書の末註を示せば印刻流行せるもの六部あり、(一)『分釋』一卷圓智作、(二)『試解』一卷同人作、今を距ること二百八年前享保十三年の著述なり。是は此偈の末註の始

にして至て簡略なり、此二本は同本異名なり。(三)『窺斑錄』三卷法霖作、今を距る百九十七年前元文四年の作なり。(四)『大意』一卷先輩海東師著、『窺斑錄』と同年の作なり。大意と題して簡略の作なれども玄談に興由と旨歸の二科を辨じて偈の義意を顯はし尤も指南とすべき書なり。(五)『流情記』三卷播州魚崎智暹作、『大意』に後る、こと二十三年實曆十一年の著作なり。(六)『參考』二卷了空作、『流情記』より七年の後明和五年の作なり。先輩高倉學寮にての講述は今を距る百八十三年前實曆三年夏理綱院の講述を始めとし近年まで十數回の講述あり。就中現に開版流行せる香月院の講義は尤も親切丁寧なるものなり已上。文前に要義數條を述べて講學に便にす。

三 因果 十門

先づ因果十門の義を略辯せば、十門とは因の五念門と果の五功德門なり。因の五念門は『論』に「起觀生信章」に出る、一に禮拜二に讚歎三に作願四に觀察五に廻向なり。之を三業に分てば身業に彌陀を禮拜し、口業に彌陀を讚じ、意業に淨土を作願し觀察する。此

三業四念門は自利なり、第五の廻向門は自行の法を用て他の衆生を教化する教人信なれば利他なり。故に三業二利の五念門と云ふなり。

次に門とは出入の義なり、『論註』下^二人得門則出入無碍」と云ふ、入出は自利々他の異名なり、『註』の次の文に「前四念、是入^二安樂淨土^一門、後一念、是出^二慈悲教化^一門」とある、古人此文を誤解して入は淨土に生るゝこと、出は淨土より娑婆に還ることと解した。夫ては出の廻向門が願生行者では出來ぬことになる。乃て「入安樂淨土」とは願生行者が自利の行を修して自利の果に證入する門と云ふこととて、行者の心が淨土に向ふて居る故に入と云ひしもの、(但し『論』の當分て云へば、五果門は當益なれば淨土に入る^二と云ても差支なし、)「出慈悲教化」とは自ら淨土を願生しつゝ、他の衆生を導く常行大悲の行を作すを出と云つたもので、淨土から還來して度生することではない。故に前四念は自利の果に入るの門て入門、後一念は化他に出づる出門て通入の義が立つ。又五念門を總じて門と云ふ時は、前四念と後の一念とて自利々他孰れ共出來れば入出無碍の義が立つ。又五門各別に門と名づくる時には、門は差別の義で解せば通り易し。

次に念とは或は念佛の義とし、又は憶念の義とす。他宗他門の義は且く擱き、今家にて念佛と云へば口稱念佛なり。然るに五念門を檢するに、作願觀察は意業に屬する故に直ちに念佛とは云ひ難し。故に五憶念門と見るを可とす、一心流出の五念なる故に、憶念相續の三業に現はれたるを五念門と云ふ。故に『論』には五念門行と云ひ、善導の『禮讚』には五念門を起行と定めたり。

次に果の五門は因の五念門の成就したる結果にして、『論』に「此五種門、初四種門成就入功德、第五門成就出功德」とありて、五念入出の因に依て得る入出二門の果なれば、因果兩門で二重の入出を成ずるなり。

「イ」次に五念門の義相を略辯せば、

初に禮拜門とは、身業に阿彌陀如來を禮拜するを云ふ。而して其禮拜する意は、菩薩の通儀として單に禮佛報謝するに非ず、願生淨土の爲に禮拜相續する行なり。

二に讚歎門とは、口業に南無阿彌陀佛と稱ふるを云ふ。然れども、唯聲に出して稱ふ

る斗りにあらず、如實の稱名にして、疑なく御助を信じて稱ふる稱名なり。

問云、稱名を讚歎と云ふ理由如何。

答、諸佛は萬德を名號に具へ給ふ、名に體德を具へ給ふ故に、名を稱ふれば佛德を歎ずることになるなり。法位云(『行卷六要』三十四)「諸佛皆德施名、稱名即稱德、德能滅罪生福。名亦如是。若信佛名、能生善滅惡決定無疑。稱名往生此有何惑」文

『銘文』本社に云、「稱佛六字トイフハ南無阿彌陀佛ノ六字ヲトナフルトナリ、即嘆佛トイフハスナハチ南無阿彌陀佛ヲトナフルハホメタテマツルコトハニナルトナリ」文 喩へば芝居にて役者の名を呼ぶが如しと易行院は引例して示されたり。

三に作願門とは、意業に作願するなり、此は意業なれども、相續に約する故に起行に屬するなり。初發を發願と云ひ、後起相續を作願と云ふ。『大集經』に「發者求聞正法」作者聞已能説」とありて、發と作とを初發と後起とに使ひ分けてある。

問云、禮拜稱名の、行なることは明かなれども、作願は願心なり、願心を行と名づく

る例ありや。

答云、有り、『華嚴經』の淨行品には、百四十遍も「當願衆生」と云ひて願を明せり。而して、此品を淨願品と云はずして淨行品と名づけたり。賢首は之を『探玄』十四六十に釋して、「心起願稱行」と云へり、可知。

されば、信後相續の上に脇目ふらず、一心專念に願生の想をかけるを作願と云ふ。『論』には、後の觀察と合せて定慧の二法に對當せり。所謂奢摩他と毘婆舍那是なり。奢摩他は止と翻ず、之を釋するに、『論註』下四に三義あり。第一義は此土に約す、其意は一心專念（一心即專念）に彌陀を念じて淨土を願へば、所念の佛徳及土徳にて自然に惡を止むるを止と釋せり、此は法徳を自然に受くるに約して止を釋せるなり、喩へば道共定の戒法の如し。

四に觀察門とは、『論』には智慧觀察と云ふ、此智慧に三あり、聞思修是なり。聞思二慧は散心にて起す智慧、修慧は定中にて起す智慧なり。『觀經』で云へば、定善觀は修慧の觀、散善觀は聞思の觀なり。『淨土論』の觀は、『論註』の指南に依れば、下々品

の惡機を相手とすれば、佛の教法より三種莊嚴を聽聞して、聞思二慧にて其有様を心に思ひ浮べて、淨土の七珍金山も斯くやあらんと思想する分際なり。故に『論註』下四に毘婆舍那を釋するに二義を出し、其第一釋に、此土にて三種莊嚴を觀想すれば觀力微なりと雖も、所念の功德如實の故に如實の利益を得ると釋せり。されど、固より萬機普益の本願なれば、上機の定觀を修するを遮するにはあらず。

五に廻向門とは、廻向とは廻施趣向にて、己が功德を一切に廻施して、共に淨土に往生せんと作願するを云ふ。己が功德とは、前四念の功德なり、此功德其本を尋ぬるに、彌陀より起るが故に、本に約すれば彌陀の功德なり、彌陀の功德を自他平等に全領し、同じく一味の安心に住して、淨土往生が遂げたいと、教人信の起行を爲すを廻向門と云ふ。即ち他力の度衆生心の現はれなり、之に二種あり、此土にての教人信を往相と云ひ、彼土に至りて後、還來度生するを還相と云ふ。

已上述べた五念門は、平生相續の三業に現はれた行業にして、他力の一心より流れ出づる報恩行である。之を、古來一拳五指と喩へて、五念の指を本へ戻せば、一心の拳と

なると傳ふる所である。然るに、之を下の五功德門に望むる時は、往生の因行となる。此時は、第二の稱名が主となりて、餘の四念門は伴となる。伴を主に攝して稱名正定業となる。

問云、善導の五正行と、今此五念門と同異如何。

答云、五正行は、「觀經」一經に顯説したる往生行に就て立てたり。又五念門は、一心願生の行者の信後相續の行なり。故に、五正行は直ちに往生の行體を示し、所謂就行立信の能信が爲の所信の體を示す。依て、正業助業を分ち、前三後一を助業とし、第四の稱名を正定業と判ず。然るに、今此五念門は、信後報謝の能行に約して示す所なる故に、一心の安心に催されて、三業二利に顯はるゝ上に於ては、更に助正主伴なし同一列なり。

問云、然らば、五念門には永く助正を分たざるや。

答云、或は分つこともあるべし。其故は、「起觀生信章」に出る如く、善男善女の安樂國に生ずる往生の行と云ふ時は、彌陀因位の本願に、餘行を選捨て唯稱名の一行を選び

取りて、稱我名號と願し給へり。然れば、往生の行と云ふ時は、讚歎門の稱名斗りを本願の行と名づけ、餘の四念門は稱名が爲の助業とするなり。論主此義を顯はさん爲に、讚歎門の行を擧ぐるに、唯「稱彼如來名」の稱名行のみを擧げて偈讚等を云はず。我祖は此意を顯はして、本偈讚歎門の下に、「無碍光如來攝取選擇本願故」との給ふ。

問云、三信を合して一心とする論主、何故に乃至十念の稱名を開きて五念門とするや。

答云、五念は稱名を離れず、稱名の中に五念の行あり、本願の行たる稱名を稱ふる時、名號中の功德行者の三業に溢れ現はれて、染香人に香氣あるが如く、禮拜讚歎等の行自らせらるゝなり。此妙味を示すが五念門の建立なり、されば五念門に二の扱あり、佛恩報謝として顯はるゝ時は助正主伴なし、往生行とする時は讚歎門の稱名は正定業にして餘の四念門は助業なり、同一の五念門に二途ある所以は、若し所修の行體に約せば、五念門の行悉く往生の業因にして、淨土に往生して五功德の果を得る因種なり。(主伴あり) 又能修の意趣に約すれば、一心の安心決得の時往生の業事成辨すれば、日夜に修する五念の行は、總て佛恩報謝の爲なり(助正なし)。例せば稱名念佛の如し、所稱の法體

は正定業の念佛なれども、能稱の意許は佛恩報謝の爲なるが如し。

一一

已上は『論』『論註』の五念門に就き、五正行との同異を辯じたるが、若し『禮讚』及『往生要集』所引の五念門に就かば、稍趣を殊にする所あれば、一律には取扱ひがたし。『要集』上末^社に明す正修念佛門中の五念門は、觀念中心にして、『觀經』顯說の要門位に屬す、故に禮拜には三業の禮拜を明して單禮彌陀にあらず、讚歎門には廣く偈讚を擧げて稱名を除き、後の三念門亦事理に通じて明せり。故に、『論』『論註』の唯弘願位とは霄壤の差あり。又『禮讚』^三の五念門も、讚歎門に稱名を除きたれば、今と同じからずと知るべし。

「口」次に五功德門を略解せば、上の五念門に依て獲る所の功德を現はして五門を立つる、『淨土論』では、『利行満足章』に出る。一に近門。二に大會衆門。三に宅門。四に屋門。五に園林遊戯地門なり。

一に近門とは、禮拜門に依て得る所の利益にして、
定聚の位に入

り、無上涅槃に近づく故に近門と云ふ。『大經』で云はゞ、「次於泥洹之道」の意なり。

二に大會衆門とは、大會とは廣大會なり、衆は聖衆にして、八方上下より所有衆生寄り聚まるを大會衆と云ふ。『小經』に「諸上善人俱會一處」と説くもの是なり。彌陀説法の大講堂に集る衆中に入るなり。此は讚歎門所得の利益なり。

三に宅門とは、宅とは屋敷のことなり、陶淵明の詩に「芳宅十餘步草屋八九軒」と云へるによるに、宅は屋敷にして屋は家なり。『論註』には、「修行安心之宅」と釋して、奢摩他の修行にて眞如の上に心が落ち付た處を宅門と云ふ。『論』には「得入蓮華藏世界」とありて、淨土の廓内へ入り込て心靜に安心する所なり。此は作願門所得の利益なり。

四に屋門とは、御座敷のこと、奥座敷に入りて法味愛樂する利益にして、淨土の依正主伴の法味を受用する所、即ち觀察門所得の利益なり。

五に園林遊戯地門とは、滿腹の後、殿後の園林に出て、逍遙遊戯する如く、自行満足して攝化利生する還相廻向の相にして、廻向門所得の利益なり。

已上の五果門、前四は入の功德を成就し、第五は出の功德を成就せるなり。此五の中、

初の近大二門は現益にして正定聚、宅屋二門は必至滅度にして當益。宅門は大般涅槃の妙果にして大定、斷德。屋門は無上菩提にして大智、智德。此即二轉依の妙果なり。されば、十一願成就の益なり。次に園林門は涅槃の妙用にして、還相利他の大用なり、此即ち二十二の願力廻向の賜なり。されば、因果十門は衆生往生の因果にして、十八、十一、二十二の願力より廻向せられたるものなり。而して因の五念は一心等流の報恩行なれば、攝末歸本すれば一心の一因に收まる、又果の五門は正定と滅度を開きしものなれば、遂に大涅槃の一果に收まる、斯くて五因五果は一因一果に收まり、一心の一因に依て無上菩提の大果を感ずる、此因果共に願力廻向なりと明すが『二門偈』の主眼とする所である。

「ハ」 上來陳べ來りし所は、我祖の上の十門の取扱振を述べたるが。『論』『論註』の上では、稍其趣を異にして居る筋合を知らねばならぬ。『淨土論』では、五念門の因に依て、淨土に往生して五功德門の果を漸次に成就して、最後に佛果に登ると云ふ組織で、

五念門は自利々他の行なり。之を因として淨土に往生して、先づ近門、次に大會衆門と、上へ上へと轉進し、屋門に至りて自利の行満足する、次に第五門に出て、還相廻向の利他行を爲して利他の行満足する、斯くして二利の行満足成就して、無上菩提を證ると云ふのであるから、十門は總て因中の行である。果の五門の第五の還相廻向も、二十二の願の菩薩の修行にして、涅槃の妙用ではない。隨て、宅屋二門も菩薩の止觀均等の修行にして、滅度の相ではない、五功德門と云ふても因位中の五果であるから、五念の行を修する、依て五念門は彼此二土に通じて修行する。之が『淨土論』の當相にして素直に見たる姿である。されば、『淨土論』では、往生即成佛と云ふ事は云はれぬであらうか、『利行満足章』の始にある「漸次成就五種功德」の文から見れば、往生後に漸次に修行し成就するのである。然るに、最後の結文には速得菩提とある。之より見れば頓成である。此相違點に疑を起して、絶待他力の本原を究明されたが雁門の三願的證である。

今、其趣を略辯せば、先づ始に問を擧げて「問曰有_二何因緣_一言_二速得成就阿耨多羅三藐三菩提_一」と云へり、問の意は、淨土に往生してから五段の階段を登りて後に成佛する

ならば、漸成であつて速得ではない、何故に論文に速得菩提と云たかと云ふのである。夫を答へて、五念門の行を修して自利々他二利圓滿した故に、速得菩提が出来ると云ふ。更に問て云く、五念の行成就は容易の業ではない、如何にして速かに二利圓滿の行が成就するか、答云、自力でやれば時劫を歴るけれども、他力に頼れば速かに成就する。依て『註』の文に「凡是生ニ彼淨土ニ（因五念）及彼菩薩人天所起諸行（果五門）」は皆阿彌陀如來の本願力に依て成就せらるゝのであるとて、本願力の強縁を強調し、「若非ニ佛力ニ四十八願便是徒設」であると論及し、三願を引用して、佛力に依て因果十門の速成を的證してある。

先づ、因の五念門の速成を證するに、第十八願を引用して「十念々佛便得往生」の故に三界六道の生死を離れて畢竟無生の國に生るゝ。若し自力の修行で行くならば、初地入見道迄には正に一大阿僧祇の時劫を歴る、然るに、願生行者は第十八願力に縁るが故に、三十心を僅かに十念々佛（所信に約すれば稱名、能信に約すれば信心）で超越して、正定不退の國に生る、是が速成の第一證である。

次に淨土に往生すれば、直ちに正定聚の位に入る、正定聚に入りたる者は進みくゞて必ず滅度に至る、其中間に於て、留難（七地沉空の如き）がない故に速に佛果に至る、此が速成の第二證である。此正定聚と必至滅度は、第十一願の誓約に頼るものである。

次に第二十二願に依れば、他方世界より彌陀の淨土へ生れた諸菩薩（願生行者も淨土の大菩提心を起す故に菩薩の一分なり）は、皆補處位に上ると約束せり、何故に斯様に速かに超證するや。答云、本願に超出常倫と誓ふが致す所である。此が彌陀の淨土の諸佛に異なる點で、參る程の者が皆悉く補處の菩薩となる、所謂便同彌勒である。此超出常倫の超證を第十一願の正定と滅度の間に入れて考ふる時、茲に往生即成佛の教義が生れる、一地より一地と次第に段階を昇るのは娑婆の規則、淨土には斯様な規則はない、一足飛に菩薩の最高位に昇る（實は成佛と云たけれども、淨土の上首功德に遠慮して補處と云ふたもの）之が速成の第三證である。

斯く三願を以て的證し來れば、五果は一念の間に透過して、直ちに無上覺位に昇る、『淨土論』の速得菩提の一句は五果の階級を打倒して、一味平等の圓證を顯はす、實に至

要の文字である。宛も『觀經』の前來の所説を覆へず即是持名の一句に匹敵する。『觀經』が持名の一句に由て、定散經が念佛經となつた如く、『淨土論』の即得菩提の一句は、漸得菩提の漸教を立所に轉じて、速成菩提の横超論となす大文字である。

元來、五果門は淨土の主伴莊嚴の現在の事實の上に假設せしもので、嚴然たる五位があるのではない。淨土の菩薩の中には様々の人が居る、初地もあれば二地もある。『大經』下卷には二忍を成就する衆生あり、又利根の衆生は不可計の無生忍を得る、一生補處もあれば平座の菩薩もある。自行のみならず、利他行をなす菩薩もある。一食之頃に十方諸佛に供養するものもあれば、又其國の衆生を説法饒益する人もある。『小經』の説相も其通りで、淨土の衆生は早朝より華を持って諸佛に供養するあり、夫等の衆生は不退の位に住するあり、又は一生補處位に昇るあり、斯く種々の衆生が、自行化他の事業を爲しつゝあることが三經の上に現はれたる安樂淨土の現實の事實である。二十九種の莊嚴は、此現前の事實に依て建立し、五功德門の五位も之に依て立てたものである。

前に述べた幾多様々の衆生を五等に分類して、之を一人の始終に割當て五等の階級を

作り、此五等の階次を五念門の所得の益として命名したるが、近門大會衆門等の五等の功德門である。喩へば、初地の人には禮拜門より眺めて近門の名を與へ。二地の人には讚歎門の所得として大會衆門の名を付け。八地の菩薩に作願門所得と見て宅門の名を與ふる等の如く、各位の衆生に五念所得の五果の名を付し、之を一人の始終の位となして、自利々他成就を明す組織なれば、尅實して云へば、禮拜の一因に依て近門の益を得るのではない、五念一具の行に依て近門を得、又五念一具の行に依て大會衆門の益を得ることなれども、五因五果對配上の教義施設として、近大等の名を附したのである。約まる所、淨土を修行の道場と見做し、近門より次第に轉進して、屋門に至りて自利の行満足し、出の第五門にて衆生を濟度して利他の行成就し、自利々他成就して大菩提の果に登ると云ふ組立てである。

されば、速得菩提の一句の現はれる迄は漸教である。五位の階位を歴て成佛すると云ふ漸教が、速得菩提の爲に一喝されて一足飛に無上覺位を頓證する。之を發揮されたが雁門の偉勳である。若玄簡大士の三願的證の發揮が無かつたならば、『淨土論』は漸々修

學の自力論で畢つたかも知れぬ、然るに、速の一字より文底に潜める本願力を徹見して、横超即證の大義を宣揚されたればこそ、末世の群萌が絶待他力の妙益に洽潤することが出来るのである。

問云、彌陀の淨土は往生するなり直ちに、無上涅槃に至る（往生即成佛）と云ふ證據が、三經中に明文あらば承りたし。

答云、三經は主伴莊嚴の説相なれば、顯文は無けれども、我祖の指南に依れば、『大經』下卷の横超段の「昇道無窮極」の文を『銘文』本^五に釋して「昇ハノホルトイフ、ノホルトイフハ無上涅槃ニイタル、コレヲ昇トイフナリ。」と釋し、『六要』五^七を横超釋の證文に此文を引用し給ふ。三經中、頓證菩提の文は此一文に局る、「虛無之身無極之體」の文は助成の證文なり。

問云、眞實報土は無階位を實義とするのに、何故に論主五果の階位を立てたるや、

答云、佛果の尊高を知らせん爲なり。五等の上空に聳ゆる佛果は、仰げば愈高し、底下の凡愚一跳に即得菩提するは、實に大悲の無極を現はす。尊きは大喜提、難有きは速

得を與へ給ふ大悲なり。

問曰、五因五果對當の意趣云何。

答、先づ禮拜は佛に近付かねば出來ぬ仕事故に、禮拜を因として佛の證りに近づく近門の果を得る。次に讚歎は、佛德をほめる義なれば、之を因として大會衆の數に入る、大會衆が集れば梵唄なぞて佛德を稱讚し、經法を聽受する故に讚歎門の果とす。次に作願門は淨土に專念する、餘念なく淨土へ心を向ける故に、淨土の宅中に入る宅門に配する。次に觀察門は三嚴二淨を觀することなれば、之を因として淨土で實際の三嚴を觀味する故に、屋門に充てる。第五の蘭林遊戲地門は、廻向門の相手なることは知れ易し。如是く、相似同類の者を組合せて、五因五果を施設して菩薩の二利満足の様を知らせたのが因果十門の施設である。如此きことは他にも例のあることにて、『義林章』四本^三歸敬章に、因位の時身口意の三業に過を離れて行ずれば、果に到りて三業の次第の如く、神境通（神足通、又身如意通とも云ふ）と他心通と漏盡通との三輪を得ると云ふてある杯は、尤も善き適例である。

上來は、『論註』の當分より三願的證の意を解釋したのであるが、宗祖に來りては往生即成佛の見地より『論註』の文を深刻に味讀し給ふ故に、三願的證の義意も前來の所説より一層深入りして、他力廻向の根本を示すものと御覽なさるゝ。隨て、五功德門の取扱も前説と異なり、近大二門を正定聚として現生に引上げ、宅屋二門を滅度の福智二嚴と見做して、定慧に配して大般涅槃の證果となして往生即成佛の義を明にし、蘭林遊戯地門は果後の利生にして、大涅槃の妙用と見給ふ、此の如く見る時は因果十門は往還二種の相となる、此衆生往生の因果たる往相還相は、全く如來の廻向に依て成就せらるゝものなりと定め給ふが『廣略』二本の所明なり。如是く、往還共に如來廻向の義を建立し給ふは、偈の「觀佛願力速滿寶海」より一論を眺め給ふものにて、佛邊に成就せられたる衆生往生の資糧は、一名號中に攝在して、聞信の一念に之を廻向し給ふ故に、立所に功德の大寶海を満足する。佛の本願力とは、總じて四十八願、別して云へば第十八願、要を取れば十八、十一、二十二の三願なり、此三願の誓約に由て衆生往生の因果満足する、此三願の力が衆生に現はれたが速滿寶海なり。遇の一字に縁て眞實功德の大寶海を

全領するが故に、速滿足の大益を得て往還の證用に預かる、之を廻向といふ。往相還相は衆生に就く名、廻向は彌陀大悲の回施を顯はす。『廣本』に淨土眞宗より二廻向四法を開くは、萬德圓滿の名號中に、往相還相の功德利益の攝在すると云ふ義邊にして、佛の果力を現はす。『略本』に本願力より四法を開くは、佛の因力を顯はす、因果異と雖も攝化の大用は同じきが故に、共に衆生を運載して彼岸に度す。此因果二力に依て佛國を建立し、此二力を廻向して一切衆生を救濟し、永く常樂の大果を與へ、徧應無方の大用を與へ給ふが、彌陀甚重の大悲である、此義は後に至りて再説することであらう。

四 「淨土論」の大綱

此『二門偈』は『淨土論』の玄旨を顯はす聖教なれば、一往『淨土論』の大要を知り、其上に我祖が如何に之を深刻に味得なされたかを研究せねばならぬ。先づ『淨土論』大に分て二つ、一に總説分、此は二十四行の偈頌にして、三經に廣く散説せられたる義を總持する故に總説分と云ふ。二に解義分、此は上の偈頌の義を解釋する故に解義分と云

「イ」今、此二分の分齊を案ずるに、總説の偈頌には一心歸命の安心を明して、最後に教人信の意を以て、衆生と共に往生安樂國の志願を述べてある。是即一心の一因に依て、往生淨土の一果を得ることを明す一因一果の法相にして、一心歸命の安心を明す。之に對して、解義分の長行には五念相續の行を明す、此五念門の相續行に依て、淨土に往生して近門等の五果を得て遂に無上菩提を證る。五因五果又は五因一果の法相なり。而して五念門は一心等流の起行なれば、一心の本より五念の起行を起し、五功德を歷て無上菩提を證る。斯様に見るのが『淨土論』に對する一種の見方にして、一論を以て一人の始終を明すものと見て解釋したるものなり。常に云ふ一拳五指の喩は此處へ當嵌るものなり。『和讃』の「他力廣大威徳ノ、心行イカテカサトラマシ」の文、又の『讃』に「コレヲノ廻向ニヨリテコソ、心行トモニエシムナレ」の如きは、一心等流の五念を顯はす證文にして、偈頌の一心より長行の五念を眺めて後念相續行と見る法相なり、『二門偈』の

五念釋の約末の義は全く之に依る。

次に此長行偈頌を自行化他として二人に分けて見る釋例あり、此は偈文は論主の自得の安心を述べたものと見る義にして、『論註』上^四を「偈申己心宜言歸命」の格式なり。依て偈頌の中には、我と云ふ字四ヶ處迄出づる。又長行は論主の化他教化門にして、善男子善女人に對して説法教化する方なり。云はゞ、偈頌は「信卷」の位にして、長行は「行卷」の位なり、同じ五念門でも「行卷」の位に置く時は往生の因行となる。五念を念佛の一行に攝して取扱ふ義門は此邊に依る。此は「利行満足章」の五果より五念を眺めたる義門にして、五果より望めば五念は成佛の因行となる。所謂、本願名號正定業の位となる。

若又、機法を以て之を分たば、偈頌は機の受得にして長行は法の廻施の方なり。故に、論主の一心は長行の「善巧攝化章」の廻向門より施與せられたる願力廻向の信心なり。此義は『二門偈』廻向門の下の所明である。論文は簡固にして多含の故に、諸種の意義を包含し含蓄する。老南條講師は長行偈頌の分齊を剖判するに、七條の義門を建てられたり、委しくは七祖交際辯を披く可し。私若年の頃、宗乘の横堅、餘乘の能所、と云ふ語を聞

きしことあり。近年、宗學に指を染めて、横豎の扱の大切なることを知り始めたり。偈頌は往生の因果、長行は成佛の因果と云ふ。往生と成佛の關係は横なりや豎なりや。亦横亦豎なりや。豎超に對して横超あり、自力他力が横豎の異名と見れば、學問としてのみならず、實際上永劫の浮沈に關する大問題なり。實に忽緒にすべからざるは横豎の水際なり。學問は固より必要のものなれど、囚はれては却て桎梏物となる、學びくゝて學を忘れ、光明の廣海に棹さして他力の風光を賞て、適化無方の妙釋を施し給ふが我祖の御作文である。されば我等は祖師の御聖教に向ふ時、普通の讀書眼の外、更に信の眼を開く必要があると思ふ。

「口」 初に偈頌の大綱を述べれば、一心偈と見ると五念偈と見るとの二途あり。一心偈と見る時は、此二十四行の偈を三分に分別して、初二行を序分とし、觀彼世界相已下二十一行を正宗分とし、後の一行を流通分と分つ。

建章の四句は歸敬序にして、次の我依修多羅等の一行は發起序なり、今其分齊を述べれば、建章の四句は世尊と呼び掛けて、自己の所信を表白して歸敬の意を陳ぶる所なれど

も、普通一般の歸敬序に異なり、自督の安心を述べて、世尊に告げて歸敬し、加被を仰ぐ重大事なれば、此四句に述ぶる所は實に一論の宗要にして、亦論主の眞意の存する所なり。一心歸命は、論主の安心にして能歸の信相、盡十方無碍光如來は所歸の尊號、願生安樂國とは所期の淨土を願生する意で、一心歸命に具する欲生心なり。されば、建章四句は唯一心の安心を明すのみなり。

次に我依修多羅の一行は、三部大乘修多羅に依て願生偈を作りて、三經廣散の義を總攝せんと述ぶるの故に、次の正宗を引起す發起序である。次に觀彼世界相已下が一論の正宗分にして、二十九種の莊嚴を觀知する一心の安心を述ぶる、其中二段と分れて、初十二行半が依報莊嚴十七種なれども、初の清淨功德は總にして、其他の十六種は別なれば、別を總に收むれば觀彼世界相の一句に收まる。後の八行半に正報の莊嚴、主伴合して十二種を説けども、伴を主に攝して佛莊嚴八種となる、此八種の中、尤も大切なるは不虛作住持の功德故に、要は唯觀佛本願力の一句に極まる。如是く、依報莊嚴は清淨功德に收まり、正報莊嚴は不虛作住持に收むることは、長行釋の第一「願偈大意」より見込むも

のにて、「願偈大意」に觀見願生等とは、觀佛本願力と觀彼世界相とを擧げたるものなり、此に云ふ依正二報の觀の意は、安心觀にして、「大意」の觀見と全く同意にして、二十九種莊嚴の觀知は、初の一心歸命の信相を廣うしたるものなれば、一偈の始終は、一心歸命の安心を述るものとなる。乃ち、建章の盡十方無碍光如來を廣うしたが正報莊嚴十二種、願生安樂國の安樂國を廣うしたが依報莊嚴十七種、共に一念の信相にして、安心に約するものなるを顯はして觀の字を附してある。而して願生の二字は、依正二報功德の中間に「故我願生彼阿彌陀佛國」とありて、兩方へ通はしてある、乃て建章四句を擴げたが二十九種莊嚴の觀知である。

盡十方無碍光如來	正報莊嚴代表	觀佛本願力	見阿彌陀佛
建章安心	安樂國	依報莊嚴代表	觀彼安樂世界
願生	故我願生彼阿彌陀佛國	願生彼國故	願偈大意

前來の所説を逆に言ふと、此願生偈は何を明すものかの間に答へて、直截簡明に「觀彼安樂世界見阿彌陀佛願生彼國故」(願偈大意)と云へり。觀彼安樂世界とは、偈文の觀

彼世界にして、初十二行半に説く依報莊嚴を觀すること。見阿彌陀佛とは後八行半に説く正報莊嚴を觀知することである。觀とは起行觀に非ず、安心の觀である、見とは眼見に非ず、心に浮べ見ること。「一多證文」註「觀ハ願力ヲコ、ロニウカヘミルトマフス、マタシルトイフコ、ロナリ」とあるが、此意を詮はした御釋である。「化卷」(「自釋」註)に「應觀知本願成就盡十方無碍光如來也」と同じく、參るべきは安養の淨土なりと思ひ定むるは依報の觀、頼むべきは彌陀如來なりと觀知するは正報の觀なり。同じく「證文」註「マタ知トイフハ觀ナリ、コ、ロニウカヘオモフヲ觀トイフ、コ、ロニウカヘシルヲ知トイフナリ」文此等是一心の相を詮はす觀知の義なり。次に願生彼國故とは、偈文では「故我願生彼阿彌陀佛國」とある。此二句は依報と正報の中間に在りて、前後に通ずる文故に、「大意章」では後へ廻はして願生彼國故と云つたもの。

如是く、「願偈大意」と偈文とを對照すれば、工合能く合ふ、之を論主の一心に望むるに、正宗分の正報觀は論主の一心中所歸の盡十方無碍光如來に收まり、其依報觀は安樂國の三字に收まり、故我願生彼は願生の二字に收る。斯く論主の一心に撮めて見れば、

『淨土論』一部は一心の外なし。起觀生信已下五念門を明すと雖も、一心より流出せし物なれば、本に歸すれば偈頌の一心の外なし、故に、論主は廣大無碍の一心を宣布す（「證卷」と讚嘆し、或は「信卷」別序には一心華文と稱揚し給ふ。此「二門偈」の初十八行は一心偈の意を讚頌し給ふものなり。上の如く一論を一心偈と見るは、我祖が「偈申己心」の意を安心に約して解説されし宗祖獨特の體驗的解釋法である。

次に、一偈を五念偈と見る解釋法は、長行より偈頌を眺めたる解釋法にして、『論註』に出る釋體である。長行は解義分なれば、長行に依て偈頌を釋するは極めて當前な解釋法である。此法に依るときは、一偈は正宗分計りて三分は立たぬことになる。其故は偈の始の歸命は禮拜門、盡十方無碍光如來は讚歎門、願生安樂國は作願門、我依修多羅の一行は成上起下にして、觀彼世界相已下の二十一行は觀察門。我作論說偈の一行は廻向門にして、二十四行全く五念門のみを明す偈文となる。

問云、世尊我一心の句は何れに屬すべきか。

答云、『論註』上^三第一行四句、相含有^三三念門、上三句是禮拜讚歎門、下一句是作願

門」とありて、世尊我一心の句を禮拜門に屬するが如く見ゆれども、次下^四の隨釋の處では、此一句を除きて歸命を禮拜門、盡十方無碍光如來を讚歎門に配當してある。一心と五念は心行本末にして信火行烟で、心行不離を顯はす爲に、上には相含三念門の中へ一心を攝し、又安心と起行と差別あることを顯はす爲に、下には一心を起行三念の外に出し給ふ。されば一心は、五念の外に在て起行の五念を引起す根源なりと可知。此の如く一偈を五念に配當する釋例は『論註』の解釋法にして『淨土論』の「起觀生信章」より見たるもの、又一心偈と見るのは、攝末歸本論にて「涅槃眞因唯爲信心」の佛願の正意より『淨土論』を觀破し給ふものにて、『論』では「願偈大意」より見込むもの、これは我祖の常教たる信心爲本の釋例である。

「ハ」次に長行の大要を云へば、先づ『論註』の釋に由て『論』の當意を釋するに、十重の科段あり、第一「願偈大意」は總にして第二已下九章は別なり。別の九章の中前八は因にして後一は果である。前八の中、文相に依れば「起觀生信」と「觀行體相」は、別して凡夫に

約して五念の行を修する様を知らせ。第四の「淨入願心」は成上起下にして、上に明した淨土の莊嚴は、皆悉く願心莊嚴にして、法藏願力の所成なることを顯はして上を成じ。下に向つては、菩薩の往生も亦願力他力に依ることを顯はして下を引起す。第五の「善巧攝化章」已下の五章は、菩薩の往生の因果を明す、就中、「善巧攝化章」は五念の行を巧方便を以て廻向することを明す、此は所修の行の方、「離菩提章」已下の三章は菩提心の因を明す、此は能修の心の方なり。此四章相依りて、心行具足して「願事成就」の果を得る。願とは菩提心なり、行とは五念の行なり。願行成就して往生の準備が出来て出沒自在の用迄用意された所。次に「利行満足章」では、凡聖共に淨土にて漸次に五果を成就して、任運無作に五門の行を修して、自利々他成就して無上菩提を證る。此が長行十章を文相通りに見たる解釋である。別の九章の内が、凡聖二種に説き分けてあるより見れば、總の「願偈大意」は、總じて凡聖に通じて明すものなることは當然である。

已上は文相の表面を見て、凡聖に分けて見たのであるが、十章を半分づゝ切取ては甚だ拙である。一度は凡夫に約し、又一度は聖者に約して、十章を通覽するのが本格であらう。

らう。

先づ、凡夫に約して見れば、第一の「願偈大意」の觀見願生は、歸命の信相である、觀見願とは彌陀を頼み極樂を願ふ相で、觀知觀見である、頼むべきは彌陀如來と知り、參るべきは安養淨土と信ずる相で、夫に具はる欲生心が願生である。其の觀見を抑へて、次章に起觀と云ひ、願生を受けて生信と云つたものなれば、第二の「起觀生信章」は觀見願生の方法を教へたものなり。實際に見佛が望みならば、安樂淨土へ參るがよい。夫に就ては、五念門を修せよと教へたのである。然るに、五念成就畢竟得生とは五念の力用を示した語で、五念々佛には若不生者の約束がある故に、稱名で屹度往生が出来ると教示した、此教示に由て行者が起觀生信の信心を起す。此場合起觀と生信とは行者受得の信相を物語る言葉で、起觀即生信である。此信心が三業に顯はれたが、次の文に出づる五念相續行の起行である。其五念門中、觀察門を委しく開示したのが、第三の觀行の體相である。此下には二十九種の莊嚴が列ねてある。此三嚴二淨の莊嚴は、三經所説の淨土の現相である。今初進の學人の爲に其名稱と簡單なる解説を附す。

依報器世間十七

總別

- 第一 清淨功德 清淨涅槃の妙果を得る徳。
- 第二 量功德 淨土の量廣大なる徳。
- 第三 性功德 純無漏業所感の淨土。(果中説因)
- 第四 形相功德 光明を形相とする徳。(形者體也)
- 第五 種々事功德 宮殿樓閣等の種々事皆無漏清淨。
- 第六 妙色功德 淨土の色相(顯色)に約す、上の二は形色)の勝れたること。
- 第七 觸功德 物、身に觸れて勝樂を生ずること。
- 第八 三種功德 地水空の三種莊嚴の勝れたること。
- 第九 雨功德 晝夜六時に寶華寶衣を雨して供佛に不足なきこと。
- 第十 光明功德 淨土の依報に具はる光明が世間の愚痴を除く。上の妙色は光相に約し今は光用に約す。
- 第十一 妙聲功德 聲とは名なり。安樂淨土の依正の名を聞け

ば攝化の益を蒙る。



正報衆生世間清淨

主莊嚴佛莊嚴八

- 第十二 主功德 勝れた主(彌陀)の坐す世界。
- 第十三 眷屬功德 平等一味の聖衆(眷屬)の棲む國。
- 第十四 受用功德 聖衆の法味樂を受用する徳。
- 第十五 無諸難功德 聖衆の無難受樂する徳。
- 第十六 大義門功德 一味平等の悟を開く世界。
- 第十七 一切所求満足功德 志願満足の徳。
- 第一 座功德 彌陀尊の坐し給ふ蓮臺。
- 第二 身業功德 佛の相好光明の功德。
- 第三 口業功德 彌陀の名號や説法の功德。
- 第四 心業功德 佛心平等にして攝化衆生の功德。
- 第五 大衆功德 聖衆の尊高を以て主佛の勝を比顯す。
- 第六 上首功德 彌陀は聖衆の上首にして獨尊無比の徳。
- 第七 主功德 主として一切に恭敬せらるゝ徳、上は無

比の一尊に約し、今は主伴相對して多くの扨從に遠敬されることを表はす。

- 第八 不虛作住持功德 佛力住持して虚作なき徳。
- 第一 不動應化徳 本身動ぜずして十方世界に應化する徳。
- 第二 一時遍至徳 前後遅速なく十方に至る徳。
- 第三 無餘供讚徳 諸佛を悉く供養し讚歎する徳。
- 第四 遍示三寶徳 十方に三寶を示現して濟度する徳。

伴莊嚴
菩薩莊嚴四

三嚴とは、依報と正報の主伴莊嚴を言ふ、此は「觀行體相章」の分ち方、二淨とは器世間と衆生世間との二種清淨、此は「淨入願心章」の分け方である。如是く、淨土の三嚴二淨を行者の心に想ひ浮べて、平生に相續して御慈悲を喜ぶが觀察門の起行である。次に、此三種莊嚴に由て飾り建てられた淨土は、願力成就の報土なれば、法藏菩薩の清淨願心より打建られたものぞと示すが、第五の「淨入願心章」である、二種清淨の淨土は、卷て收むる時は、法藏の願心に攝入すると云ふ意である。此迄は、願生行者の自利、第六の「善巧

攝化章」已下四章は利他廻向門の相である。文相は非常に高尚なれども、下凡の行者としては如是き法徳を得て、冥に心中に藏する丈で、顯現は肉身を捨てた後のこととなければならぬ。若行者の身分相應に約せば、教人信の廻向である。乃て五念門が具足する、其五念の根元を爲す信心と合せて、信行具足して願生の業成就して、淨土往生の用意の出來たが第九の「願事成就」にして、得生の後に五果を經歷して、奢摩他毘婆舍那の自利行と遍示三寶の利他行と二利圓滿して、無上菩提を悟ると云ふのが第十の「利行満足章」である。「善巧攝化章」已下菩薩と呼び上げて、菩薩を相手として説示されてあるが、是は別な人ではない、前の善男善女が念佛門に入りて、淨土の菩提心を起せし行者を菩薩と呼びたるもので、特別の人を指すのではない。上來下品の機に約して十章を略解し畢る。前來は凡夫に約して十章を解したが、之より菩薩に就て解せば、第六「善巧攝化章」已下菩薩を所對とするにより、此菩薩を色々に解釋する、『顯深義記』に三義を出す、一に論主所共の聖者と見る、聖者が論主と同じく他力門に入りて一心五念の行者となり、二利圓滿して佛果に至ると云ふ、但し此は淨土の傍機なり。二に還相廻向の菩薩と見る、此

は祖師が此文を『證文』に引用して還相廻向の證文にし給ひしより立てたる義なり。三に『論註』卷末の他利々他の深義より逆次に讀直して、一論の始終を如來成道の因果を明すものと見る。『論』の最後の自利々他成就を、如來の自利々他と見る所より推せば、速得菩提は法藏の速得菩提なれば、(利行満足章)其因行たる五念門は固より法藏菩薩の五兆の修行(起觀生信)、五念永劫の修行に依て三嚴二淨の淨土を建立し(觀行體相)たれば、安樂淨土は法藏願力の所産(淨入願心章)である。次の「善巧攝化章」は、其淨土へ引入りたいの利他行と、往生の因行を廻向することを明す大悲の門である。次の三章所顯の妙樂心は、法藏菩薩の不斷の努力たる無上菩提心、此心と五念の行と相成して願事成就し、無上正覺を成就して阿彌陀佛となる。されば、一論の始終は法藏成佛の因果、之を衆生に廻向するが故に、一切衆生をして速得菩提せしむる。されば、一論の所詮は、本に約すれば法藏成佛の因果、末に約すれば衆生即證の始終を明すものと見たまふが此『二門偈』の所明である。此義を顯はすが本偈の「菩薩入出五種門」已下三十行の所明にして、『論』の解義分の意を述讀し給ふ所である。

五 今偈の來意

此偈は何の爲に製作し給ふや、乃ち造偈の目的を考察せんとするなり。之に付て、海東講師の『大意』には、直ちに『本論』註論の奥旨を開顯せん爲に、此偈を造ると云ふ、香月院は更に之を敷演して三義を擧ぐ、

- (一)に自信教人信報佛恩の爲の故に、此は御一代の製作に通ずる造意なり。
- (二)に彌陀の佛徳を讚歎せん爲の故に、この佛徳讚歎の爲に偈頌を作ることとは、印度已來の風習にして、例へば、『大經』の嘆佛偈の如きは佛徳讚歎の爲に作られたる偈文なり、祖師の御作文の中でも、『三帖和讚』及び『二門偈』の如き偈讚は、全く佛徳讚歎の爲の御製作なり。

(三)に他力廻向の義の基づく處を示さんが爲の故に、他力廻向の義は一宗の大本なれば、『廣』略文類に具さに其義を宣述し給ふと雖も、其義の基づく所は何處にあるやを審かにせず、然るに、我祖『二門偈』を著はして、他力廻向義の泉源は全く『論』註

にあることを示し、本論に顯はれたる歸命の一心も起行の五念も、「善巧攝化章」の密意より逆觀すれば、皆是れ法藏菩薩の大悲心より廻向されたるものに非ざるはなし、一心の安心は申すに及ばず、禮拜も讚歎も作願も觀察も、本に就かば法藏因中の所修に非ざるはなし、之を衆生に廻向し給ふが故に、衆生は之を信じ、之を行ずるなり、往生の因、既に願力廻向なれば、往生の證果の願力廻向なることは理在絶言、豈啻往生の因果、願力廻向なるのみならんや、還來穢國の利生の用たる還相も亦、他力廻向に非ざるはなし、故に『正信偈』には、「往還廻向由他力」と云へり、斯く他力廻向義の基づく所を示すが『二門偈』なり。

此義何處に顯はれ居るぞと云へば、『論註』卷末の他利々他の釋是なり、此釋によつて本論所明の行者の自利々他が直ちに如來の自利々他となり、如來の自利々他の功德は、永劫の修行に由て成就せられ、出來上りたる南無阿彌陀佛の名號の功德を、第五の廻向門より廻向し給ふ、此功德を全領せる衆生は、十八、十一、二十二の三願の約束に頼りて、往生と必至滅度と還來穢國との往還二種の利益を得る、之を我祖は「證卷」終に「宗

師顯示大悲往還廻向、慇懃弘宣他利々他深義」文との給ふ、此義を顯はす爲に『二門偈』を作り給ふ、依て本偈に「願力成就名五念」と云ひ、「入出二門名他力」とのたまふ。以上三義の中、第一義は一般の造書に通ずる來意、第二は和讚及偈讚に通ずる來意、本偈の大味本の表紙の扉に、『稱讚淨土經』の百千俱胝讚徳の文を書付け給ふ思召を察するに、本偈も亦佛徳讚歎の爲の御製作なること、昭乎として明かなり、第三は本偈に局る來意にして、本宗他力廻向義の根本は、遠く法藏因中に用意せられたる三業二利五念の功德より成ることを示さんが爲に、本偈を製作し給ふものと伺ひたきことなり。

六 一部の大意

大意と云ふは、此偈一部を貫通する根本思想を指す場合と、今一は一部の梗概を述ぶるを大意と云ふ時との二の意味に、古來用ひられたり。

第一の場合は、旨歸と云ふと同じ意味にして、孔子の教が忠恕の二字に歸するが如く、又、眞宗の安心が信因稱報の四字に盡きるが如く、此書一部の根本思想を考察するを云

ふなり。之に就き、海東講師は他力廻向の教行信證を顯示するに在りと示され、更に香月院は之を敷演して、入出二門、他力廻向を明すを以て大意とすと辯ぜられたり、其説の意は、此一偈の中、天親・曇鸞・道綽・善導の四章あれども、天親曇鸞の二章が主にして後の二章は伴なり、乃ち前二章の所明を助成、若しくは相承する分齊なれば、主意は前二章に盡きる、就中、天親章四十八行は、入出二門を明すにあり、故に結文に「則是名爲入出門」と云ふ、次に曇鸞章十行は、二門の他力廻向なる旨を明すにあり、故に結文に「入出二門名他力」と云へり、然らば本偈一部の大綱如何と問はゞ、入出二門他力廻向を明すに在りと答ふべし云。

次に第二の場合に於ける大意は、『正信偈大意』若しくは『四法大意』の如く、其書一部の梗概を略解するを云ふ、今、此義に依りて本偈を略解すれば、天親章四十八行の中、初十八行は『論』の偈頌の意に依りて一因一果を明す、即ち一心の一因に依て、報土往生の大果を感ずることを明す、次に『菩薩入出五種門』より已下二十六行は、長行の意に依りて五因五果を明す、本に約すれば法藏菩薩の因果、末に約すれば行者の五因五果なり。

「無碍光佛因地時」已下四行は、法藏菩薩の一因一果を明す、法藏の一因とは、智慧方便具足の妙樂心なり、此心に導かれて五念の因行を成就し、五果即一果の無上道を成就し給ふ。此法藏菩薩の一因一果と、最初に出づる行者の一因一果との關係を顯はすが、次の曇鸞章十行二十句なり、法藏菩薩の爲物大悲の願心は、行者に徹到して一心歸命の信心となり、此心は名義相應の一心なるが故に、如實修行相應と名く、此心に依りて速得菩提の大果を得るは、全く本願力の廻向に依るとて、他利々他の深義を明し、衆生往生の因果共に、他力に因ることを明すが曇鸞章の所明なり。この「入出二門名他力」の義を相承して、一代教を聖淨二門に分ち、聖道自力淨土他力と決判し、他力の三信相應の行者は、佛の本弘誓願に依るが故に容易く無上道を證得することを得る。故に捨聖歸淨して易行の大道に出てよと勧め給ふが道綽章の意なり、又善導大師は他力に依るが故に頓證菩提と説き、此道こそ實に眞實成佛の大道、五乘齊しく本願の一乘に歸入して、念佛成佛するは弘願一乘の妙益なりと、他力による眞實の四法を明して、衆生往生の因果、共に願力廻向の義を弘傳し給ふと顯はすが、最後の善導章の大意なり、故に最後に「自然即

證」の四字を安ず、自然とは願力自然を表はす他力相承の標幟なり^云。

要するに、本偈の大意は、能詮の文に就かば、天親章は一因一果、五因五果、約本約末の因果を明し、曇鸞章は行者の入出二門共に他力なることを辨成し、道綽章は聖淨二門、難易二道、自他二力を分判して、易行他力を勸進し、善導章は眞實の四法に約して、之を弘傳し給ふことを明すが本偈一部の大意なり。又、所詮の義の終歸する所に依れば、入出二門共に他力廻向の義を明すにありと云ふべし。

七 本偈製作の年時

次に製作の年時を案ずるに、古來、此偈の御眞本と稱するもの二本ありと傳ふ、一は越前大味浦の法雲寺本にして、二は常州鬼長の聖徳寺本なり、此鬼長本は、偈の終りに「八十歳三月四日書之」とあり、大味本の終りには、「建長八歳三月二十三日書寫之」と云へり、建長八年は我祖八十四歳の時なり、されば、鬼長本は草稿の原本にして、大味本は四年後の書寫本なれば、清書本ならんとは多くの史家の一致せる意見なり、随つて兩

本の内容を比檢するに、大味本には本文の初、題號の次に、「無量壽經論」已下五行の文を増加し、又天親章讚歎門の下に「則斯無碍光」已下の一行と、曇鸞章の「泥中生佛正覺華」已下の一行を添加せり。加之、同一文章にても送假名の附方、即ち讀方によりて、文外の餘意を發揮する箇所少からず、如此、再治添刪の跡の見ゆるは、大味本は清書本たるの證左なり。然るに、伊藤義賢氏の祖典三書合本の説によるに、鬼長本は御眞本と傳へ來れるも、實は原本に非ずして複寫本なりと云ふ、原本は已に久しき前に散逸し、現存の本は徳川時代に複寫せしものにて、筆蹟も祖師の筆に似ずと云へり。又、大味本は我祖が高田の信證（眞佛房の子）に其名を自署して與へられしものにて、原本は我本山内事の寶庫に保管せらる、此本は、大正三年住田講師が他本と比較對照して、法藏館より出版されたり。今回は内事局保管の御眞本の複寫を許され、此本によりて講演するを得ることは實に難有き仕合せなり。

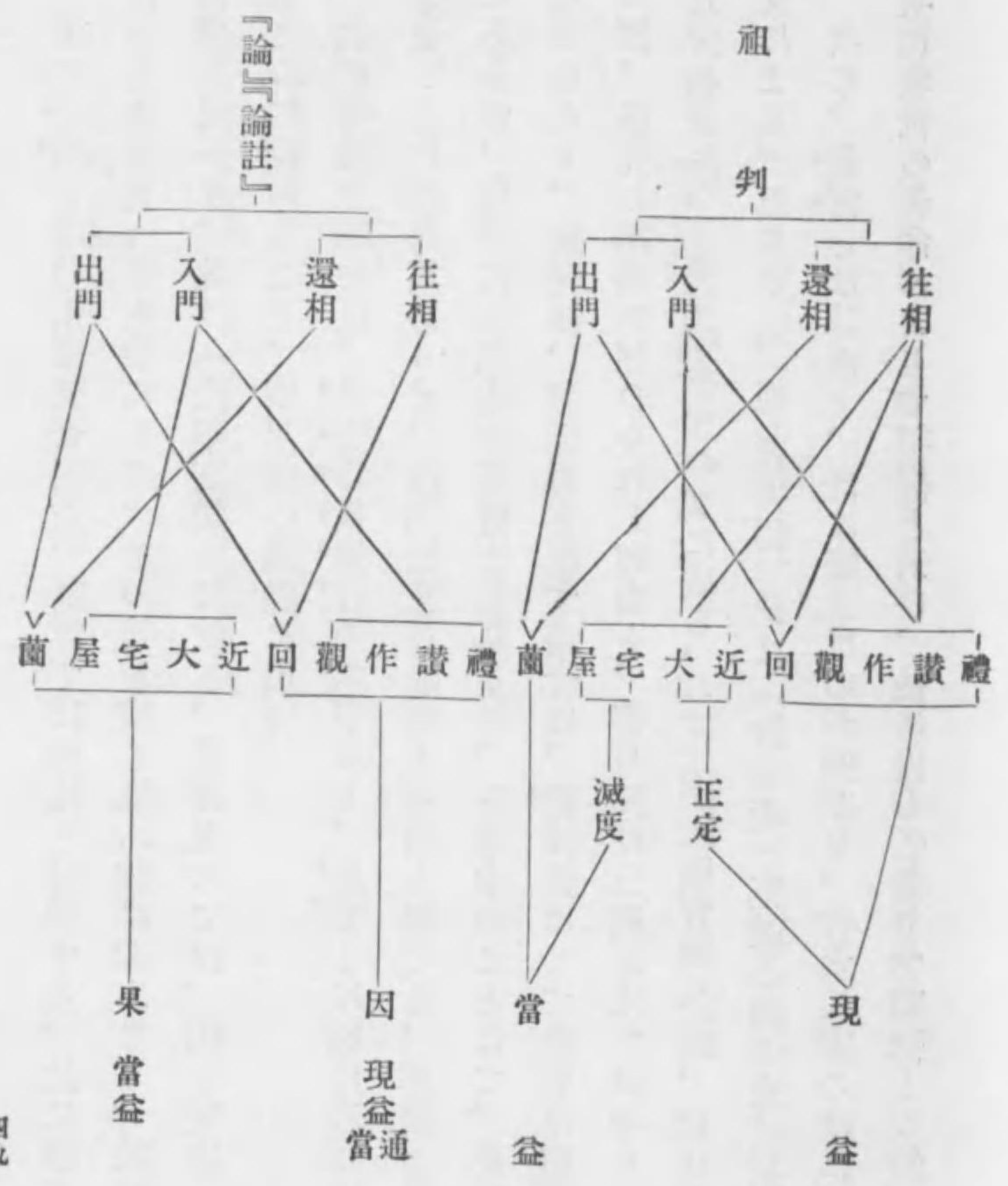
八 題目撰號の解釋

先づ、題號を釋せば、入出二門を偈讚する故に『入出二門偈』と云ふ、入出とは、其體因果十門を指す、入出の釋名に就き、入即往相、出即還相として九入一出と見たる説あり。『論註翼解』、『窺斑錄』、『參考』に出づ、此は謬なり、『論註』の所明に合せず。『二門偈大意』^三『流情記』^上右^三では、入名自利、出名利他の義なり、此義に依れば、五念五功德各々入出ありて、共に四入一出なり、此説能く『論註』に合する、五念門の出入は『註』^下初^五「前四念是入安樂淨土門、後一念是出慈悲教化門」^(四八)と云ひ、又『論註』^九右^九「初四種門成就入功德、第五門成就出功德」と云へるは、五功德門の四入一出の釋文なり。此の如く、入出を自利々他と釋することは、天台で云ふ從假入空と從空出假が好き例なり、妄有を破して、空理を證るを入空と云ひ、空觀より起て、差別の俗諦を見るを出假と云ふ。即ち、入空は自利、證入の方、出假は利他、益物の方なり。『流情記』^三右^三云く「入謂入眞證果、出謂出假利生」。此釋依るべし。

今、此五念門の出入も丁度その如く、禮拜等の前四念の自利の行を修して、行者の心が淨土に向ふて自利の果に入るのを入と云ひ、又行者の心が淨土に向はず穢土の同行に向ひて、常行大悲の行を爲すを出と云ふなり、又、五功德門で云へば、前四功德は近門より宅門、屋門と自利證入の方なれば、入と云ひ、第五蘭林門は、還來穢國して利他度生する故に、出と云ふ、されば、入出は自利々他の異名にして、五念と五功德に通じて、各入出二門ありと心得べし。次に、二門とは、門は出入自在の義にして、總じて五念門と云ふ時の門の字は出入の義なり、即ち前四念は入の義、後の一念は出の義なり、五功德門も同じ事にて、前四功德は入にて、第五功德は出なり、仍て、入出二門とは入出即二門にて、開けば因果十門となる、因果十門とは、衆生往生の因果なり、『論註』卷末の指南に依れば、衆生の往生は全く願力の廻向に頼る。今、如來二種の廻向に依りて、因果十門即入出二門を満足することを偈讚する故に、『入出二門偈』と云ふなり。

因に、入出と往還の關係を辯ぜば、往相還相は『論註』^下「起觀生信章」^(下五)右^五に出て、五念門の中、第五の廻向門より開出せり、行者の往生前の利他を往相と云ひ、往生已後還來穢國して度生するを還相と云ふ。されば、入出の中では、出門に屬する利他行なり、故に入出は廣く、往還は狭し、入出は因果十門に通じ、往還は第五の廻向より出で、

因果の第五門のみに局る故なり。但し、此は『論註』の上のことなり。我祖に在りては、往還を衆生に約し、廻向を如來に屬して、往還二種の利益を、如來より廻向し給ふことと見たまう、依て、『御本書』教卷初に「謹案淨土眞宗有二種廻向、一者往相二者還相、就往相廻向有眞實教行信證」文往相廻向の中に教行信證あれば、衆生往生の因果悉く往相の中に攝在する。されば、五念門と五功德の中、前四功德迄が往相の中に攝せらるゝ、而して出の第五門は還相廻向なれば、宗祖の往還二廻向の中には因果十門を攝することになる。されど、此は所廻向の體に約する方で名義釋の上では入出即往還ではない、何となれば、五念門の中の第五廻向門の如きは、往相にして而も出門なるが故なり。



次に偈頌とは、偈は梵音偈陀、新譯では伽陀と發音する、此に翻じて頌と云ふ、頌とは「美也歌也」、語を美にして、その徳を嘆じ歌ふ故に云ふなり。故に、「大意」には華梵並舉と云へり、此は『法華玄讚』に依る、舊譯家にては、偈を梵語とすると、漢語とするとの二説あること、細川師の講録に出づ。

次に撰號を釋せば、愚禿釋親鸞作の六字なり、愚禿とは姓にあらず、稱謂なり、『釋氏要覽』上に稱謂篇ありて、沙門比丘貧道等の稱謂を擧ぐる、稱謂とは、稱へ名にして姓にあらず、後序に「以禿字爲姓」とあるは、左遷中のことにて、此時は禿の一字を姓となされたり、勅免後、愚禿釋と記す場合は、釋は姓にして愚禿は稱謂なり、我祖御一代の間、愚禿の稱謂を用ひられし理由を、香月院は三義を以て辯ぜられたり、一に示末世凡夫行狀故、此は嘆徳文の文に依る、二に顯本願實機相故、此は次の下根往生實機の文による、三に示不現賢善相、此は『散善義』至誠心釋の意に依る。

次に、親鸞とは諱なり、此は讀上げぬが例なり、吉水入室の時は、綽空と名付られ、次に救世の告命によりて善信と云ひ、後に自ら名乗りて親鸞との給へり、三名の中善信

は房名にて假名なり、親鸞は實名なり、『六要』一左可見。

九 一部の分科

入出二門偈頌分科



婆藪盤豆
世親菩薩
曇鸞和尚

世親
一心
無碍

◎二依註論示他力二

初標師釋
二述釋義五

曇鸞

初明^三五念^一是佛^一利他^一
二明^下行者得^三佛^一廻施^二相^上
三示報土頓證
四示還相利益
五總結他力

五四

願力
如實
煩惱
淤泥
斯示

◎三兼舉^三相承^二助成^二

初舉西河相承^二

初標師釋

道綽

二述釋義^三

初引經決^三難證^一
二正明^三自力^一相^一

月藏
在此

初聖道自力^二

初末法通入

當今

二淨土他力^二

二本願勝益^三

當今

初彌陀名願
本弘誓
是以諸

初名願應機^二
二對機勸信
三往生證果

縱令
必得

「三結易行他力

則易

二舉光明相承^二

初標師釋

善導

二述釋義^四

初真實行

念佛

二真實教

即是

三真實信^三

初難信

初二佛善巧

四真實證

到安

三稱讚

二獲信^二

真宗
釋迦
具足
斯人

第一章 正明二門

第一項 二門本據

無量壽經論一卷 元魏天竺三藏菩提留支譯
 婆藪盤豆菩薩造 婆藪盤豆是梵語
 舊譯天親此是訛 新譯世親是爲正
 優婆提舍願生偈 宗師是名淨土論
 此論亦曰往生論 入出二門從斯出

此五行の文は草本になし、大味本に出づる所にして、信證に授與の時、此文を添加して二門の本據を教へ給ひしものなり。『無量壽經論』の名は『義林章』三身章七本_二研に出づ、但し經の字なし。『歷代三寶紀』_二杯に此名出づ。○新譯家より舊譯の天親の譯語を破

すこと『西域記』_{五十五}に出づ、○元魏とは南北朝の時の北魏なり、三國の魏を曹魏と云ふに對して、今この北朝の魏を後魏、又は元魏と云ふ、○宗師とは善導大師にして、『玄義分』_{五十一}『禮讚』_二に『淨土論』の名出づ。○『往生論』の名は、近く『選擇集』本_三に出づる、他師では淨影の『觀經疏』、天台の『十疑論』並に『觀經疏』、至相の『孔目章』慈恩の『玄贊』に出たり。

第二項 天親讚_二 初一心讚 二二門讚 初中二初歸佛相
 二明觀察相

世親菩薩依大乘 修多羅眞實功德
 一心歸命盡十方 不可思議光如來
 無碍光明大慈悲 斯光明即諸佛智

是より以下、天親讚が大科二段と分れて、初、世親菩薩より功德大寶海迄の十四行は、『論』の總説分の意に依て一心の安心を述べ給ふ、其中、初三行は正しく論主が一心に彌陀に歸命する相を述ぶる、次の觀彼世界已下の十一行は、一念の安心に具はる觀察淨土

の相を明す、乃ち、淨土の莊嚴を心に浮べ見る聞思の觀を擧ぐるなり、故に、此十四行は残らず一心の安心を述ぶるなり。先に述べし如く、我祖は『淨土論』の總説分を一心偈と見給ふ故に、此一段は安心として解さねばならぬ。仍て此中に、二度迄觀の字を使ひ給へり、此觀は安心觀にして、起行門の相續の上の觀に非ずと知るべし。次に、菩薩・入・出・已・下・三十行は、解義分の意に依て因果十門を明し給ふ。之が、今の正所明の入出二門なり、此二門を明すに、約本約末二重に明し給ふ。行者所修の五念門は、何より起るかと其本を求むれば、一心等流の五念なれば、一心の安心より流れ出る五念相續の行なり、今五念の起行の出る根本を示さんが爲に、五念段の前に一心の安心を明し給ふなり。行者に在りては、一心の安心に催されて五念の起行を起す、彌陀に在りては、法藏因中に衆生愛惑の一念の願心より、三業二利の五念の行を修し給ふ、五念修行の功を一名號に攝歸して、聞名の一念に行者に廻向し給ふ故に、彌陀の願心が行者に徹到して歸命の信心となり、永劫所修の五念は、行者に顯れて信後相續の報恩行となる。是の如く、行者の一心五念は、元、法藏所修の五念の顯現なりと明すが『二門偈』の所明なり、實に他

力廻向の元手は、法藏因中の五念の行業に在ることを示して、衆生往生の因果は全く佛力成就なることを味得し、慶喜奉讚し給ふが天親讚の意なり。

○世親菩薩依大乘修多羅眞實功德、此一行は論主の一心を明すに、三段と分る、中、初に能所依を標する一段にして、論主が一心に歸命するは、何に依て歸命するかを示す一段なり、世親菩薩は能依の人、大乘修多羅眞實功德は所依の法、世親論主は、大乘經所詮の眞實功德たる名號に依て、信心を得給ふことを顯はすなり。

○世親菩薩の出世の年代に三説あり、一に、佛滅九百年説、『唯識述記』一本十『同了義燈』一本四等に出づ、二に、一千年説、此は『西域記』二十五『同』五十一等の説なり、三に、一千百年説、此は『舊俱舍』の序文に出づる慧愷法師の説なり、以上三説あれども、蓮師は九百年説を採用し給ふ。『正信偈大意』研六云。

○大乘修多羅とは、修多羅に總別二種あり、十二部經中の隨一の修多羅は、直説の修多羅にて別修多羅と云ふ、之に對して、三藏の中の修多羅を總修多羅と云ふ、即經藏のことなり、今、大乘修多羅とは、大乘教中、殊に彌陀の功德を説く三部修多羅を指して大

乘修多羅と云ふ、『銘文』本^九可見、即ち、一致門に依る三經の所説を指して、大乘修多羅眞實功德と云ふ。

○眞實功德相とは、之を釋するに『論註』に二釋あり。

一に、上^六右「以如來即眞實功德相故」と云ふ、此は無碍光如來の當體を指して、眞實功德相と云ふ、何となれば、無碍光如來は三種莊嚴自利々他の諸徳を、具足して持ち給ふ故なり。

二には、上^六左「從菩薩智慧清淨業一起莊嚴佛事依法性入清淨相是法不顛倒不虛僞名爲眞實功德」と云ふ。此時は淨土の二十九種莊嚴は法藏菩薩の無漏清淨の業より起る故に、之を眞實功德と名づく、即ち、法藏菩薩が眞如を證得して、法性の儘を飾り建てたる淨土の莊嚴なるが故に、二十九種の一一が法性に隨順して、相即相入して虚偽顛倒を離れたる清淨眞實の功德なる故に、眞實功德相と云ふ。

此の如く二釋を設くる所以は、『論註』では我依修多羅等の一行は、優婆提舍を成ずると成上起下との兩意を含む文にして、優婆提舍を成ずるとは、元來優婆提舍は佛教の名

なり、何故に菩薩の論に優婆提舍の名を附するや、云く、淨土の三種莊嚴を説く三經の所説に相應して、淨土の體相を説く論ゆへに、經と同じく優婆提舍と云ふ、此義を顯はすが、第二釋の二十九種の莊嚴を眞實功德相と云ふ釋なり。次に成上起下とは、論文の上では「我依」等の一行は五念門の中間にありて、上には禮讚願の三念門あり、下に觀察廻向の二念門あり、中間にある眞實功德相は無碍光如來の佛體にして、上の三念の相手も後の二念も、眞實功德の無碍光如來に對して修行するなりと顯はす、即ち、衆生の爲に願を起し、無量劫に功德を積んで、本願を成就し給ふ彌陀如來なれば、此如來に對して五念門の行を修すると、中間に在て五念門の所依を示す文と見るが、第一釋の無碍光如來と見る釋なり。

然るに、我祖に來りては、『銘文』本^九左「眞實功德相トイフハ誓願ノ尊號ナリ」との給ふ、此釋『論註』に違するが如きも、我祖は深く『註』意を探りて釋し給ひしものにて、『註』上^五には三種莊嚴の體を名號と定めて、名號經體と判じ給ひ、又上^三在緣釋には、「阿彌陀如來方便莊嚴眞實清淨無量功德名號」と説きて、一切の功德、名號に攝在するを示し

給へり。されば、眞實功德とは、相に約すれば二十九種、體に約すれば名號と心得べし。

問云、眞實功德に三義ある中、今、此偈は何れの義に依るべきや。

答云、此偈は、一心歸命の前にある眞實功德なれば、誓願の尊號と釋するを至當とす、即ち一心歸命の安心が爲の所依を顯はし給ふものなり。

問云、『論』では我一心は前にあり、修多羅眞實功德は後に在り、今、逆次に置き給ふは如何。

答云、是は義門の左右なり、本論は成上起下を顯はす爲に、中間に眞實功德の如來を置きて上の三念門を成じ、下の二念門を起す。又、此偈文は全く願成就の經意を顯はす、初に世親菩薩とあるは諸有衆生を含む、其故は、『論』の始に我一心と名乗り、『論』の終に普共諸衆生との給ふ、是論主の自行の一心、即ち、衆生化他の安心なり、由て、『正信偈』には「爲度群生彰一心」と云ひ、『和讃』には「論主ノ一心トトケルヲハ、曇鸞大師ノミコトニハ、煩惱成就ノワレラカ、他力ノ信トノヘタマフ」との給ふ。

次に、依の字は成就文の聞の字に當る、依とは相應の義なり、是れ函蓋相稱を顯はす、

之が佛願の生起本末を聞て疑なき相なり、依て、『略文類』の終りには「常沒凡夫人、緣願力廻向、聞眞實功德、獲無上信心、則得大慶喜、獲不退轉地、不令斷煩惱、速證大涅槃」矣」との給ふ、此文に依れば、此偈の眞實功德の四字が成就文の其名號の三字に當る、されば、次の一心は至心と欲生を含みたる三信即一の信樂、成就文の一念なり、故に、『信卷』末(『自釋』註)「言一念者信心無二心」故曰一念是名一心」文と釋して、成就の一念と論主の一心とを會合してある。如此見る時は、此一行は「聞其名號」にして、次の一心歸命等の一行は「信心歡喜乃至一念」等に當る、斯様に願成就の文意に由て、就行立信の相を顯はすが爲に、行前後の順序に配置し給ふなり。

○一心歸命盡十方不可思議光如來、此一行は、正しく論主の安心を述ぶる所にて、二に明能所歸一段なり、一心歸命の四字は論主の能歸にして、盡十方等の十字は所歸の佛名なり。論文には、無碍光とあるを、七言の句を調へんが爲に、『讚彌陀偈』註より取り來りて、不可思議光の名を出し給ふ。一心歸命は本宗安心の根本、尤も大切の處なれば細心に研究したきものなり。

○先づ一心の釋は、其の本、『論註』より起る、上四「念無碍光如來願生安樂」心々相續無他三想間雜二」文。

此文を解すに鎮西は『論註良忠記』一四に、安心の一心、起行の一心を立て、『論註』上卷の一心は起行の一心、下卷讚歎門の下の三信釋は安心の一心と云ふ、其故は、所歸の佛土に繫念して一心になるは安心の一心、又所修の行に係念して、禮拜等の一行を守りて餘念なきは起行の一心と云ふ、良榮の『見聞』一四十五云。

西山は、堯惠の『私集鈔』二八に、安心の一心、作業の一心を立て、『論註』上卷の一心を作業の一心と云ふ、『玄義分楷定記』一十一にも、安心作業の一心のこと出づ、作業の一心とは、作業の四修の中、無餘修無間修に配當して、餘行を雜へず、専ら念佛一行を勵み修する故に、作業の一心と云ふ、此は、自督之詞とあるを、自力策勵の意と見て立てたる義なり。

次に、今家は安心の一心と見る、依て、『信卷』三一問答に、『論註』の一心は本願の三信を信樂に攝めたる三信即一の一心、信樂を釋して起行作業の一心とは云はず、論主の

一心は、『論註』の釋に依れば、『天親菩薩自督之詞』と云へり、此は一心の總釋にして、論主が自身の安心を彰はして、自ら引立て自ら勸め正す意あるより自督と云ふ。次に「念無碍光如來」等とは、一心の相を別釋する文なり。之を釋するに、建章四句の中、後三句の意を以て釋明せり。即ち、「念無碍光如來」とは「歸命盡十方無碍光如來」の意、「願生安樂」とは言ふ迄もなく「願生安樂國」の五字にて、一心の安心に具はる願生心なり、次に「心々相續無他三想間雜二」とは、彌陀に歸命する一心の等流相續する相なり。されば、今家では安心の一心と据るべし。

此一心を釋するに、古來、無二と專一との二義を辯ずる、無二とは、所對の境が一にして二なきこと、專一とは、能對の心が一筋にして雜念の交らぬこと、所對の二法の上に廢立をかけるが無二の義で、能對の心の純粹にして無垢なるを表はすが專一の義である。「化卷」(『自釋』三好)「一之言者名無二之言也心之言名眞實也」文とは、無二の義の一心釋、「信卷」(『自釋』三好)「云專心即是一心也」文とは、專一の義の一心釋なり、『論註』の釋で云へば、「念無碍光如來願生安樂」とは無二の義にして、諸佛の中より彌陀一佛

を選び、十方淨土の中より西方淨土を願生して、諸佛に心を掛けず、唯彌陀一佛に懸想して九方を捨て、獨り西方淨土へ參らんと願ふ故に、無二の義に當る、「御文」で云へば、頼むべきは彌陀如來なり、參るべきは安養の淨土なりと所對が一つに定りて、餘道の閉塞せられたるを無二と云ふなり。

次に、「心々相續無他相問雜」とは專一の義なり、行者の心が一筋になりて、餘の想の雜らぬこと、專雜相對の義門なり、この專一の一段の文は、一念の信心が思變りなく等流相續する相に寄せて、一念の安心の變らぬことを示したもので、其義の詮はす所は一念の安心を示すのであつて、後念相續を指示する文ではない。こゝが他流の起行の一心と云ふのと違ふ所なり、何年立つても褪せぬので上染と云ふ如く、後念相續の上に他相の交らぬことに寄托して、初發の一心の相を表はしたる文なり。

さて、此一心の專一無二の二義と、下卷の三不信との關係云何と云ふに就き、古來異説あり、一義に云く、初の淳心は無二の義を顯はし、後の相續心は專一の義を顯はす、前後の二心を以て、中間の一心を詳釋したと見る、或云、論主の一心は疑蓋無雜の一心

信樂にして、成就の信心なれば、淳心に當る。其故は、淳心は純心にして、疑の雜らぬ純粹の心なればなり。次の二心で無二（一心）、專一（相續心）の二義を開きて、三即一の一心の様を解釋したと見る、已上の二義取捨任情。

次に、此無二專一の二義を『銘文』の上で見れば、本^七に「一心トイフハ教主世尊ノミコトヲフタコ、ロナクウタカヒナシトナリ、スナハチコレマコトノ信心ナリ」とあり、是は彌陀の願意を傳へ給ふ釋迦の經説を我心に納得して、二心なく疑ひなきが、一心なりと知らせ給ふ釋なり、此中に「フタコ、ロナク」とは無二の義なり、「ウタカヒナシ」とは專一の義なり。

次に、無二の義の「念無碍光如來願生安樂」の文に就き、心得べきことあり、「念無碍光」とは、佛を念すと云ふ、念とは『易行品』の「人能念是佛」（成就文意）又は「念我稱名」（三信心念）と同じく、心念の義にして、『論註』上初の信佛因縁の義なり、『銘文』本^三に「ヨク念ストイフハフカク信スルナリ」、『唯信文意』^三に「念ハ心ニオモヒサタメテ、トモカクモ、ハタラカヌ（自力を文へざる心）コ、ロナリ」此等の文に依れば、念とは如來の御助を治定して、自力

の計を交へざるを念無碍光如來と云ふ、「願生安樂」とは、淨土往生を期する心にて一心所具の欲生心なり、念無碍光如來は信にして、願生安樂は願なり、信は正報の佛に就き、願は依報の淨土に就く、之を歸願佛土と云ふ、信に偏して願を斥ふ家あり、又願に偏して信を嫌ふ類あり、共に謬なり。然らば、信即願なりや、信即願、願即信と談じて信願互融を許すが願生歸命の異解なり、當流は信心正因にして、願心正因にあらず、涅槃の眞因は「唯以信心」にして、「唯以願心」とはなし、「信卷」の三一問答を見るに、三信をば至心にも攝めず、欲生にも攝めず、中間の信樂に攝めて、疑蓋無雜の一心とせり、法に在りては三信互融すと雖も、機受獲得は一心信樂と云ふが當家の定判なり。されば、信を主として願を軽く扱ふが當家の定法にして、「銘文」本^二「欲生我國トイフハ他力ノ至心信樂ヲモテ安樂淨土ニムマレムトオモヘ」文、此文を見るべし。唯願ふに非ず、他力の至心信樂を以て願へと指南せらる、「散善義」^三「清淨願往生心は願に相違なきも、我祖は『禿鈔』下^四「如來廻向之信樂也」と定判し給ふ。

問云、前來の如くならば、信を願に攝めて取扱ふ證文なきや。

答云、あり、『玄義分』^五「觀念法門」^六には、三信を「願生我國」の一句に約めてあり、又、『淨土論』には一心歸命を明せども、題名は「願生偈」なり、斯く願を表に出すは二門相對の邊なり、此土入聖の安心に對して、他土得證の安心を顯はす時は、願生彼國が主となるなり、されど、其内容を探ぐれば、信を重しとするなり。正しく涅槃の眞因を定むる時は、「唯以信心」と決擇すべきなり、「具三心者必生彼國」の定判動かす可らず。三心の中に廻向發願心あるも、我祖の指南に依れば、廻願心の作得生想を、『禿鈔』下^五「作得生想此心深信由若金剛」と釋して、深信を以て廻願心を釋顯せり、作得生想の得は、即得往生の得と同じく、決定深信の想にして欲願にあらず、無信の欲生は報土の正因にあらず、往生の正因は一心信樂なり、故に、『略本』^六「一心之中攝在至誠廻向之二心」文とあり、三心即一の至誠心にあらず、三心即一の廻向發願心にあらず、三心即一の一心信樂なり、三心は法に在ては互融すれども、機に在ては互融は許し給はず、若し、互融を許して、信樂するも、願生するも、共に可なりと云はゞ、願生歸命も一心歸命も、正義と云はねばならぬ、正意は然らず、一心歸命、一念歸命を以て往生の正因とす、故に「信卷」末

〔『自釋』^{三三}〕に「言」一念者信心無二心故曰一念是名一心、一心則清淨報土眞因也」文
 こゝに「名一心」とは、『淨土論』の一心を指す、此一心は、何れより來る乎と祖師に問へ
 ば、我祖は一念との給ふ、一念とは、即願成就の一念なることを顯はして、其次上に信心
 の二字を出し給ふ、されば、論主の一心は、我祖の指南に依れば、成就の文の「信心歡喜
 乃至一念」なり、本願の三心を、釋迦如來は成就の文では、信心の一に攝め給ふ、論主は
 釋尊の指示に慣ふて、我一心との給ふ、されば、合三爲一は釋迦の成就文相承なりと、
 知らせ給ふが「信卷」の御釋なり。

問云、三一問答の中、第十八願の三信を前後の二心に攝めず、中の信樂に攝めて、一
 心信樂と釋し給ふ理由如何。

答云、至心と欲生は十九二十の二願に通ず、信樂は第十八願に局る、其故云何となれ
 ば、信樂は「信卷」〔『自釋』^{三三}〕疑蓋無二間雜是名信樂」と釋して、露塵程も疑なく二心な
 く、深く信ずる信心を信樂と云ふ、故に、『銘文』本^初左「信樂トイフハ、如來ノ誓願眞實ニマ
 シマスヲ、フタコ、ロナクフカク信シテウタカハサレハ、信樂トマフスナリ」と云ふ、然

るに、第十九の願は修諸功德にして、我が修する功德を廻向して、淨土に往生せんと發
 願し、佛智不思議の御助を信ぜず、佛智を疑惑する失あり、是我が發願を頼んで、彌陀
 をたのまぬ自力の本願なり、故に信樂はなき筈なり。又、二十の願は修習善本にして、
 本願の嘉號を以て己が善とし、我が稱へる念佛を以て往生せんと廻向して、佛智不思議
 の御助を信ぜず、佛智を疑惑する失あり、是亦我が機を頼んで、彌陀を頼まぬ自力なり、
 故に信樂の一はなき筈なり。然れば、十九、二十の二願には此信樂の一は缺けてある。
 第十八の本願は、露塵計りも自力を交へず、我身は惡き徒者、地獄ならでは趣くべき方
 も無きものと我身を見限り、斯る者を御助は、三世十方に唯彌陀一佛ぞと一心に彌陀頼
 む思ひは、明かに佛智不思議を信ずる所、少しも疑蓋雜ることなし、是我が機を頼まず、
 唯彌陀を頼む他力の本願なり、故に、信樂の一は第十八願計りに誓ひたり、然れば、第
 十八願に於ては、信樂が大切にして、至心も欲生も信樂の一に歸する、故に、三信の中
 にて信樂を本とするのであつて、「化卷」〔『自釋』^{三三}〕濁世能化釋迦善逝宣說至心信樂之
 願心報土眞因信樂爲正故也」文と説かる、所以である。

今、論主の一心は無碍光に歸命する一心にして、自力の計ひを離れ、二心なく彌陀を頼む疑蓋無雜の信樂なれば、之を一心との給ふ、之を『御文』^四「コレスナハチ三信トハイヘトモタ、彌陀ヲタノムトコロノ行者歸命ノ一心ナリ」との給ふ。

問云、一心を釋する『論註』の釋、全く安心に就く文ならば、念無碍光にて事足るべし、何故、更に後起相續に約して、心々相續等と釋し給ふや。

答云、偈文を五念門に配當する釋をなす雁門にありては、五念流出の根本を示し、而も其根本たる一心は、常に五念の起行を伴ふことを知らせる爲に、後念相續に約して、一心を釋顯し給ひしものなるべし、我祖が「行卷」(「六要」^三)に此文を御引用の意趣も同意なるべし。『流情記』^上七も此二句を釋するに、三義を出し、第一義は安心に約して、一心歸命の相を明す文とし、第二義は他力の大信大行を擧ぐるとして、一心は他力の大信なり、歸命盡十方等とは南無阿彌陀佛にして、選擇本願の大行なりとし、第三義は之を三念門に配して、一心は意業作願門、歸命は身業禮拜門、盡十方等は口業讚歎門、三業具足すれば五念門は自ら具はると釋せり。已上の三義の中、第一義を正義とす。

次に、歸命を釋せば、古來歸命に三義を辯ずる、一に、歸は趣向の義、命は己身の性命と云ふ、此義では、命がけて佛に趣きすがる意なり。二に、歸は敬順の義、命は諸佛の教命と云ふ、此義では如來の命令に順ふ意なり、已上の二義は『起信論義記』^上八^下に出づ。三に、歸とは還源の義、命は命根と云ふ。此義に依れば、現に迷へる命を本覺の源へ還らしむる意で、『起信論』海東疏^上五、圭峰『起信註疏』^上一^三に出づ、此三義を、序の如く鎮西と今家と西山に配當する事常の如し、『選擇大綱鈔』^上四『玄義楷定記』^二三『竹林鈔』^下五『同』^八云。

今家の釋は、敬順教命を以て歸命釋とすること、祖釋に顯はる。『銘文』本^八「歸命トマフスハ如來ノ勅命ニシタカヒタテマツルナリ」、「同』末^初「歸命ハスナハチ釋迦彌陀ノ二尊ノ勅命ニシタカヒメシニカナフトマフスコトハナリ」文、此釋は『散善義』二河喻合法文(註)^二「今信順二尊之意不願水火二河念念無遺乘彼願力之道」の意に據る、因に言ふ、同じ敬順の歸命釋なれども、賢首の釋は聖道自力の歸命釋、我祖の釋は他力廻向の歸命釋なることを知るべし。

次に、「行卷」(六要二六研)の六字釋の、歸命の御字訓を略解すべし、「爾者南無之言歸命」とは、總標にして、「歸言至也」已下正しく字訓釋なり、此御釋、古來、異解多端にして難解とする所なり。先づ、此歸の字の字訓を數ふるに、一訓、三訓、五訓、六訓等異說紛々たれども、今正義を辯ぜば、一訓二熟二轉訓と決すべし、一訓とは「至也」の一訓なり、二熟とは「歸悅歸稅」の二の熟語を云ふ。二轉訓とは、「告也述也」の二訓を云ふ、此二訓は歸の字の字訓に非ず、「歸說」と熟した説の字の訓なれば轉訓なり。其次にある「宣述人意也」は、述の字の釋にして別訓にあらず、此は「廣韻」に、「說告也述也宣述人意也」とあるを其儘出し給ふなり。さて文を釋せば、「歸言至也」とは、此訓「述文讚」下三、「大經」の「會當歸之」を釋して「會當者必也歸之者至也」に依り給ふ、此を考へ出したるは、當派の理綱院なりと誇傳する所なり、然るに、同じ頃に出來た西派の「流情記」に、同じく此文を指示せり、先見の譽は果して誰人の手に落つるや。

歸の字の形に就き最親院の説なりとて、和上(石川了因講師)より聞きたる談を書示さんに、歸の字形種々あり、一に歸、二に歸、三に歸なり、一に歸とは、扁の止は、女

が夫の家に止まる形なり、旁の帚の字は帚を持って塵を掃ふて居る貌なり、夫を力にし、夫の家を依處として、帚を持って塵を掃ふ程の賤しき業をするも、尙心を安んじて、其家に止まり居る貌なり。二に歸とは、生の親の家を去りて、夫の家に來りて居る相なり、三に歸とは、扁の方の多は行の字の略なり、行く形なり、次に止は、夫の家に止まりて居る形なり、帚は前の如し、依てこの歸の字は、女の嫁きたる相より作り出したる文字なり、依て歸の字をトツグと讀む。

今、歸の字に「至也」の訓を出すは、至り着く意にて、女が夫の家に至り着く如く、行者が本願の大道に至りつきて、心を安んじ、其處を宿處として居る心持を表はす意なり。されば、至の訓は機の上で語りて、行者に約する從機向法の至と心得べし、されど、其元は彌陀の眞實が、行者に至り届きしが爲なれば、從法向機の義を遮するにあらず、唯、約機釋を歸の字の本義となすと云ふのみなり。

○次に、「又歸說也說字說又歸說也說字說」此が歸悅歸稅の二熟語なり、歸說の熟語は「詩經」『蜉蝣篇』に出づ、「於我歸說」とあり、其下の箋に、「說猶舍息也說音悅」とあ

り、又「甘棠篇」に「召伯所説」とある其下の註に、説舍息也とあり、又、朱氏の『集註』
 三^上「説音稅稅舍息也」と云へり、『詩經』の註では、悅稅二音共に舍息の義なり、此二音
 の義を判然と分くるは、『廣韻』の字註なり、『廣韻』五入聲辟の韻の下、悅字の註に「悅
 才雪切喜也脫也樂也脫也經典通用説」とあり、悅は喜びて服従することなり、之が歸悅
 の義なり。又、歸稅は『廣韻』四去聲祭音の下の註に、「稅舒丙切歛也舍也」とあり、稅は
 「ヤドリドコロ」とすること、驟雨の節木蔭に雨宿りする如し、今、我祖が「歸悅歸稅」の
 二熟を出し給ふ意は、彌陀に歸命する行者の心の内には、彌陀の本願を信じ喜んで、彌
 陀に悅服し、彌陀を頼む心のあることを表はして、歸悅の義を出し、「ヨリタノム」の左
 訓を付け給ふ。又、歸稅とは乘彼願力の乗の字の意にして、大願業力の手強き所に乗托
 し、打任せ、うちもたれて、宿り所とする意を表はして、「ヨリカ、ル」の左訓を施し給
 ふ。『御文』に「彌陀一佛ノ悲願ニスカリテ助ケマシマセト思フ心ノ一念ノ信」とのたま
 ふは、此御釋を相承し給ふ所なり。

○次に、悅稅二音とは、此四字上に向へば歸悅歸稅二音の結文なり、然るに、高田本に
 「二音ハ」と振假名を付てある所より見れば、下に屬して説の字を引出す文と見るもよし、
 次に出る告述二訓は、説字の訓なるが故なり。

○次に「告也述也宣述人意也」とは、告述二訓は、上に云ひし如く、説字の訓にして、歸
 字の訓にあらず、告とは、上より告命することなれば、彌陀法王より我に歸せよと告げ
 給ふ勅命なり、述也とは、「述而不作」の意で、自ら作りて云にあらず、人の云ひし通り
 を宣ぶる故に、「宣述人意也」といふ、釋迦は彌陀の本願の儘を述べ、一心に我を頼む衆生
 を必ず救ふぞと、彌陀の意を述べ給ふを宣述人意と云ふ、有説に、人意とは行者の心に
 て、本願を信じた處に、後生助け給へと彌陀に向つて告述る想ありと云ふ、此は未穩の
 説なり、(香月院初に此説を立て後に訂正されたり)又、有説に、人意とは衆生の心、一
 心正念にして直に來れと、彌陀より招喚し給ふを云ふと、此は告述二訓を、彌陀一佛に
 取切る釋風なり、下の文に、「本願招喚之勅命也」とあるより見れば、此義は根據ある義な
 り。約まる所、告述の二訓を一尊て取るか、二尊に振分けるかの二説あるなり、大體、
 歸命の歸の字は、能歸に約するが當前なり、依て至の訓、歸悅歸稅の二訓、皆能歸の信

相に約せり、此能歸は、如來の勅命なることを表はして、告述二訓を擧げ給ふ。

次に、命の八訓は悉く約法也、其中、初二訓は「述文贊」下三「大經」の追命所生の釋に、「命者招引也又命者業也」とあり、「業也」とは、善惡業のことなり、「招引也」とは、善惡の業に依て、未來の果を引くことなり、「銘文」本六「眞實信ヲエタルヒトハ大願業力ノユヘニ自然ニ淨土ノ業因タカハスシテカノ業力ニヒカル、ユヘニユキヤスク無上大涅槃ニノホルニキハマリナシトノタマヘルナリ」文。本願の勅命には、業の如く衆生を招引する力あるを云ふ、次に「使教」等の六訓は「廣韻」に依り給ふ、「使也」とは、使令の義、「法事讚」下九「致」使「凡夫念即生」とある如く、本願の勅命に由て、凡夫をして念じて、往生を得せしめ給ふを云ふ、「教也」とは、彌陀の教命なり、「道也」とは、本願一實の大道にして、本願の勅命が淨土往生の大道なり、「信也」とは、音信にして、本願の勅命は彌陀の方より衆生に音づれ給ふを云ふ、「計也」とは、計策にて、彌陀の御はからひなり、「末燈鈔」四「南無阿彌陀佛トタノマセタマヒテムカヘントハカラハセタマヒタルニヨリテ」三とあり、「召也」とは、召は呼也、呼びかけ、召し給ふ意なり。

「是以歸命者本願招喚之勅命也」。此は結釋なり、「散善義」廿二「西岸上有人喚者即喻彌陀願意也」の意に依り給ふなり、「是以」とは、上の別釋を承くる語、命は勅命にして歸は能歸なれども、彌陀の方より我に歸せよと喚びかけ給ふ時は、歸の字からが本願の勅命なり、此義を表はすが「告也述也」の二訓なり、然れば、行者能歸の信心は、全く如來選擇の願心より發起する願力廻向の信心なりと云ふ義邊より、本願招喚の勅命との給ふ、已上「行卷」終る。

次に、「銘文」に歸命に關する釋二ヶ處あり、一ハ本八「歸命トマフスハ如來ノ勅命ニシタカヒタテマツルナリ」と云ふ、此は十字尊號の釋なれば、彌陀に約する釋なり。二に末五「歸命ハスナハチ釋迦彌陀ノ二尊ノ勅命ニシタカヒメシニカナフトマフスコトハナリ」文「勅命ニシタカフ」とは釋迦、「メシニカナフ」とは彌陀、二尊の勅命に隨ひ、召に叶ふを歸命と云ふ、此は、善導の言南無者の釋にて、二尊の遣喚に約して釋し給ふなり。此兩釋の意を以て、上の告述二訓を見る時は、或は彌陀に約する說、又は二尊に約する說、共に祖釋の上に據あることを知るべきなり。又、同じ歸命釋なれども、「銘文」は

「信卷」の位で釋し、「行卷」は二字共に歸命せよと叫ぶ勅命の上で取扱ひ給ふを異相とす。問云、宗祖に依れば、歸命とは仰に隨ひ、召に稱ふ信順の義なり、蓮師は『御文』に屢出づる如く、「後生タスケタマヘ」と頼むを歸命と教へ給ふ、兩祖の教示相違するに似たり、如何が心得べきや。

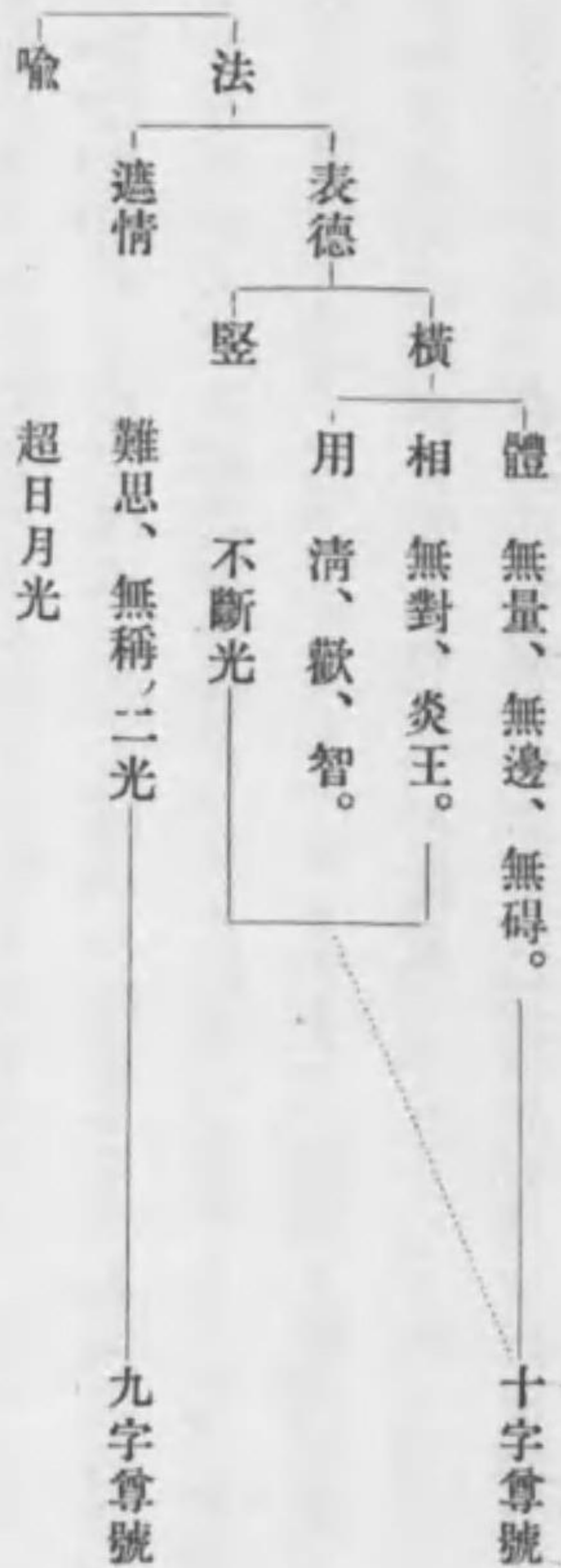
答云、蓮師の後生助け給へと頼めとの教示は、本願招喚の勅命に従ふた相を懇ろに教へ給ふものにて、眞實に如來の勅命が聞き開かれて、斯かる出離の縁なき徒者を必ず助け給ふは彌陀一佛ぞと疑なく深く信ずる信じ心が、後生助け給へと頼む想なり、之が如來の勅命に従ひ、召に叶ふた相なり。乃て、『行卷』の字訓釋に、「至也歸悅歸稅」の三義は、「彌陀タノム」信相を表はしたるものにて、唯頭を下げて受けたなりではない、法を機に受けた行者の信相に、自づと機より法に向ふ想のある所を知らせて、後生助け給へと教へ給ひしなり、歸悅歸稅の左訓に「ヨリカ、ル」「ヨリタノム」と祖師の御指圖なされし心持を、蓮師は「後生タスケタマヘ」と複譯し給ひしものにて、兩祖の釋意遂に一致に歸することを知るべし、此義は眞宗安心の尤も大切なる所なれば、細心に研究したきものなり。

○盡十方不可思議光如來、此は所歸の佛名なり、『淨土論』には、盡十方無碍光如來（『銘文』本ハ釋あり）とある、『讚彌陀偈』には「南無不可思議光（註五）」と云ふ、十字尊號にては字數不足の爲、兩者併用して字句を調へ給ふなり。案ずるに、天親の十字尊號は佛德を表詮する方、又玄忠の九字尊號は佛德を遮詮する方、兩者併せて取て全德を詮表する名が、唯今の盡十方不可思議光如來なり、古來の説に依れば、盡十方等の十字尊號は、天親が三經に依て立てられたるもの、殊に、『論註』上四に『彌陀經』の名義釋を引かる、より見て、「無量照十方國」の文より盡十方の三字、「無所障礙」の句より無碍の二字、「彼佛光明」の句より光如來の三字を案出し給ひしものと相傳し、之を『觀經』で取らば、「遍照十方世界」は盡十方なり、「念佛衆生攝取不捨」は無碍の義なり、無碍とは衆生の惡業煩惱に障へられず、攝取して捨てざるを云ふが故なり。若又、『大經』で取らば、十二光の中、光明の體德たる無量無邊無碍の三光の中、無量無邊の二光は盡十方なり、無碍光は其名の如く無碍なり、固より、三經通申の『淨土論』なれば、尊號の意が三經にあるべき筈なり、

依て、三經の意に依て十字尊號を立て給ふと申し來る所なり。乃ち

尊	盡十方	無量照十方國	遍照十方世界	無量無邊
	無碍	無所障碍	念佛衆生攝取不捨	無碍
號	光如來	彼佛光明	光	明光
				佛

次に、九字尊號は、十二光ては難思無稱の二光の意に依て立る、難思光は不可思なり、無稱光は不可議なり、如來の光明の德、恒沙無量にして、言亡慮絶し、思議を越超することを表はして、不可思議光と讚唱し給ふ。凡そ十二光は、約めて見れば、表德遮情の二に歸する、初九光は表德門にして、十、十一の二光は遮情門なり、初九光の中、無量無邊無碍の三光は光明の體德なれば、盡十方等の十字尊號は、表德の全相を表はす名なり。又、難思、無稱の二光は、凡慮を絶することを顯はす、之に由て立名したのが九字尊號なれば、九字十字併せて立名したる本偈の尊號は、十二光を總括することゝなる。



問云、『阿彌陀經』に依れば、光壽二德を擧げて彌陀の名義を釋せり。今、論主何故に壽命を捨て、獨り光明に付て立名するや。

答云、壽命は體也、光明は用なり、衆生攝化の德用は、實に光明の力用に關す、故に『禮讚』云、「以光明名號攝化十方」文『御文』云、「攝取ト光明トノフタツノコトハリヲモテ衆生ヲ濟度シタマフナリ」文『和讚』云、「無碍光ノ利益ヨリ威德廣大ノ信ヲエテ」文光壽共に攝化の德用あれども、壽命は豎に三世を貫き、光明は横に十方に光被す、衆生をして斷疑生信せしむる德用は、光明勝れたる故に、殊に光明を擧ぐるなり、隨て、三

經の上を見るに、光明を讚歎する文は多く、壽命を讚ずる文は少し、論主、廣く光明を讚歎する經説に據て立名し給ふ故に、光明に約して盡十方等の名號を立て給ふなり。次に文を解すには、『一多證文』^{三十一}『銘文』^{三十一}併せ見るべし。

○無碍光明大慈悲斯光明即諸佛智、三嘆^{三十一}所歸^{三十一}德^{三十一}所歸^{三十一}とは、上の盡十方不可思議光佛にて、即阿彌陀佛なり、此彌陀は、悲智圓滿の報身佛なりと顯はすが此二句なり。依て始句に「大慈悲」と云ひ、後句に「諸佛智」と云ふ、即ち、彌陀の悲智の二徳なり。始句は、『論』の無碍光如來の句と、『觀經』の「佛心者大慈悲是以無緣慈攝諸衆生」の文とを會合して、無碍攝護の相を讚歎し給ふなり。

「無碍光明」とは、内外二障に障へられざるを云ふ(『顯名鈔』^{三十一}『和讃』云、「無碍光佛ノヒカリニハ、清淨歡喜智慧光、ソノ徳不可思議ニシテ、十方諸有ヲ利益セリ」文『銘文』本^八「無碍トイフハサハルコトナシトナリ、衆生ノ煩惱惡業ニサヘラレサルナリ」文『論註』^{上五}無碍に就き問答あり、可披見。

其無碍光が、衆生に利益を與ふるに二種あり、一に現益、二に當益、其現益に二あり、

初に遍照、二に攝取なり、遍照光は、信前の行者の被る煦育長養の得益にして、攝取光は心光攝護の利益なり、『御文』^{三十一}彌陀如來ニハステニ攝取ト光明トイフ、タツノコトハリヲモテ衆生ヲハ濟度シタマフナリ」文『口傳鈔』^{上七}、「無碍光遍照ノ明朗ナルニテラサレテ無明沈沒ノ煩惑漸々ニトラケテ」等の如きは、遍照と攝取とを分つ方なり、此外に、遍照即攝取の扱方あり、『漢燈』^{二二三}『御文』^{一七}、^{二二}、^{二三}、^{三六}、^{四六}、^{五十三}の如き、皆遍照光にて攝取する例なり、攝取も遍照も、體から云へば、唯一の光明ゆへに、遍照即攝取なり、されど、光用に就き機受の得益から云へば、遍照光は外より蒙る光明の益用で、信前信後に通ずる、信前にありては、弘願他力に入らしめん爲に、外より温醸し、助成する利益、信後にありては、外の雜縁に障へられぬ様、護り給ふ、又攝取光は、信心の上の利益にて、金剛堅固の信心の定まる時より、常恒不斷に倦きことなく、護り給ふ光益なり、斯の如く、二様に分つ元は、『觀經』の「光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨」の文を讀むに、二點あるより起ること常の如し。

次に、當益とは「無碍光ノ利益ヨリ、威徳廣大ノ信ヲエテ、カナラス煩惱ノコホリト

ケ、スナハチ菩提ノミツトナル」と淨土に往生して、煩惱即菩提生死即涅槃と、無碍自在の證を開くを云ふなり。

○「大慈悲」とは、『論註』上^三三縁の慈悲を明せり、一に衆生縁、此は凡夫の慈悲なり、五道の衆生を縁じて起す慈悲なり、二に法縁、三乗の聖人の慈悲なり、諸法の空相を悟れる聖者が、著有の衆生を縁じて起す慈悲なり、三に無縁、佛の慈悲なり、佛は中道に住するが故に無縁と云ふ、假有を知るが故に有縁なり、非有を知るが故に無縁なり、縁じて而も縁ぜず、之を無縁と云ふ、中道に迷ふ衆生を縁じて、與拔の用を起すを無縁の慈悲と云ふ、今の慈悲とは、無縁の慈悲にして、『觀經』に「以無縁慈攝諸衆生」とは此事なり。因に慈悲の釋名に付き、『論註』下^三下^三では、慈を拔苦、悲を與樂に配當せり、此は『涅槃經』十五^八に依る、『大論』二十七^初等では、慈は與樂にして、悲は拔苦なり、天台杯も此義を依用せり、然るに、『十地義記』二末^四通別二義を以て之を會通せり、乃ち別して云へば、慈は與樂、悲は拔苦なれども、通じて云へば、慈悲共に與拔に通ずと。

○此光明即諸佛智、上の無碍光明の一句は、尊號の盡十方の三字の中に含まれたる無障

攝護の徳を明し、今此一句は、不可思議光の中に奄含する佛智を釋するなり。『大經』下卷の顯開智慧段の「明信諸佛無上智慧」の文より、光明を眺めて造語し給ふなり。智慧は體なり、光明は相なり、故に『論』には、「光明智相」と云ひ、『註』下^二「佛光明是智慧相也」と云ふ。此は無碍光佛の智慧圓滿の徳を出すなり。『唯信文意』^三「大乘ノ聖人小乘ノ聖人、善人惡人一切ノ凡夫ミナトモニ自力ノ智慧ヲモテハ大涅槃ニイタルコトナケレハ無碍光佛ノ御カタチハ智慧ノヒカリニテマシマスユヘニコノ如來ノ智願海ニス、メイレタマフナリ、一切諸佛ノ智慧ヲアツメタマヘル御カタチナリ」文『和讃』の智慧光佛の左訓に「一切ノ諸佛ノ智慧ヲ集メ給ヘル故ニ智慧光佛ト申ス、一切諸佛ノ佛ニナリ給フコトハ阿彌陀ノ智慧ニテナリ給フナリ」とある如く、諸佛を全ふしたる彌陀と云ふことは、『大經』の法門にして、光明を讚歎して「威神光明最尊第一」と説き、『大阿彌陀經』には「諸佛中之王光明中極尊也」と云ひ、顯開智慧段には、彌陀の五智を結びて「諸佛無上智慧」と云へり、加之、十七願成就の「皆共讚歎無量壽佛」の十方諸佛は、皆悉く極樂淨土出現の佛にて、次上の華光出佛の諸佛（此義異譯の經本と照合すれば一層明了に知れる）

なり。十万諸佛が極樂より産れ出たとすれば、彌陀は諸佛の親に相違ない筈。此義を推
 擴げたのが、本師本佛論なり、本師とは、末資に對する語、諸佛を彌陀の弟子と見る説にし
 て、『顯名鈔』註に出づる、「三世諸佛依念彌陀三昧成就正覺」の義なり、本佛とは、之に二
 あり、一に約事の本佛は諸佛を化身と見る、「口傳鈔」下諸佛通總の三身を彌陀の化用
 と判ずる。二に約理の本佛とは、彌陀を所證の理と見る、『顯名鈔』註阿彌陀の三字を無始
 本有の極理とす、三世の諸佛も、之を外にしては成佛に由なし。若、久遠説の出據を知
 らんには、『悲華經』(『六要』三)『首楞嚴經』(勢至讚)『法華經』(『決智鈔』本)『鼓音聲經』
 (『安樂集』上)尙之に關係する書目を擧ぐれば、『安樂集』上『法事讚』上『觀念法門』下
 『和讚』二ヶ處、『口傳鈔』下『諸神本懷集』末『眞要鈔』本『顯名鈔』七『決智鈔』六『持名
 鈔』一『御一代記聞書』四『御文』二三二九三〇等。今、此に諸佛智とあるは、諸佛の智慧を統ぶ
 る彌陀の智慧を明す文にして、久遠の本佛を沙汰すべき所にあらず已上。

二明觀察相二 初觀妙土二 初總明

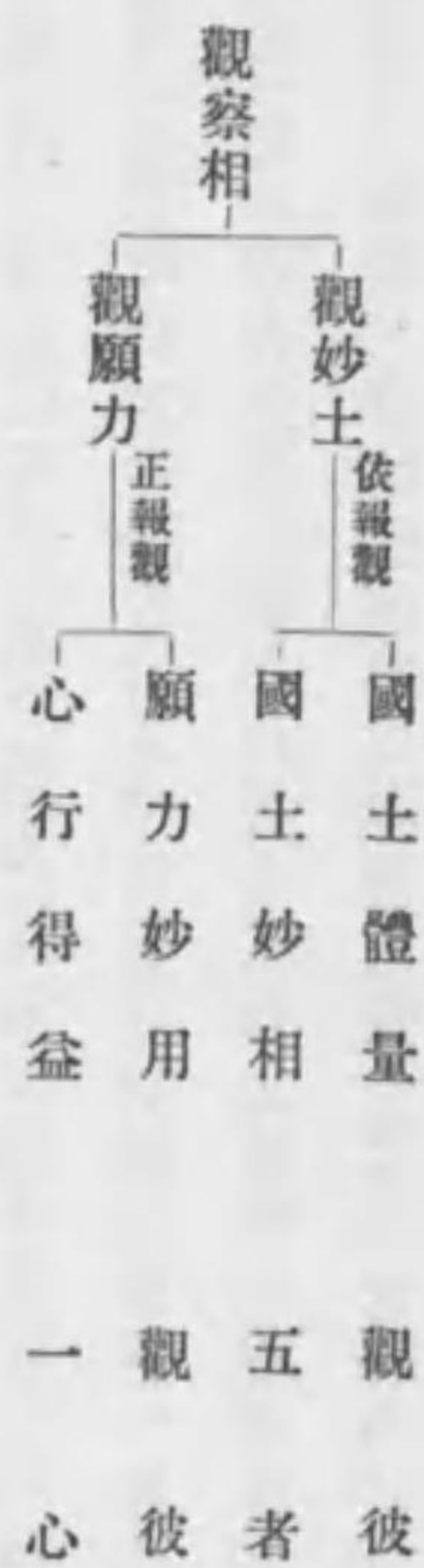
觀_ニ彼_ニ世界_ニ無_ニ邊際_一 究竟廣大_ニ如_ニ虛空_一

是より下九行は、行者の所生の淨土の相を明す一段なるが、單に淨土の相を明すので
 はなく、一念の安心に具はる觀知淨土の相を述ぶるものにて、本願名號の謂れを聞開き
 て、信ずる時、決定淨土參りと心が定りて、やがて結構な淨土へ參るぞと思ひ浮べる心
 が、一心の安心に具はる、夫を此に顯はして、偈讚を御作りなされし故に、先づ初に觀
 の字が付てある。祖師は、論偈を「一心華文」との給ひて、一心の安心を述べしものと御
 覽なさるゝ思召が、此偈文に顯はれてあると拜見すべきである。

次下にある「觀彼如來本願力」等の二行も、同じく一心所具の願力を觀ずる想を述べし
 もの故に、此にも觀の字が付てある。今の觀彼の觀は、依報の觀にて、十七種を總含し、次
 下の觀彼本願の觀は、正報觀にして、十二種の正報を代表する、觀とは「一多證文」三觀
 ハ願力ヲコ、ロニウカヘミルトマウス、マタシルトイフコ、ロナリ」と。『同』註には、『禮
 讚』の信知を釋して、「信トイフハ金剛心ナリ、知トイフハシルトイフ、煩惱惡業ノ衆生
 ヲミチヒキタマフトシルナリ、マタ知トイフハ觀ナリ、コ、ロニウカヘオモフヲ觀トイ
 フ、コ、ロニウカヘシルヲ知トイフナリ」と。此釋に依れば、觀知は信知の義なること

明かなり、前段、觀彼世界等の觀は、信の一念に具はる所の、斯る結構な淨土へ參らせ
て下さるゝと思ふ所に、はや眞實報土を思ひ浮べる心が、直ちに具はる觀知淨土の安心
觀である。後段の觀彼如來本願力已下の二行は、斯様な淨土へ參らせて頂くは、偏へに
願力不思議の御力なりと、願力を思ひ浮べる心が一念歸命の安心に具はる、之を御讚歎
なさる偈文なりと見るべきである。

斯様に伺ふ時は、此偈、初世親菩薩より已下十四行が、全く「一心華文」と云はるゝ安
心偈を讚唱し給ふことになる。玄忠も「偈申己心」と申されたが、『願生偈』は、一部始
終が論主の安心を申べたもの、此安心偈の意を偈頌に作つたが此一段なれば、安心に具
はる觀知、觀察の相を讚歎し給ひしものと見るを至當と信ずる。而して、次下の五念門
を明す下が、此一心より顯はるゝ五念門で、即『淨土論』では、長行の意を讚歎し給ふ
所である。今、便宜の爲に此一段を分節せば



次に文を解せば、此二句は量功德の文に依て、安樂淨土の分量の廣大無邊なることを
明す。據は『論』の「觀彼世界相、勝過三界道、究竟如虛空、廣大無邊際」の文なり。

彼とは、上の盡十方不可思議光如來を指す。此佛の所居の土を彼世界と云ふ。

觀とは、觀知・觀察の二義あり、觀知とは、『一多證文』に出づる信知・觀知の釋意にし
て、安心に約す、參るべきは安養の淨土、頼むべきは彌陀如來なりと信知するは、安心
に約する觀知なり。『論註』下五「觀」此十七種莊嚴功德能生眞實淨信の觀は、觀知の
意にて安心觀なり。觀察の義は、『論註』上七「觀者觀察也」同下五「心緣其事曰觀觀
心分明曰察」と釋して、淨土の依正を觀想すること、此は起行觀に相應する。今、此觀
の字、若し一心偈と見る時は、安心觀の觀知の義となり、又五念偈と見る時は、起行觀

の觀察となる。大別すれば、觀知は安心（「化卷」『自釋』_{三十一}）應觀_{三十二}知本願成就盡十方無碍光如來也」とは、他力安心の觀知なり、觀察は起行と分てども、通じて云へば、共に安心起行に通ずる。『一多證文』に、願力を心に浮べ見るとは安心の觀察にして、願力の尊さを思ひ浮べる時、直ちにかゝる者を助け給ふ願力の不思議を信ずる故に、安心の觀察なり。又『註論』_{下十五}、『同』_{三十一}、依報と正報との次第を明すに、觀と知とを互に使ふてある如きは、起行の觀知なり。今、此處は一心偈の意を偈讚する一段なれば、觀知・觀察の安心觀と見るべきである。

如虛空とは、虛空に無邊際と、遍一切處と、廣大容受の三義あり。序の如く、文に對して知るべし。

問云、『大經』には「現在西方」と云ひ、『小經』には「從是西方」と説きて、方處を限り。今、『論』に廣大無際と云ふ、此相違如何に會すべきや。

答云、古來多説不同なれども、淨土は邊無邊の兩義を具へて、邊にあらず、無邊にあらず。故に、亦是邊、亦是無邊と説くことを得る。所謂、双遮双照、邊無邊不二の世界

なりと決すべし。此義は、『論註顯深義記』_{二九}に引く『探玄記』_{三十九}の意にて、華藏世界は、無邊に即して邊際の世界なるが故に、十方より菩薩の來生あり。又、邊に即して無邊界なるが故に、十方淨土を含攝して缺減なし、彌陀の淨土も亦復是の如し。行者の願生に約すれば、無邊に即して邊の西方淨土なり。往生し已れば、邊に即して無邊の淨土を見る。多即一の故に「從是西方」、「一即多」の故に廣大無際。一と多とは共に事相に約す。事々無碍の所談なれば、空虛を以て廣大無碍となすに同じからず。『論註』_{下六}氷上燃火の喩に例して知るべし。開悟院云く、淨土の法門は「從邊入無邊、從無邊出邊」にて、邊見にて願生し、生れ已れば廣大無邊際。而して、出假利生の時は、邊見を用ひて凡夫に示同す。差即無差、無差即差なり_{三〇}。

二別釋國土妙相

五者佛法不思議 此中佛土不思議

有二種不思議力 斯示安養之至徳

一者業力謂法藏 大願業力所成就

二者正覺阿彌陀	法王善力所攝持
女人根缺二乘種	安樂淨刹永不生
如來淨華諸聖衆	法藏正覺華化生
諸機本則三々品 <small>ナレトモ</small>	今無一二之殊異
同一念佛無別道	猶如溜澗一味也

眞實報土の妙相を明す中、前段の二句は、總じて國土の體量を明し、之より下は、別して安樂國土の妙相を明すなり。就中、初四行は國土の不思議なることを讚歎して、箇様な妙土の出来る譯を陳ぶるなり。如是き(次下に三科を開き、妙土の相を示す)妙相を持つ安樂世界は、何に依て出來上りたりや。云く彌陀の因果二力の所感なり、法藏因位の願行の力に依て之を成就し、彌陀の果上の自在神力に依て、之を住持すと顯はす所なり。



○五者佛法不思議とは、『論註』下五論文を擧げて、「彼佛國土莊嚴功德者成就不思議力故等」と標し、之を釋して、此は依報十七種莊嚴が、悉く不思議力を持つことを説きたる論文なりと述べ、其の次に、『大論』に依て五種の不思議を出してある、されど、餘の四不思議は此に入用なきゆへに省略して、第五の不思議のみを擧げたるなり。

○佛法とは、佛所有の法と云ふ義で、佛身・佛土・禪定・智慧・總ての功德を指して、佛法と云ふ、『大論』では、諸佛に通ずる語なれども、今、此處では別して彌陀に局る。

○此中とは、外を簡ぶ語にて、佛法の中に數多の不思議のある中、唯彌陀の淨土のみを引出して明す故に、此中佛土不思議と云ふなり。

○有○二○種○不○思○議○力○とは、次下に出る因位の願行力と、果上の自在神力なり。「註論」には「有二種力」とあるを、本論の不可思議力の言に依て、不思議の三字を加へ給ふ。

○斯○とは、上の不思議力を指す、「論」の不思議力を、玄忠は開きて因果二力となせり。此不思議力とは、何を示すか、云く、論主が「大經」に依て、安樂淨土の至極の功德を顯示せしものである。「論註」で見れば、淨土の妙相は、二種の不思議力の現はれてある。故に、此安養之至徳の五字の中には、上の量功德も、下に列ぬる因果平等の功德も、残らず攝盡せりと知れ。

○一○者○業○力○止○とは、妙土の因を擧る中、第一が業力なり、業力とは、因位の本願力なり、此文は、「論註」下六「一者業力謂法藏菩薩出世善根大願業力所成」の文に依て作る、此「論註」の釋は、性功德の論文の意を述べしものにて、出世の善根とは無漏善のこと、法藏菩薩は八地已上にて、發心修行して得られたる善なれば、出世の善根と云ふ。

大願業力とは、大願力と大業力なり、大願力とは、五劫思惟の本願力なり、大業力とは、兆載永劫の修行力なり、法藏菩薩が八地已上純無漏相續の位に在て、發願し修行して成就する淨土なるが故に、不思議の力用ありと云ふが、第一の因故なり。

○二○者○正○覺○等○とは、第二の果力なり、果上の自在神力なり、「論註」下六「二者正覺阿彌陀善住持力所攝」の文に依て作句す、「淨土論」では主功德の文意なり。

正覺とは、之を釋するに二義あり、「正ヲ覺スル」と讀めば、正の字、所證の眞如に就く、又、「正シク覺ル」と讀めば、二字共に能覺の人に就くなり。

法王とは、王は自在の義、佛は法に於て自在を得る故に、法王と云ふ。

善力とは、善住持力と見れば、善巧に住持する力と云ふこと、唯善力と云へば、果上の善法力と見るも得たり。

攝持とは、夫々物の亂れぬ様にシマリを付けること、淨土の依正は彌陀の果力に持たれて、夫々の作用を爲しつゝあるなり。如此く、淨土の莊嚴が因果二力に依て、成就されること云ふ義は、其源、「大經」に出て、勝報段に「行業果報不可思議」と云ふ、之を、

極樂段の見樹得忍の六故に照す時は、行業不思議とは本願力故なり、果報不思議とは威神力故なり、威神力とは、彌陀果上の神力なり、本願力とは、法藏因位の願力なり、此因果二力に依て、妙土を建立し、攝持すると云ふが『大經』の説相なり、此因果の二力、國土に現はれては依報十七種の莊嚴妙土と成り、正報に現れては、不虛作住持の功德となる、『論註』下註九「不虛作住持者依本法藏菩薩四十八願今日阿彌陀如來自在神力願以成力力以就願願不徒然力不虛設力願相符畢竟不差」文法藏の四十八願とは因力なり、如來の自在神力とは果力なり、此因果二力が、淨土に現はれて行者に蒙るときは、未證淨心の菩薩が、立所に上地淨心の菩薩と同じく平等法身を證る、若し、穢土の往生人に現はれては、遇ふて虚しく過る人なし、一切人をして功德の大寶海を満足せしむ、一家に所謂他力とは、因果二力の外なし。

因力とは、本願力にして如來選擇の願心なり、此心、凝て我等が爲に名號を成就し、聞信の一念に往因を究竟せしむ、聞て信心の華を開かしむるは、本願招喚の力に依る、故に「信ハ願ヨリ生スレハ」と云ひ、本偈曇鸞章には、「由佛願力獲得信」と云ふ。又、果

力とは威神力にして、果上の智慧海なり、此智慧は、光明と顯はれて我等の無明の昏闇を破り、遂に信樂開發の曉に至らしむ、之を知らせるが、「行卷」の光號の因縁なり、上の因力は本願他力にして、今の果力は光明他力なり、一家所談の他力義は、此二力の外なし、而して、其基づく所は「觀佛本願力」等の二行四句である。

○女人根缺二乘種安樂淨刹永不生とは、已下四行は、上の二力所成の安樂淨土の妙相を示す所なり、其中、此一行二句は大義門功德の文に依て、大乘一味の相を明す、大義門功德とは、大乘の義を成就する門と云ふこと、大乘の義とは平等一味の證を云ふ、身心共に平等一相なるを大乘義と云ふ、身相の上に女人根缺二乗の相なく、一相平等に大乘の菩薩となる、又證悟の上では、參る程の者が必至滅度の證を開く、安樂淨土は一味平等の悟へ通入する門と云ふこと、大義門と云ふ。論文には大乘善根界とありて、大乘の善根所成の世界なる故に、土徳として一味平等の證を開くなり。無有好醜の願成就の故に根缺なし、變成男子の願成就の故に女人なし、「咸同一類形無異狀」の故に二乗なし、經文に二乗の名あるは、因願餘方の説にして、聲聞の來生して大菩薩となりたるを宿世

の時の名を呼びて、聲聞と名けたるものにて、淨土には斷じて聲聞僧なし、純一大乘菩薩僧にして、主伴莊嚴の邊では正定不退の菩薩なれども、内證は「虛無之身無極體」にて、無上涅槃の妙證を陰藏せり。如是く、十方來生の有情に同じく、齊しく無上の極證を授くることは、實に〳〵大悲の至極にして、諸佛出世の本懷、之に過ぎたるはなし、されど、諸佛は別願なきが故に悲心やる瀬なけれども、之を満足するに由なし、我彌陀は、超世の大願を建て、五兆の願行を積み、功を願生の行者に譲りて、他力に依て大乘善根界に引入し、往生即成佛の大益を與へ給ふ、是こそ、誠に超諸佛刹最爲勝なるが故に、殊に之を擧げて安養の妙相を示し給ふなり。

○種とは、種子の義、安樂淨土は純一大乘界なる故に、二乗の種子は蒔ても生へぬと云ふこと。一切の衆生が、皆齊しく菩薩として發芽するなり。『論註』上^{十七}に詳説せり、『淨土論』^五體三名三の説あり、可見。

○如來淨華諸聖衆法藏正覺華化生とは、第十三卷屬功德の偈文に依て作る、七言にする爲に、諸聖と法藏との四字を増加せり。上は土德に約して平等一味を明す。今、此は華

生に約して證果の一味を顯はす也。

問云、大義門の次に眷屬功德を出すは何の意ありや。

答云、成上起下の意なり、今此文を前後の文に對映するに、上文の二句は、大義門に依て大乘一味を顯はす、又下文の二句は、大義門の釋に由て平等一味を顯はす、其間に、同一化生を顯はす是れ成上起下の相なり。女人等の種永く生ぜずして、同じく大乘一味の悟を開くは、正覺の華より化生する故なり、是は成上の方なり。善惡の諸機平等一味の悟を開くは、是亦正覺の華より化生する故なり、是は起下の方なり。正覺化生とは、華から生れたと言ふことなれど、此華は唯の華にあらず、彌陀の正覺（智慧）を全ふしたる華なれば、之より生れた子供は彌陀の子なり、夫故に、百人千人皆彌陀同體なりと私かに顯はす意あり。

○如來淨華諸聖衆とは、淨華とは因位より云へば、法藏菩薩の無漏清淨業の所感にして、果上より云へば、無量の大寶を以て成就せる微妙清淨の蓮華なり、此淨華臺上の彌陀所屬の眷屬を淨華衆と云ふ、即ち十方來生者是なり、此等の眷屬は、皆彌陀正覺の淨華よ

り化生したるものなりと云ふが此文の意なり。

正覺華とは、正覺は智慧なり、彌陀の智慧より表はれたる蓮と見れば、依報の華なり。又、蓮華は彌陀の智慧を喩へたもの、「天人不動衆清淨智海生」の文意に依れば、淨土の聖衆は彌陀智願海より生れ出たるものなれば、正覺華とは智慧のこと、正覺華生とは智慧化生なり。華を喩と見ると、法と見るとの差異あれども、共に彌陀に約することは一なり。同じ腹より産れた子供ゆへに、平等一相なりと成立するが此一行の意なり。上の大義門の釋は、淨土の徳に約して平等を説き、今此眷屬功德の一段は能生の一元(華)を示して、證果の一味を現はす、千枝百葉は一樹根より生ずる如く、淨土の無量の聖衆は、同一正覺華生なるに約して、證果の同一を顯はすなり。

次に文を解せば、淨華とは相に約す、大寶所成の故に淨華と云ふ、正覺華とは體に約す、其體、彌陀の智慧なるが故なり、されば、名異體同と知るべし、故に、『論註』下註二「正覺淨華之所化生」と云へり、化生とは、自然化生にして、四生の中の迷の化生にあらず、生即無生の化生なり。

○諸機本則三々品。今無一二之殊異とは、果の一味を明す、據は『論註』下註三「大義門の釋に、「本則三三之品今無一二之殊」と云へり、此に諸機とは、九品善惡の機なり、三三とは『六要』六九二義あり。(一)は體三名三とする義、娑婆ては女人根缺二乗の體三もあれば、名三もあり、然るに、淨土へ生れて見れば、一二も變ることぞなきなり。(二)には三々九品とする義、此時は三々とは九品善惡の人を指す、『和讃』の左訓に云く「本ハ九品ノ衆生ノ報土ニ生レヌレハ一人モ變ルコトナシトナリ」と、此義祖釋に合す。本とは娑婆にありし時のこと、今とは淨土に生れた時を指す、九品善惡の機類、淨土に往生すれば、何故に同一の果報を受くるや、云く、百千萬人同じく念佛の一行に依て眞實報土へ往生するが故なりと、下文へ連絡する所なり。

○同一念佛無別道猶如溜澗一味也とは、因の一味を擧げて、果の一味を喩顯す。此一行の中、初の一句は眷屬功德の釋文、後の一句は、大義門功德の釋文なり、『論註』下註二及び同註三に出る。

同一とは、凡聖智愚を隔てざることを顯はす、此は能修の人より言を立る。

念佛とは、所修の行なり、「行卷」(『自釋』五)云、「大小聖人重輕惡人皆同齊應歸選擇大寶海念佛成佛」文。

別道とは、道は因道なり、往生極樂の因道は唯一なることを顯はす。此文、御真本に「別ノ道ナケレバナリ」と讀みて、果の一相を成立する因故と見よと指南し給ふ。此御指南に依れば、九品の機類が淨土へ往生して一味の證を開くは、全く同一念佛の一因に依ると成立する文なり、されば、此一行の文の所顯は、果の一味を顯はすに在れば、次の溜澗一味の喩も果の一味の喩と見ねばならぬ。

次に溜澗とは、『列子』に「孔子曰溜澗之合、易牙嘗而知之」と云へり、溜澗は齊國の水名なり、易牙は齊の桓公の臣下で、能く物の味を知る人、此二水を合せて嘗めしむるに、能く味ひ分けたと云ふ故事あり、今、此に引きたる意は、『列子』とは別なり、今は、溜水澗水も流れて海に入る時は、同一鹹味となる如く、果の一味を喩顯する爲に、猶如溜澗と云ひしなり、因が同一念佛故に、果も亦一味平等なりと成じて、女人根缺已下三行一連に亘る平等一味の證果を喩顯する喩なりと知るべし。

上來は、觀知淨土の相にて、斯る結構な淨土へ參らせて頂けると、往生淨土を信知する相を偈讚し給ひしなり。即ち、論主の一心の中に具はる願生安樂國の意を述べ給ひしなり。

願力勝益

觀_ル彼_ニ如來_、本願力_、 凡愚遇無_二空過者_、
一心專念_、速滿足_、 眞實功德大寶海_、

上來は、觀彼世界相の意にて、一念の安心に具はる淨土を觀知する相を述べ已りたれば、是より下の二行四句は、願力の妙用にて大益を得ることを觀知する様を讚むるなり。共に一念の信相なれば、觀の字を附けてあるなり、據は、佛莊嚴八種の第八、不虛作住持功德の文に依る、此文、一論の肝心、一偈の關節にして、他力眞宗の要義、此四句に蘊在して餘蘆なし、故に、『正信偈』和讚』を始め、此偈文を出さざる所なし。『銘文』本_十『一多證文』_三評祖師の解釋あり、就て見るべし。此文、上に向ては、一心歸命の安心を得るも、安樂淨土に往生するも、皆本願力の廻向によることを成じ、下に向ては、次下に

明す所の五念門の行は、即本願力の廻向なることを引起す、成上起下の要文なり。(『流情記』上九十九)

問云、此不虛作住持の文、『論註』下では當益とせり、然るに、我祖常に現益とし給ふは何の據所があるや。

答云、仔細に『論註』を見れば、現當兩益に通ずる、其故は、『註』上三十一の釋を見るに、「觀佛本願力」を見佛聞法の二義を以て釋せり、見佛は當益にして、聞法は現益なること文面顯了なり、故に、『註』下四を毘婆舍那觀に二義を開き、「一者在_レ此作_レ想觀_レ彼三種莊嚴功德」とは此土に約する釋、「二者亦得生_レ彼淨土_レ即見_レ阿彌陀佛」とは彼土に約する釋なり、乃て「觀佛本願力」の四句には、此世に於て本願力を觀ずる者は、即時に無上大利の功德を満足すると、彼土にて彌陀に面見すれば、忽ちに寂滅平等法身を證ると現當の二義を含藏するなり。

次に文を解せば、觀とは觀知の義で、信ずることなり、『證文』三十一觀ハ願力ヲコ、ロニウカヘミルトマウス、マタシルトイフコ、ロナリ」とあり、明かに心に知るを觀と云ふ。

次の遇も信ずる味なれば同意なりと知れ。

彼。如。來。と。は。無。碍。光。如。來。を。彼。と。云。ふ。

次の本願力の三字尤も大切にして、『論註』下九には開きて因果二力とする、因位で取れば四十八願力、果上で云へば自在神力、(但し『論註』では、願を因に約し力を果に約して使ひ分けてあり)之を『大經』で取れば、「其佛本願力」は因力なり、「如來智慧海」は果力、之を見樹得忍の段には、開きて六力とする、威神力とは果力なり、本願力とは因力なり、後の四力は本願力を開きたるものなれば、本願力の一に攝まる。我祖は、本願力とは四十八願を全じた第十八願と見給ふ。故に、次下に悲願の信行を出して、一心專念との給ふ。

凡。愚。と。は、第。十。八。願。所。被。の。機。に。し。て、十。方。衆。生。に。當。る、就。中、爲。物。大。悲。の。本。意。に。約。し。て、下。三。品。の。惡。機。を。擧。げ。て。凡。愚。と。の。給。ふ、多。造。衆。惡。無。有。慚。愧。の。凡。夫。愚。人。を。云。ふ、宗。祖。の。殊。に。凡。愚。の。二。字。を。用。ひ。給。ふ。は、『論註』上九十九論主所共の衆生を、下品凡夫と判定する指南に據り給ふ。

○遇無空過者とは、遇とは信ずることなり、『一多證文』三云「マウアフトイフハ本願力ヲ信スルナリ」と云へり。此釋と同例の語、元祖にあり、『漢燈』一云「雖已得遇大願若不信之易異不值既能信之正是值也」文『和燈』四云「若信ゼズバ遇ハザルガ如シ」文可知。

無空過者とは、正しく不虛作の意にして、本願力を信ずる者は必ず信に相當する利益を受ける、決して無益にして消失するものではないと云ふこと。之を『一多證文』に釋して「信心アランヒトハムナシク生死ニト、マルコトナシ」との給へり、之を願成就で見れば、凡愚とは諸有衆生なり、遇とは聞名信喜なり、無空過者とは即得往生住不退轉なり、聞信一念の行者には、即時に入正定聚の益を得るが故に、無空過者と云ふなり、其故如何となれば、至心廻向の賜として、功德の大寶海を満足するが故なり。

○一心專念速満足眞實功德大寶海とは、一心專念の行者の得益を明す、據文の能令の二字を除きて、一心專念の四字を加へ、後の句には眞實の二字を増して、二句の頌を作り給ふ、前に述ぶる如く、我祖は此觀佛本願力の文を第十八願の益を明すものと見給ふ故

に、『散善義』の一心專念の語を添加して其意を現はし給ふ、此一心專念とは、他力の大信大行にして、本願の三信十念なり、『一多證文』六に云く「一心專念ハ一心ハ金剛ノ信心ナリ、專念トイフハ一向專修ナリ、一向ハ餘ノ善ニウツラス、餘ノ佛ヲ念セス、專修ハ本願ノミナヲフタコ、ロナクモハラ修スルナリ」と。然らば、一心とは他力金剛の信心にして、專念とは憶念稱名にして、二心なく名號を稱ふることなり。

問云、能令の二字を除きて、一心專念の四字を加へ給ふ意趣云何。

答云、二意あるべし、一者爲明本願正意故、上の句に「觀彼如來本願力」と云ふ、本願とは念佛往生の本願なり、其本願には三信十念の誓あり、遇無空過者は其妙用なり、遇とは本願力を信ずること、本願力を信ずるとは、無碍光に歸命する一心なり、此一心は稱彼如來名の行に離れざる信心なり、されば、凡愚が本願力に遇ひて稱名相續して、破滿の得益を受けることは、實に第十八願の正意なることを明にせん爲に、一心專念の語を加へ給ふなり、是頓て一論の宗要を顯はすとも云ふべきなり。二爲示成上起下故。此一心專念の四字、上に向ては、最初に出づる論主の歸命の一心と次上に出づる同一念佛の行

とを承けて、心行共に本願力廻向なることを顯はす、即ち凡愚の一心専念（化他の一心専念）を以て、論主自行の一心の願力廻向なる義を成ずるなり。次に、起下とは此一心専念は一心等流の専念なれば、専念は稱名行、開けば五念となる、次下に出づる五念行は、専念より開き出されたるものなることを顯はす爲に、此に一心専念の語を加へ給ふと伺ふ所なり。

○速満足とは、此速の字「論」に二ヶ所に出づる、(一)は此文の速満足(二)は卷末の速得菩提なり、この二の速、初は現當兩益に通じ、後の速得菩提は當益なり、速とは横超を顯はす語なり、即得往生は横超の現益にして、速満足の現益に當る、又往生即成佛の義は横超の當益にして、速得菩提に當る、上に述べし如く、不虛作住持の文「論註」の上卷で見れば、現當兩益に通ずる、見佛值佛の文は當益にして、聞佛名號の文は現益なり、當益の文に二種あり、「論」の長行の文は、未淨の菩薩が見佛に依て淨心の菩薩に轉進する益を得る、之が一つ、今一は、「論註」上_註「值遇我者皆速疾満足無上大寶」と云ふ、此「無上大寶」とは、「大論」九十八_註「無上法寶即是阿耨多羅三藐三菩提」の文より見れば、

佛果のことなり、然れば、卷末の速得菩提と同じ事になる、上の如き現當二益を得るは、本願力に遇ひしに依る、一心専念の行者が此大益を得るは、本願の中に速疾圓成の謂あるに由る。依て、「愚禿鈔」上_註には「本願一乘頓極頓速圓融圓滿之教」と云へり、此速疾頓成の法門は、彌陀不共の別益、一代超過の法門にして、功德の大寶海たる念佛の利益なり、一心専念の行者は、此萬德圓滿の名號を全領するが故に、速得菩提の益を得るなり、「論註」卷末速の字を釋するに、三願に配して、所謂三願的證の釋を設け、緣佛願力の由を明かにする釋義の根據は、此文に基因することを忘るべからず。

速満足とは、速は頓速の義なり、満足は圓の義を顯はす、依て速満足とは圓頓一乘なり。「一多證文」に「滿ハミツトイフ足ハタリヌトイフ」と云へば、念佛行者の心に、名號の功德の充滿することを満足と云ふ。

眞實功德大寶海とは、眞實の二字を加へ給ふは、直に名號のこと、見よとの暗示なり、「銘文」に「眞實功德相トイフハ誓願ノ尊號ナリ」とあり。

大寶海とは、大寶とは功德善根のこと、依て「大經」には「廣施功德寶」と云ふ、海に無量

の寶を藏する如く、名號には萬德を聚るに喩へたるなり、海の十德の中では、無量寶聚の德なり。『一多證文』に云く、「大寶海ハヨロツノ善根功德ミチキハマルヲ海ニタトヘタマフ、コノ功德ヲヨク信スルヒトノコ、ロノウチニスミヤカニトクミチタリヌトシラシメントナリ」、「行卷」云、「斯行即是攝諸善法具諸德本極速圓滿眞如一實功德寶海」文次上『一多證文』の釋は、信心の行者が名號の功德を得ることにしてあれども、元來此速滿寶海の文は、『大經』流通の「即是具足無上功德」の文意に依りたものなれば、行の一念の利益とするが當前なれば、我祖は一心專念の行者の利益として、信行兩方へ通じて示し給ふ。『一多證文』註「一念ニ萬德コトククソナハルヨロツノ善ミナオサマルナリ」とは、行に約する釋なり。已上總說分に依る安心讚畢る。

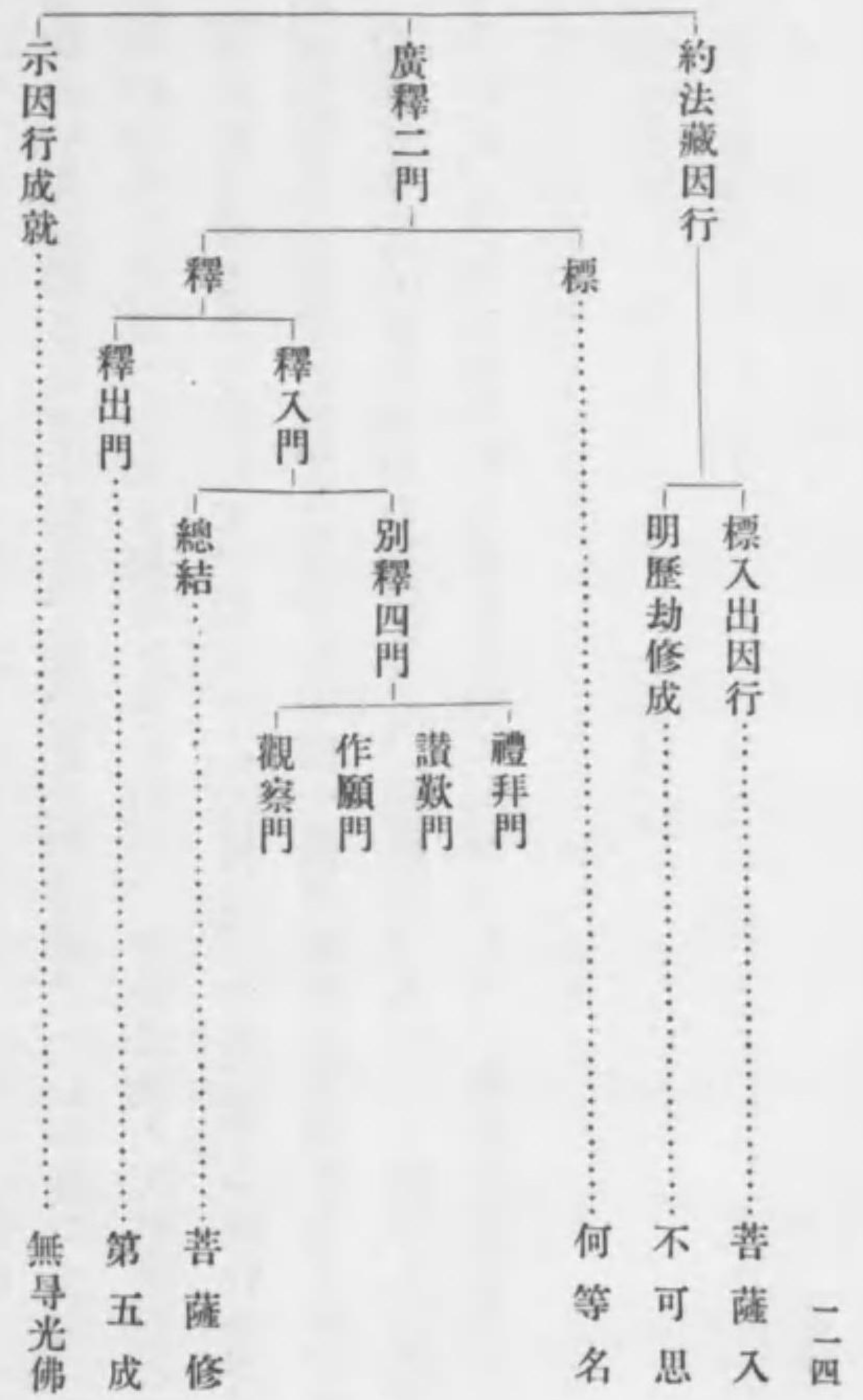
第二二門 讚

(一) 法藏 因行

菩薩入シテ出シテ五種門ニ 自利利他行成就

不可思議兆載劫 漸次ニ成就シテ五種門ニ

是より以下は、正しく『二門偈』の正所明たる二門を明す所で、實に正宗分中の正宗なり。上の一心の相を明す一段は、『論』の偈頌の意を述べたるが、之より下三十行は長行の意にて、五念五功德十門入出の因果を明す、上の一心讚は、一心の一因に依て往生安樂の一果を得ることを明し、今、此二門讚は、一心等流の五念（行體に約せば、往生の因行なり）に依て五果を得ることを明す、五果は永く次第差別せず、遂に速得菩提の一果に歸することを明して、因の一心に應じ、一心五念の開合の異なるが如く、一果五果、亦開合の異なるを示して、遂に一因一果に歸する所明なりとす。然るに、行者所修の一心五念は全く彌陀廻向の法にして、法藏因中に修成し給ひし五念が行者に全現せしものなれば、三業二利の行を法藏因中の所修として、取扱ひ給ふが此一段の所明なり、此下大科三段に分つ



此二行四句の據は、『淨土論』終に「菩薩入四種門、自利行成就、應知、菩薩出第五門、廻向利益他、行成就應知。菩薩如是修五門、行、自利利他速得成就阿耨多羅三藐三菩提故」の文と「利行滿足章」の初の「復有五種門、漸次成就五種功德」の文となり。

菩薩とは、法藏菩薩なり。

五種門とは、五念門なり、論文に修五門行と云ふを指す。

入出は、自利々他の異名なり、前四念は自利の行、後の廻向は利他の行ゆへに、五念門入出の功德を修行し給ふを云ふ。

自利々他行成就とは、自利々他は五念門の入出にして、前四念を修して自利の行成就し、第五の廻向を修行して、利他の行を成就し給ふを云ふ。

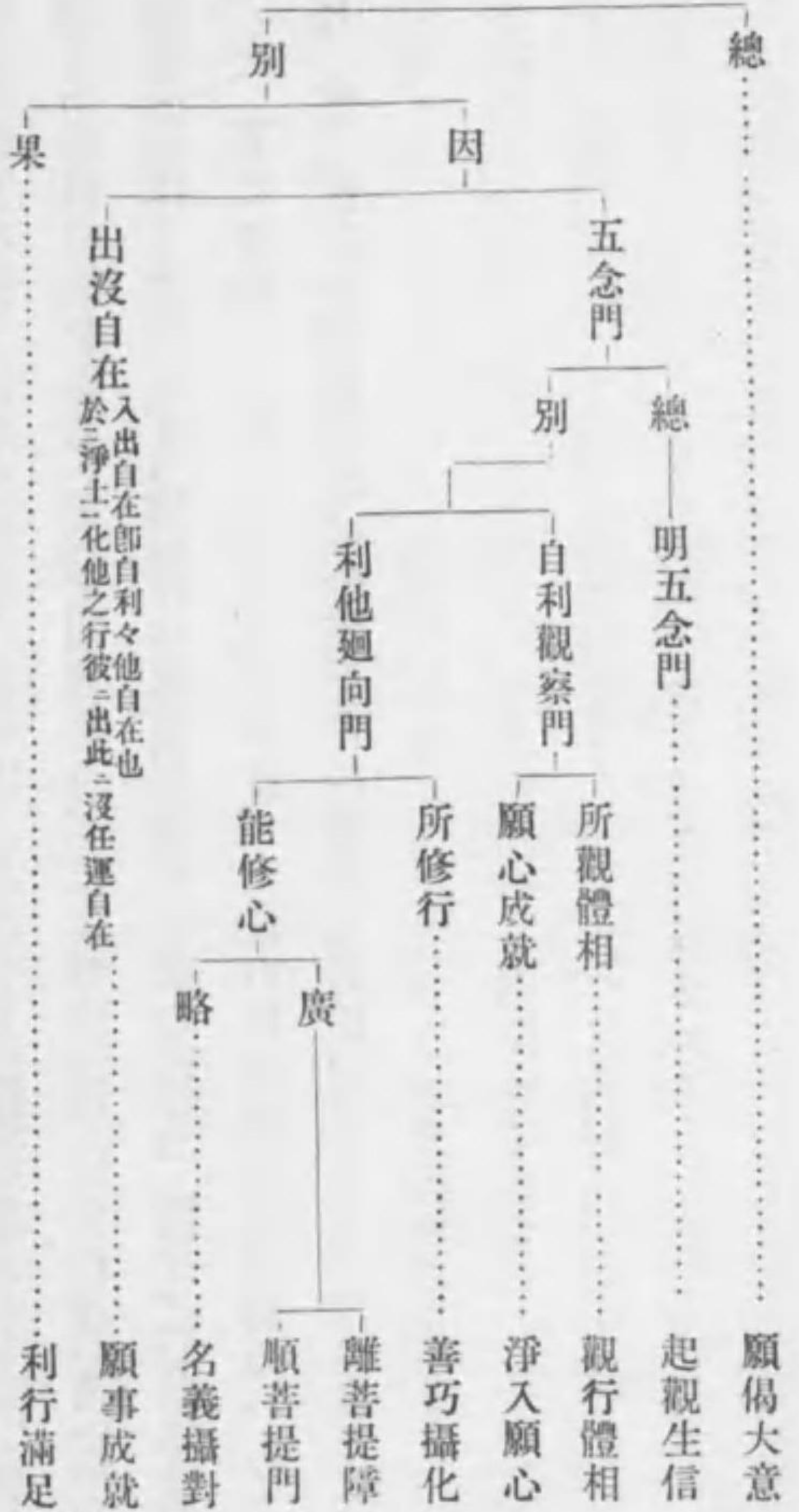
不可思議兆載劫とは、共に數の名なり、不可思議は印度の數の名なり。『舊華嚴』三十、心王菩薩問阿僧祇品に百二十數を説く、其終に十大數を説く、十大數とは、佛境界を説く數なり、一に阿僧祇乃不可説なり、其中、不可思議は第八數なり（百二十數の初は百千、百千の百千、進轉す）、次に兆載は支那の數なり、黃帝の算法にて二十三數あり、其中、第十五が兆、第二十三が載なり、『大疏鈔』四十五『華嚴音義』三三可見。

漸次成就五種門とは、據の論文では、五念門の因に依て漸次に五功德の果を得る、例へば、禮拜に依て近門の果を得、讚歎の因に由て大會衆門の果を得る如きを云ふ、され

ば、五種門とは五功德門のことなり、『論』の當相では、願生行者が所得の五功德の上に、一往淺深の差あれば、漸次成就と名くるが當前なれども、今、宗祖が茲へ引用されし思召は、五種門とは、永劫修行の結果として成就せし因果の功德、即ち我等が成佛得脱すべき因行（名號）成就を指せば、此因行果徳を總攝せる名號は、五兆の漸々の修行に依て成就されしものにて、一時頓成の安物に非ざることを表はす意なり。不可思議兆載劫修行の相は、『大經』勝行段に顯はる、「信卷」約法三信釋並に『散善義』至誠心釋參照すべし。

論文の當相では、五念門は、當然願生行者の所修たるべきの行なるを、引上げて法藏所修と見る見方は、我祖獨特の見解にして、實に一家不共の創見なり。此義は『淨土論』の「善巧攝化章」より出て、『論註』卷末の他利々他の深義を歴て成立する義門なれば、先『論』の十章より攻究せねばならぬ。十章とは、論の長行であるが、長行は解義分とも稱して、偈義を解釋したものである、夫に十章を開くが十章である。十章とは、第一が「願偈大意」、此は總じて一偈の大意を述べたもの、此偈の大意は觀見願生の四字に盡

きてある。淨土の阿彌陀佛の本願を信じて、淨土を願生する一念歸命の信心を述べたものと云ふのが、第一の大意である。此は一偈全體に亘る故に、總釋にして、第二「起觀生信章」已下の九章は、別釋である。別釋の中に因果を分てば、前八章は五念門の因を明し、第十章は五功德門の果を明す、されば、長行十章は總別因果の二門にして、五念の因に依て五功德の果を得ることを明すなり、五念の因は、合すれば『論』初の歸命の一心、五功德の果は、合すれば『論』終の速得菩提の一果なれば、開けば五因五果、合すれば一因一果、更に要約して果を因に攝すれば、一論の始終は廣大無碍の一心を宣布するの外なし、今、便宜の爲に十章の分際を左に表示すれば、



元來、『淨土論』は、偈頌は論主の自行に約し、長行は論主の化他門に約する、故に、第二「起觀生信章」には、善男善女が五念門を修して、往生することを明せり、然るに、上標の如く、「起觀生信章」は總じて五念の行を明し、第三第四は別して觀察門に就きて

明してある、此邊は、善男善女の修相と見ねばならぬ。

然るに、第五の「善巧攝化章」からは菩薩を出してある。而も、其修相甚だ深高にして深位の大士ならでは成じ難き定慧相順の心に住して、廣略相入を知るが如き、與拔の心に住して、五種の功德を廻向して一切衆生の願生心を發起せしむるが如き、實に高尚なる明し振なり。尙、六・七・八の三門の如き、其能修の心を明すに無着の慈悲を出せり、此の如きは、到底善男善女の發起し得べき所にあらず、五念門の中、前四念は善男善女に約し、第五廻向は急に菩薩に變改し、而も修相甚だ前段に殊異するは、所以なくんばあるべからず、之を『論註』卷末の他利利他の深義釋より、論意を深く更に奥深く考察し、此菩薩を法藏菩薩と見做し、廻向門のみならず五念門全體を、法藏菩薩の因位修行の行相と見極められしが、此『二門偈』の特異釋なり。

如是く、我祖が法藏所修の義を建立なされし義脉を略言せば、『論註』卷末に、願生行者が五念門を修して自行化他せしが因となりて、淨土に於て速得菩提の果を得たと云ふ（「利行滿足章」の結文の意）に付き、問答を設けて云く、無上菩提は歷劫修成の後に得べき

もの、云何にして五念二利の因にて、速疾に佛道を獲得せしや。之を答ふるに、千鈞の石は凡力の揚げ得べきには非ざれども、強力之を扶くれば、凡夫も容易に之を揚げ得らるゝが如く、無上佛果は早速に得べき物には非ざれども、強力者の來て扶助することあれば、速得菩提もさのみ難事に非ず。今、論文を見るに、願生行者の背後には、一大金剛力を有する阿彌陀如來が、全身の力を行者に賦與せられ、夫を以つて無上佛果に到達せしめらるゝ。夫を暗示するが、論文に出る利他の二字である。(此事後に再言すべし)

されば、行者の五念の中には、彌陀の五念力が充滿する、表面は行者の五念なれど、中味は彌陀の五念である。夫故に、早作佛の力用ありと云ふのが卷末の「覈求其本」の釋意である、之を約本約末の五念と云ふ。約末五念より云へば、長行十章は行者の五因五果、若くは一因一果を明すものなれど、約本五念より云へば、十章は法藏成佛の因果にして、「淨入願心章」には、先づ大悲與拔の願心を明す、之を満足せしむる爲に、三業二利の五念の修行を永劫に勤作し、「善巧攝化章」にては苦惱の衆生を悲愍して、大悲攝受を作願し、三障を離れ、菩提に順じ、遂に妙樂心を成就し、速得無上道の佛果を得る

と云ふ、如來成道の始終を明すと見るが、此「二門偈」の見方なり、乃て、此「善巧攝化章」已下に出る菩薩の語は、三の意を含むと、先輩「顯深義記」の發揮已來、傳承し來る所である。

(一)に願生の菩薩と見る、此は「論」の顯文に依る凡聖通往の義による。

(二)に淨土の菩薩の還相廻向と見る、此は「證卷」の御所引による。

(三)に法藏菩薩の利他大悲の相、此が當「二門偈」の所明である。此利他大悲心より、三業二利の五念の行功を一名號に攝歸して、第五の廻向門より衆生に廻施し給ふ、衆生は、聞信の一念に、之を全領したる相が一心五念と顯はれて、五功德の果を得る、之を約末の五念と云ふ。故に、次下註釋の下、五念門を明すに約本約末二様に釋してある。

(二)別釋 五門

(1) 禮 拜 門

何等名爲三三念門

禮讚作願觀察廻

云何禮拜身業禮

阿彌陀佛正徧知

善巧方便諸衆生

爲生安樂國意故

即是名入第一門

亦是名爲入近門

此一節の據は、「起觀生信章」に「何等五念門、一者禮拜門、二者讚歎門、三者作願門、四者觀察門、五者廻向門。云何禮拜。身業禮阿彌陀如來應正遍知。爲生彼國意故」と、「善巧攝化章」に「菩薩巧方便廻向者謂說禮拜等五種修行所集一切功德善根、不求自身住持之樂、欲拔一切衆生苦故作願攝取一切衆生共同生彼安樂國」と、「利行滿足章」の「入第一門者以禮拜阿彌陀佛爲生彼國故。得生安樂世界。是名入第一門」の三文に依る。

五念門とは、五憶念門と云ふこと、禮拜は身業なれども、憶念心より顯はるゝ動作なれば、本に従へて五念門と云ふなり。

正徧知とは、佛の十號の隨一なり、正は根本智にして、徧は後得智なり、此二智を以て、普く衆生を度し給ふ故に、彌陀佛の徳を顯はして正徧知と云ふ。

善巧とは、善權曲巧と熟して、佛の後得智を以て善き謀を運らし、曲げて衆生の機に

從ひ、巧に濟度し給ふを云ふ。

方便とは、「論註」下「方便者通權之智稱」とありて、善巧と同じことなり、故に『止觀』四之一初「方便者名善巧」と云へり。出來惡きことを、上手に味よく出かすを云ふなり。「善巧方便諸群生」の七字は、後四念にも通はいて見よ。

入第一門とは、「利行滿足章」の語にして、本論の文に「入第一門者以禮拜阿彌陀佛爲生彼國故得生安樂世界是名入第一門」とある。此文の中、「禮拜阿彌陀佛」等は因の禮拜門を示し、「得生安樂世界」とは果の近門の相、「是名入第一門」とは禮拜門を結ぶなり。今、茲に「即是名入第一門」とは禮拜を結ぶ論文により給ふ、是とは體を指す語、前に明したる禮拜門の四句を指して是と云ふ、「名入第一門」とは因の禮拜門を結し、「名爲入近門」とは果の近門に配屬するなり。

亦是名爲入近門とは、果の近門なり、茲に入とは、自利々他入出の入にあらず、從因入果の入なり、故に、出第五門の下にも「入菌林」等と入の字を用ひてある。『論註』下「初至淨土是近相、謂入大乘正定聚近阿耨多羅三藐三菩提」とありて、正定聚に入て佛果に

近づくを近門と云ふ。『論』論註の當相では、五功德門は總て當益なり、然るに、我祖は近大二門は現益と見給ふ。

此一節の文を御眞本に照すに、大味本は約本點にして、鬼長本は約末點なり、約本の時は、全く法藏所修の禮拜行にして、「身業ニ禮ニシキ」と讀む、即ち、勝行段の「恭敬三寶奉事師長」、勝因段の「詣世自在王如來所稽首佛足」の永劫修行の時の過恒沙の如來を恭敬禮拜し給ふ相なり、斯くの如く禮拜する目的如何となれば、一切衆生を憐愍して、種々に善巧方便して、往生淨土の思慕志念を増發せしめんが爲に外ならず、法藏菩薩永劫の修行は、衆生に願生心を起させる爲であつたと言ふ意で、「阿彌陀佛正徧知善巧方便ニレテ諸群生ニ爲テ生ニ安樂國ニ意上故」と讀まさしめ給へり。又、鬼長本では、「身業ニ禮ニシテ阿彌陀佛正徧知善巧方便ニレテ諸群生」と讀みて、行者の禮拜となし、「爲テ生ニ安樂國ニ意上故」は行者の禮拜の目的が願生にあることを顯はす文として、全く約末衆生の讀方なり、行者の禮拜は、本を尋ねれば、彌陀の切なる悲心攝受の禮拜行の反映なりとの意を、顯はし給ひしなり。

問云、我祖は近大二門を正定聚とし、現生の利益とし給ふは、『論』論註に背くに非ずや。

答云、有説に云く、論文を見るに、宅門の下に、明かに蓮華藏世界に入るとありて、彼土の益相明了なれども、近大二門は得生又は得入とありて、生れ終りたことゝは云はず、成就の文の即得往生と同じく、必ず往生するに定ることゝも見らるゝ邊あり、故に、現當二益の義を奄含する、『論』論註でも、眷屬功德の「四海之内皆爲兄弟也」の文（『論註』下_註）『三經文類』_註）及び妙聲功德の「尅念願生亦得往生」の文（『一多證文』_註）『論註』下_註）又清淨功德の「不斷煩惱得涅槃分」の文（『論註』下_註）『正信偈大意』_註）『改邪鈔』末_註）『眞要鈔』會本末_註）『六要』_註）の如きは、現生不退の義あれば、我祖は鸞師の意を得て現生に引上げ給ふと云ふ。

一義云、『論』論註の顯文には、現生正定聚の義なし、宗祖眼より見たる時、始めて『論』論註に現生正定聚の義の顯はれ來るものにて、心眼未開の凡人の觀破し得ざる所なりと云ふ。

我祖の現生正定聚を立て給ふは、別に見る所ありて建立し給ふ義にして、十一願の如き、現文分明に彼土正定聚なり。然るに、此土正定聚を建て給ふは、本願では三十四聞名得忍願、三十三觸光柔輭願(『六要』五^引證入正定聚及心光常護益、亦轉惡成善益)。『小經』では、證誠段の終りに諸佛護念するが故に、現當に不退轉の益を得ることを明す(『漢語燈』三^引。其他、『易行品』の「即時入必定」の文、及び「於此身得至阿惟越致地」の文。又「若人疾欲至不退轉地」の文等にて、此等は誰が見ても現生不退の文なり。(『流情記』中^{左五})。

我祖によれば、現生正定聚とは極樂行の切符を握ることなり(斷惑證理に關係なし)。船の切符を握る故に、淨土に到着したるなり。故に、彼土の人が切符の所有者なるは當然のことなり。我祖にありては、彼土不退の人は必ず此土不退の人なり、信心の切符なしに、乗船往生はならぬ故なり。彼土正定聚を此土に引上げて教へ給ふは、彼土正定聚中に含まれてある。此土不退を表へ抽出して、往生即成佛の妙土たることを知らせん爲なり。再言すれば、彼土不退とは佛果と同意義にして、因果不二の正定聚であると知ら

せる爲に、因位に屬する不退の名を此土へ引上たるなり。此土にて正定不退の行者となりて淨土に往生す、既に往生し已れば、淨土は事々無碍の世界なれば、一位に一切位を具して圓融無碍なり。次第階級に著縛する有所得の病執は、佛力に因て消散せられたるが故に、因果不二なり、之を往生即成佛と云ふ。既に證得し已れば、佛果は自在の故に遍應無方にして行因利生する、故に因位の各位に自在に遍入して、供佛度生するは平等門中の差別なり。故に、往生の後に因位の諸位に住して、自在の化用を顯はす、之を普門示現と云ひ、從果向因と云ふ、之を五等に分けたるは、一果を五念の因より眺めたるに依る、五念五果は相似の因果にして、禮拜等に對して同類相似の五果を施設したれば、文相に約すれば、五因五果は前後次第あるが如くなれども、其實一時横具の所得にして、平等に即する差別なれば、一時頓現同時の獲得にして、高下淺深なし。『六要』六^引熟讀すべし。

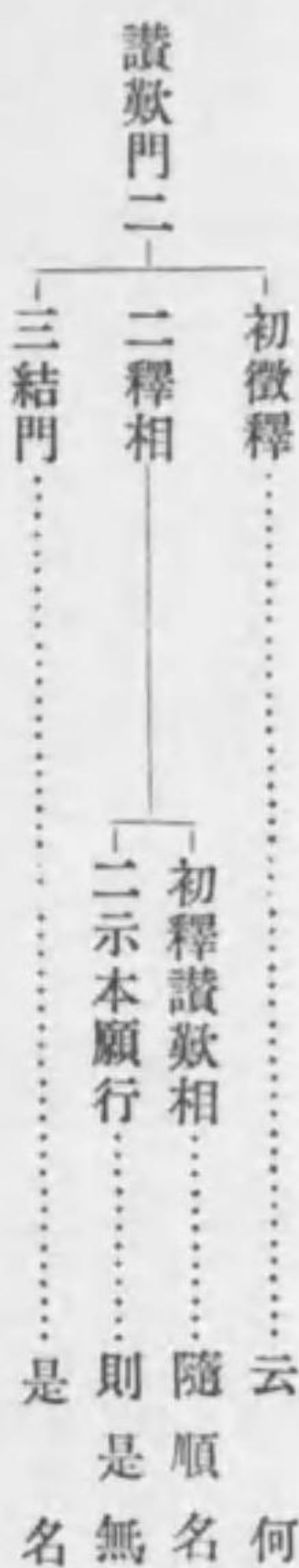
(2) 讚歎門

云何讚歎口業讚

隨順名義稱佛名

依_レ如來、光明智相_ニ、
 則斯、無碍光如來、
 是名爲_三入_二第二門_一、
 欲_下如實、修相應_上故、
 攝取選擇、本願故、
 即獲_三入_二大會衆數_一、

此下分科すれば



此一段の據は、第一句は「論」の「起觀生信章」による。

隨順名義等の二句は、「利行滿足章」の「入第二門者以下讚歎阿彌陀佛隨順名義稱_三如來_一、名_二依_レ如來、光明智相、修行_上故_一」の文に依る。

「欲_レ如實修行相應_レ故」より取る、終の二句は、「利行滿足章」の論文の「得_レ入_三大會衆數_一是名_三入_二第二門_一」の文を前後して用ふる。

凡そ讚歎門には二種ありて、

(一)は、直ちに佛名を稱へて佛徳を讚ずる、所謂稱名にして略讚なり。

(二)に、偈を作りて佛徳を讚め、又は言説を以て佛徳を宣揚する、此は廣讚なり。

今、『論註』の讚歎門には二義を合攝する、故に、『註』下に讚揚歌嘆を以て讚歎を釋する、善導の五正行に、讚歎の外に別に稱名行を出すは、往生の行に就て建立する故に、稱名を別開して正定業とする。而して、前三後一を助業とする。今、一論の讚歎門は一心の安心より流れ出る起行なる故に、廣略併せ取て讚歎門に收む、此時は、五念の行各頭角を並べて助正を分けぬ、之が五正行と五念門との筋の違ふ所なり。然らば、廣讚に約して、所有口業の讚歎に就きて釋しても然るべきに、何故に「稱彼如來名」と稱名のみに就きて釋を設けたるや、之を答ふるが「則是無碍光如來攝取選擇本願故」の二句なり、稱名念佛は彌陀が、萬行中より選擇攝取なされた衆生往生の正定業なる故に、稱名の一行を擧げたるなりと顯はす意なり。

文意を解すに、口業讚已下の文、大味本は約本、法藏因修に約する訓點にて、兆載永

劫に遠離危言修習善語自利々人して、諸佛の功德を讚歎し給ひしは何の爲ぞなれば、我の佛徳に隨順し、名義に相應して、讚歎せし如く、衆生にも我と同じく名義相應の稱名を稱へさせ、讚歎させたいと思召すが爲である。

名義相應の稱名とは、信の上の稱名にして、換言すれば、十方世界を照耀して、念佛の衆生を攝取し給ふ佛なりと知りて、稱へる稱名が如實修行の稱名なり、此稱名を稱へさせたい爲に、永劫に積功累徳して、口業讚歎の行を勵ませられたとの意なり。此菩薩の大悲が行者に徹底して、名義相應の稱名が稱へらるゝと云ふのが、鬼長本の約末の訓點の意なり、然るに、鬼長本には左右二點ありて、約末約本兩様の點を附してある、其思召は念佛行者の三業の起行は、總て他力より催さるゝものにて、彌陀の慈念の表はれぞと提耳懇誨し給ふに外ならぬ、我等は日夜に、この切なる慈訓を服膺せねばならぬ。

次に文を解せば、隨順名義とは、名義に相應するを云ふ。

名とは名號、義とは光明なり。名號の謂とは、彌陀の名義なり、『小經』には、「彼佛光明照十方國無所障礙」の故に、阿彌陀と名づくとある、何の爲に十方を照すや、『觀經』

で見れば攝取衆生の爲なり、乃て、『小經和讚』に、『禮讚』(六)に依て彌陀の名義を釋して、「十方微塵世界ノ、念佛ノ衆生ヲミソナハシ、攝取シテステサレハ、阿彌陀トナツケタテマツル」と。此釋に依れば、光明攝取が名號の義なり、光明には破闇の徳(闇とは、總じては一切の煩惱、別しては不了佛智の疑なり、佛智に暗き故に疑のことを無明と云ふ)あり、疑の闇晴れて他力不思議を信ずる一念に、正定聚に住し、光明に攝取せられ、往生の志願を満足する、之を滿願と云ふ、此破闇滿願の二徳を具へたが光明、其光明に名を付けたが名號なり。行者之を心に受得して、疑晴れて即得往生の身に定まり、志願満足して稱ふる念佛が、名義に隨順したる稱名なり。聞名の一念に自力の暗はれて、即得往生の大益を得るは、名號の破闇滿願の兩益なり、「光明遍照十方世界」とは破闇にして、「念佛衆生攝取不捨」とは滿願の益なり、之を光明の兩益と云ふ、此破滿の名義に隨順する方法は、無碍光に歸命して、攝取の光益に預るの外なし、依て、『和讚』に「無碍光ノ利益ヨリ、威徳廣大ノ信ヲエテ、カナラス煩惱ノコホリトケ、スナハチ菩提ノミツトナル」とは、光明破滿の徳なり、又云、「無碍光如來ノ名號ト、カノ光明智相トハ、無明長夜ノ闇

ヲ破シ、衆生ノ志願ヲミテタマフ」とは、光明名號の破滿の二徳なり、之を佛身て云へば、「光明遍照十方世界」とは實相身なり、「念佛衆生攝取不捨」とは爲物身なり。我を助け給ふ(爲物身)如來(實相)なりと知るが、實相爲物二身を知りたるなり、之を如實修行相應と云ふ。

如實修行とは、名義に隨順するを如實と云ふ、如とは隨順の義、實とは物の實體にして、今茲では名義なり、「攝取不捨故名阿彌陀」の名義に隨順して、稱ふるを如實修行相應と云ふ、『和讃』に云く、「如實修行相應ハ、信心ヒトツニサタメタリ」。信の上の稱名が、如實修行相應なり、中の句に「依如來光明智相」と云ふも、名義に隨順することなり。

依とは、依順で隨順の義、光明智相とは、光明即智相なり、『論註』下ニ「佛光明是智慧相也」と云ふ、智慧より放つ光明に依順して稱へよとの意なれば、光明破滿の徳に隨順すること、如何に名號を稱ふるとも、無明猶在の稱名にては名義に相應せず、又如實修行ではない、光明の徳に相應し、信の上より往生の志願を満足しての稱名が、佛徳讚歎の稱名なりとの意なり。

欲の字、大味本に「オホス」と讀ましめらる、法藏菩薩の思召を表はす、其意重し、「オモフ」と鬼長本にあるは、行者の意樂を表はす、其意輕し。

次に則是無碍光如來攝取選擇本願故とは、此二句鬼長本になし、大味本の時に加へ給ふ、此二句の意は、上に擧ぐる稱佛名の稱名行は、如來が因中に於て、萬行の中より選擇攝取せられたる一行にして、勝易の二徳を具へたる選擇本願の不行なることを顯はす、其行體を云へば、「是名正定之業」の念佛にして、衆生往生の正業正因なりと云ふ元祖相承の義脈を傳ふる語なり、此義は、乃至十念の行を表とする口稱本願の義相なり、第八願に於ては、衆生往生の行業としては、専ら稱名を以て正業と誓ひ給へり、萬行の中に、念佛を選択して往生の業と定む、往生行を論ずる時は、五念門の中、殊に稱名を以て往生正定業とす、而して禮拜等の四は、非本願行なれば、稱名の爲の助業なり、但し、此義は約法の義にして、佛の誓の上で談ずる義門なり、約機の時は、信心正定業にして、稱ふるものを助け給ふ本願なりと、信ずる信心が正定業なり。又、禮拜等を助業とする義邊は、報恩行たる稱名の助けとする義で、禮拜等の業作(業因の義にあらず)を助けと

して、稱名相續すると云ふ意なり、我祖が、今此に此二句を安置し給ふ所以は、五念門中、殊に稱名の一行のみが選擇本願の行にして、五念行中の主位を占むるものと示し給ふものなり。

凡そ、五念門の取扱に二通りありて、

一には、一心より等流する報恩行とする場合、即ち『論』の偈頌の一心より長行の五念を見たる場合、此時は一心の外に五念ありて、五念門各々頭角を並べて正助なし、共に報恩行なるが故なり。

二には、長行の「起觀生信章」に往生行として五念門を列ねて、畢竟得生の因行として示さるゝ時は、第十八願へかけて見ねばならぬ、第十八願には、餘行を捨て、念佛の一行のみを往生の因としてある。されば五念と云へど念佛は正にして、其他は助業と見做し、助正を決判せねばならぬ。一は、五念共に報恩行と見る義脈、二は、往生の因行と見る義邊で、五正行と同じく助正を分ち稱名を主人公とする義脈なり、香月院辯じて云く、山伏姿で關所を通る時は、義經も辨慶も忠信も同じ資格なれども、宿に泊りて頭

巾錫杖を脱捨てた時は、義經は主人で其他は家來なり合法して可知。

是名爲入第二門即獲入大會衆數とは、結文にして、初句は因の讚歎門を結び、後句は果の第二門に配屬するなり、大會衆とは、十方より淨土に來會する聖衆のことと、論文では彼土の益なり、我祖は、往生即成佛の見地より、蓮華藏界已後を彼土の益とし、前二門を入正定聚として此土の益とし給ふ、其意、彼土正定聚とは名は因位にあれども、其實證は極果と同じくして、宅屋二門と同列たるべきものぞと知らしむるに在り。論文には、「得入大會衆」とあるを、殊に獲入と改め給ふ祖意を察するに、現生不退の益と極印し給ふ思召の程が伺はるゝ。祖師の筆格として獲の字は主に現益に用ひ給ふが故である。

(3) 作願門

云何作願心常願	一心專念願生彼
得入蓮華藏世界	欲如實修奢摩他
是名爲入第三門	亦是名爲入宅門

據は、「起觀生信章」の「云何作願、心常作願一心專念畢竟往生安樂國土欲如實修_二行奢摩他_一故」の文と、「利行滿足章」の「修奢摩他寂靜三昧行_二故得入_二蓮華藏世界_一」の文に依る、結文の二句は例の如し。

作願門は、歸命の一念所具の願生心が後起相續に現はれて、縁にふれて往生淨土を願ひ喜ぶ心にて、一心等流の起行なり、此心は其本、法藏菩薩の衆生の爲に志願倦むことなく、大願成就して、之を名號に攝めて、衆生に廻向し給ふ故に、之が行者の機に顯れて、常に作願する心が起ると示し給ふなり、大味本は、法藏所修に約して「常ニ願シタマヒキ」と訓じ、鬼長本では、法藏菩薩の衆生の大悲廻向心を現はして「願セシム」と訓じ給へり。「大經」に、法藏菩薩の願心を顯はして、勝因段に「願我作佛齊聖法王」と云ひ、又勝行段に、「勇猛精進志願無倦」と云へる文は、此段の據なり。

作願の語は、意業に屬すれども、平生見聞の縁にふれて、身口二業の行と平行して起るゆへに、起行に屬する、花を見て、淨土を聯想して作願するが如き、稱名して、願生心を起す等、皆此類なり。古來、初發を發願と云ひ、後起を作願と云ふと分つことなれ

ども、時には發願を以て作願を釋することもあり（『禮讚』_三）、一概す可からず。但し、唯今の作願は後起相續上の沙汰と心得置くべし。乃て、『流情記』に作願門を他力の大信とする説は、取らぬと傳ふる所なり。

一心專念とは、古來異説あり、『良忠記』_四專念の語は心念口稱に通ずと云ふ、『刪補鈔』_七には、稱名を顯はすと云ふ、吾先輩にも心念稱名の二説あり、心念説では、『易行品』の「念我稱名」の念、『論註』の「念無碍光如來」の念と同じく、心念の義とす、稱念説では此一心專念は善導の一心專念と同じく、悲願の心行を顯はすと云ふ、語は、作願門の下にあれども、意は他の四門に通じて、一心五念を略すれば一心一行となる相を顯はすと云ふ。已上の二説、各道理あれども、且らく前義に據る、作願門に一心專念の語の出るは、通門で云へば、止觀の止に當るが故なり、別途で云へば、起行相續上の一心專念にして、一心即專念なり、他に心の散らぬと云ふ一心專念にして、安心として見る義邊にあらず、『和讚』に「一心歸命タヘスシテ」の一心、善導の「世尊我一心」の一心の流類なり、此一心は、往生の業とせざれば、鎮西の所謂起行の一心に同じからず。一心の安心

に催されて、昨日も今日も一筋に彼淨土へ往生を願ひ喜ぶを作願門と云なり。

得入蓮華藏世界とは、『淨土論』では安樂淨土の事を蓮華藏世界と云ふ、蓮華藏界の説は、其本『華嚴經』盧舍那品第四に出て、新經では華嚴世界品第八に出る。

華藏世界とは、諸佛自證自覺の國土を通攝する名にして、諸佛各自證圓滿の世界を莊嚴する、彌陀も諸佛の隨一として、自證の土を持つべき筈なれば、彌陀の淨土を自證の邊より見て、蓮華藏界と名づけたるなり。

蓮華藏界とは、其國土が最下の大蓮華に依て任持されて居る故に、蓮華藏界と云ふ。藏とは、世の倉庫の如く、含藏と出生との二義あり、眞如の萬德を攝持し、一切の事を出生するに喩ふ、法性の儘を覺れる佛が、法性の儘を顯現せる世界を、蓮華藏界と云ふ。他經所説の蓮華藏界の名を借り來りて、安樂淨土の名としたるなり。今、『華嚴』所説の華藏界と『大經』所説の安養界とを比較するに、四同三異あり。

- (一)に、所證同、共に中道實相を證得したる佛自證の土なるが故に、
 (二)に、四德同、共に常樂我淨の四德を具するが故に、

(三)に、知見同、共に唯佛與佛知見の境界なるが故に、

(四)に、遍所同、佛身佛土共に周遍法界の故に。

次に三異とは

(一)に、通相と別願酬報の異、華藏世界は諸佛自證の土と云ふのみにして、別願酬報にあらず、安樂世界は「四十八願莊嚴起超諸佛刹最爲勝」なり。

(二)に、自證土と爲物土の異、華藏世界は自證の土で、攝化の土ではない、唯佛一人居淨土式の世界である。然るに、安樂世界は若不生者の誓約より成りし世界にて、攝衆生の國土なり。

(三)に、染淨鎔融と唯淨の異、華藏世界は染淨融通して淨穢の別を見ず、故に、此娑婆世界も華藏界中にありて、自證土の妙相を表はして居る、舍那品で見ると、華藏世界に十二佛國七種世界を説く、其中、第十二重が娑婆界である。然るに、安樂淨土は過十萬界の佛土にて、唯淨の世界なり。(已上河野講師の説)

欲如實修奢摩他とは、奢摩他は次に出る毘婆舍那と一具の物にして、定と慧なり、奢

摩他は止なり、定なり、寂なり、靜なり。毘婆舍那は觀なり、慧なり、照なり、明なり、定水靜なれば明月を宿す如く、散亂を離れて一境に專注すれば、眞智を生ずる、之を定に依りて慧を起すと云ふ、六度の行でも、禪定は奢摩他、智慧は毘婆舍那なり。一般に性相の上で云へば、無漏の定慧を奢摩他毘婆舍那と云ふ。

然るに、今、此に云ふ奢摩他は、『論註』下^四三義を以て釋する、

一には、一心に彌陀及淨土に心を向ける時は、如來の名號、又は淨土の名號の徳として、自然に三業の惡を止むること、梅干と聞きて、直ちに酸味を感ずるが如し。

二には、行者若し淨土に往生すれば、土徳として自然に三業の惡を止むる、

三には、淨土は大乗善根界なるが故に、自然に二乘自度の心を起さぬ。

已上三義、初は現益にして、第二、三義は當益なり。

如實修行とは、上の讚歎門の如實修行は名義相應で、法の實體に契ふを「如實修行」と云ひしが、今、此作願觀察の如實修行は、如來如實の功德より生ずる行を示す語で、他力を顯はす言葉なり。

此一段の文意は、法藏因位の時、勇猛精進志願無倦に修行し給ひしは、何の爲ぞなれば、一切衆生に一心に願生彼の意を起さしめんが爲(現益)、更に進んで、淨土に往生しては、佛果の大定(寂靜三昧)を得せしむるが爲である。

修奢摩他とは、『論』では從因向果の菩薩行に約する故に、修の字を用ふれ共、今、此に引用されし意趣は、宅門屋門は必至滅度證大涅槃の位なれば、奢摩他毘婆舍那は大智にして、二轉依の妙果なり。文は菩薩行に約する故に、前後次第あれども、其實は一念に具足し、同時に獲得するなり。此奢摩他毘婆舍那の宅屋二門を、香月院は滅度の上の定慧と解せしが、開悟院は『論』『論註』に順じて、八地已上の菩薩地と見られたり。依て、我祖の上に宅屋二門を菩薩位で取扱ふ義門ありと辨ぜられたり、此は從果向因で取扱ふ義門なり。

(4) 觀 察 門

云何觀察智慧觀 正念觀彼欲如實

修行毘婆舍那故 得到彼所則受用

種々無量法味樂 卽是名入第四門
 亦是名爲入屋門 菩薩修行成就者
 四種成就入功德 自利行成就應知

五行十句の中、初三句は因の觀察門を明し、次の二句は屋門の樂果を明す、次の二句は結文なり。後の三句は、前四念自利の行成就を明して、入門を總結するなり。據は、初三句は「起觀生信章」の論文、四・五の二句は、「利行滿足章」の論文の「得到彼處」等の文に、則無量の三字を添加せるものなり。六・七の二句は、「利行滿足章」の「是名入第四門」と標文の屋門の文とに依る、八・九・十の三句は、『論』に「此五種門初四種門成就入功德」の文と『論』を菩薩入四種門自利行成就應知の文に據る。

文を解すに、觀察とは『論註』下五云「心緣其事曰觀觀心分明曰察」、淨土の依報なり、正報なりを、分明にハツキリ緣慮することを觀察と云ふ、固より一心等流の起行觀なれば、聞思の觀にして、修慧の觀ではない、智慧觀とありても、修慧ではない、聞思二慧なり、凡夫が信後相續の上より淨土の莊嚴を心に思ひ浮べて喜ぶ程度のものなり。

正念とは、雜念(藥師大日等を觀察するが如し)と邪念(邪見の念)に簡ぶ。

彼とは、上の蓮華藏界を指す、一心に彌陀の淨土の莊嚴を思ひ浮べることを、正念觀彼と云ふ。

如實修行とは、所觀の境が如實なる故に、能觀の行者が自然に其德澤を被るを如實修行と云ふ、依て、『論註』下四に「觀彼三種莊嚴功德」此功德如實故修行者亦得如實功德」と云へり。

次に毘婆舍那は、前段にも記せし如く、觀の梵名なり、之に付、『論註』下二義を出す。一には、此土の觀、此は娑婆に在て淨土を心に思ひ浮ぶる聞思の觀なり、此は一心等流の起行觀なり。

二に、彼土の觀、此は行者が彼土へ往生して、彌陀佛を見上れば、速かに寂滅平等法身を證ると云ふ。

此二釋は、一は此土の觀察門に約し、次は淨土の見佛に約して觀察を明したものの、夫故に、此下へ不虛作住持の文が引合せてある。

今、我祖の此に引用されし思召は、第一釋が入用にして、此土に於て行者に淨土を觀想せしむるは何の爲ぞなれば、毘婆舍那(聞思の觀)を如實修行せしめんが爲である。眞の妙觀などは、下凡の企及し得べき業にあらねど、菩薩永劫に智慧無碍の徳を積せられ、種々に善巧方便して、正念觀彼の心を起さしめ給へり、之が行者に顯はれて一心等流の起行觀、法藏菩薩より云へば、其願心が行者に反映して、如實修行毘婆舍那と顯はれ出たのである。約まる所、正念觀彼と如實修行とは同意義なり、此土で如實毘婆舍那の正念觀彼を因として、彼土に於て無量の法味樂を受用する、之が彼土の屋門の相である。論文の上では、宅門屋門と次第漸入の順序に列ねて、不次の次を立つれども、我祖にありては、内證平等門より見て、二門共に大涅槃の相と判じ給ふ。此に無量法味樂とは『論註』下_{三十四}四種の法味樂を明せり、初二は依報味、三は主功德味、四は伴功德味なり、味樂とは、味即樂なり(『義章』十一_{三十三}「甘_{カクシム}神_{カクシム}道法_ニ是名爲_レ味_{カクシム}樂_{カクシム}與_レ味名別其義不_レ殊_{カクシム}」)、淨土にて二十九種の莊嚴を味觀するを無量法味樂と云ふ。

此一段の文意、大味本では約本、法藏の訓點にして、「智慧_{チマキ}觀_シ」と讀みて菩薩の智慧を以て正觀し給ふ義、「正念觀彼」は行者が菩薩の正觀力を受領して、他力に由て淨土の依正を觀察するを云ふ、依て、「觀_シ」と讀む、其正觀せしむる目的は、毘婆舍那を修せしむる爲なり、此中、欲の字「オホス」と讀みて、菩薩の意樂を顯はす、此迄は現生の所作、「得到」已下は彼土の屋門受用法樂の益なり。

又、鬼長本に依れば、約末衆生の訓點にして、衆生の觀察行は他力に催されて顯はれ出る報恩行なることを指示して、「智慧_{チマキ}觀_シ」と訓點し給へり、此世では、淨土の依正を心に思ひ浮べつゝ、人生を送り、彼土に到りては直ちに無上覺を證りて法味愛樂すると云ふ意なり。

次に菩薩修行成就とは、法藏因位の修行に依て、前四念たる禮讚止觀の修行成就するを云ふ、廻向を首としての行成就なれば、法藏の自行成就は、頓て衆生の自利成就なり、自利々他の關係を論ずるに、普通の場合では、自利の力ありて利他すると説きて、盲愛を排することなるが、法藏菩薩の場合は、自利の功德が丸々廻向の品物なり、此四種の功德は自樂の爲にせず、専ら「令諸衆生功德成就」の爲なれば、法藏の入功德成就は衆生

の自利行成就なり、此意を顯はすが終の應知の二字なり。

(5) 出第五門

第五成就出功德	菩薩出第五門者
云何廻向心作願	不捨苦惱一切衆
廻向爲首得成就	大悲心故施功德
生彼土已速疾得	奢摩他毘婆舍那
巧方便力成就已	入生死菌煩惱林
示應化身遊神通	至教化地利群生
即是名出第五門	入菌林遊戲地門
以本願力廻向故	利他行成就應知

上來、入の四念を明し畢りたれば、是より第五の廻向門を明すなり、文長きゆへに、分科を掲ぐべし。



此一段の本據は、『論』の「起觀生信章」の終に、「云何廻向、不捨一切苦惱衆生、心常作願、廻向爲首、得成就大悲心故」と、『論註』下五「還相者生彼土已得奢摩他毗婆舍那方便力成就」の文、及び『論』の「利行滿足章」終の「出第五門者以大慈悲、觀察一切苦惱衆生、示應化身、廻入生死菌煩惱林中、遊戲神通、至教化地、以本願力廻向」故、是名出第五門、の文等に據る。

此廻向門は利他門にして、菩薩行としても尤も重要な地位を占むるもの、二乗の唯自利なるに對して、二利雙行を菩薩道とするは、全く此利他廻向行あるによる、廻向とは、

廻轉趣向の義、自己の善根功德を轉じて、他方に趣向するを云ふ、自善を衆生に施せば、衆生廻向と云ひ、自己の當果たる菩提に向ける時は、菩提廻向となり、前に言ふ如き、自他因果を亡じて、心を實際俱亡の理に向ける時は、實際廻向と云ふ。已上三種の廻向の中、今の廻向は衆生廻向なり、當流は不廻向の宗旨なれば、行者の廻向は常に教人信で取扱ふが常規となつて居るが、若し此義ならば問題は無けれども、法藏に約する菩薩の因行としての廻向とは、衆生に向へば廻施趣向の廻向、佛果に向へば狹善趣求の廻向なるが、衆生に對する廻向の方法は云何なるものなりや、如何にして廻向するや、若し或る善根を爲して、之を佛力を借て他人に施與するとせば、問題はなきも、自分自らが之を他人に廻向するとせば、其方法は如何にすべきや、

思ふに、其方法は大悲による三業相應の修行なるべし、例へば、禮拜行を爲すと假定せん、禮拜の功德を廻向するとは、如何なる意義なりや。修行者が禮拜行を修するに方り、唯自己の當果の爲にせず、其心常に衆生を念じて、慈悲心運びつゝ、行功を勵む、自分の進むと共に、衆生も同じく進ましめんと念じて修行する、故に、出來得べくば、

共同に禮拜行を爲さんとし、又は口に禮佛の功德を讚歎し、又、強く念を常没の衆生の上に馳せて、悲憐の涙を灌ぎ、不可思議永劫の間、數々生を現じて、數々薰習して、縁を衆生に結ぶ、『法華』化城喻品の王子の「覆講下種結縁」の如き、皆是菩薩の廻向門なり、衆生をして禮拜行を見聞覺知せしめ、菩薩の願念を衆生に薰習して、深く衆生の心田に藏め、發習の素地を作る等、三業の所作は廻向の相狀なり、故に、廻向には必ず利他の願心を伴ふ、此願心が衆生に薰じて、感應の因縁を成ずるなり、法藏菩薩が永劫に利他行を累積されしは眞劍なる三業の勤修に因て、感應の素地を作られしものなり。故に、此廻向門の釋には常作願の語を用ひ給へり。『大乘義章』第九廻向義、『摩訶止觀講述』四十五云。

更に、此門に就きて知らざる可らざるは、「施功德」の三字を添加し給ひし思召なり。此「施功德」の三字は、論文になき文字にして、三誓偈の「爲衆開法藏廣施功德實」より取來りしものなり。此文は、彌陀果上の廻向を明せる文にて、因行果徳の功德を名號に成就して、一念歸命の行者へ往還二種の功德を施與することを顯はす、故に「成就大悲心」の後に「施功德」の文を出せり、是、全く果上の廻施衆生行を表はすものにて、「信卷」(『六要』四四)

の「以如來至心回施諸有群生海」の意にして、「南無阿彌陀佛ノ廻向ノ、恩德廣大不思議ニテ、往相廻向ノ利益ニハ、還相廻向ニ廻入セリ」を顯はすものなり。

されば、此一節の往相の段には、因行としての廻向行と果上の名號廻施との二種の廻向を包含するものと知るべし、即「不捨苦惱一切衆」等とは、因位の廻向門、施功徳とは果上の廻向門なり、五念門の修行の中、前四念の因行は佛果に登れば再び用ひず、もはや入用は無けれ共、第五の廻向門計りは因果に通じて閉づる時なし、吾彌陀は爲物身なれば、果上に於て廣く大衆の爲に法藏を開放して、功徳實たる名號を施し給ふ、我等の今度獲上る他力の大信心は、實に此廻向門より御授け下さるものなり。

次に文を解すに、初に「云何廻向」の文點、大味本に「廻向シキマフ」と讀みて、初より約本の點なり、此廻向門、「論」の當意では行者の廻向門なり、偈文の「普共諸衆生往生安樂國」の意にて論主の化他なり、されば、「不捨苦惱」等の文は、往相廻向の文にて、自行の一心五念を他人に勸めて、共に安樂國に生ずると云ふ化他の廻向門なり、然るに、「論註」では此中より還相廻向を開出して、二廻向を明せり、共に是れ利他與拔の行なるが故なり。

然るに、「不捨苦惱」等の三句の論文、其意甚深高にして、志願亦宏大。逆も常人の負擔に堪えざる所なれば、或は深位の菩薩行か、又は淨土の菩薩の還相利生の相とも見らるべき文勢なり。「論註」に、此中より還相を開出するもの、文相餘りに高遠なるが爲なり、論文は多含なれば、此中に往還二種の利他廻向を含むと見るを善しとす。

廻向爲首とは、利他本位の行と云ふこと、唯々苦惱の衆生を救ひたいの一念の外何物もなしとの意を表はす、大悲心に驅られて、火中の衆生を拔濟するの意躍如として顯はる、此文意を、實際に生かして讀下し給ひしが我祖の約本法藏の訓釋なり、實に、法藏菩薩永劫の修行は、廻向の爲の行であつて、大悲廻向心に導かれて、難作能作し給ひしなり、此行に依て、衆生往生の因果を佛邊に成就して、大悲心を満足して、正覺の彌陀となり給ふた。此法は、廻向の爲の法なれば、一念信する衆生あらば、廻向の門を開きて普ねく一切に功徳實たる名號を施し、往還二種の利益を與へ給ふ。之を『大經』には「爲衆開法藏廣施功徳實」と説かせられた。永劫の因行では、勝行段の「以大莊嚴具足衆行令諸衆生功徳成就」の文、歎佛偈の「一切恐懼爲作大安」及び「令我於世速成正覺拔諸生死

勤苦之本」の文等は菩薩大悲作願の相なり。云々。

生彼土已已下は還相の相なり、功德を受領する行者に約して示し給ふ。
速疾の二字を解すに、

(一)不虛作住持功德の「即見彼佛同得寂滅平等」(『論』^六)の速疾と見る時、

(二)『論』の終の「速得菩提」の速疾と見るとの二義あり、隨て下の奢摩他毘婆舍那にも二様の解を生ずる。若し、

(一)による時は、淨土に生じて彌陀尊を見れば、速に寂滅平等身を得る、八地已上の止觀双用不動而遊の證を得ること(外相に約する因果不二の因行)、此は『論註』の當相に約するものにて、宅門屋門の止觀を云ふ。

(二)に依れば、往生即成佛の義門にして、淨土に生ずるなり直ちに無上菩提を證る、奢摩他は大般涅槃の斷德、毘婆舍那は大菩提の智慧の德を云ふ。

巧方便力とは、『論註』の文に巧の字なし、此字は「善巧攝化章」より採り來りしもの、彼に「巧方便廻向」とある故なり。

巧は善巧なり。

方便は、『論註』下^七「正直曰方」とは、怨親の別を見ず、隔てを附けぬこと、「外已曰便」とは、吾身を後廻はしにして、人の爲に働くこと、力とは幹用に名く、手強き用きを云ふ。

生死菌は依報に約し、煩惱林は正報に約す。

應化身とは、八相作佛は應身なり、其他の隨類化作身は化身なり。

教化地とは、地を菩薩の心地とすれば、自利門より化他門に趣くこと、又攝化の地處と見れば、二十五有轉廻の處を指す。

利群生の三字は論文になし、菩薩四種功德の第二、「一念及一時諸群生」より取り來る。

爲本願力廻向とは、論文では淨土の菩薩の本願力なり、『論註』下^三「言本願力者示大

菩薩於法身中常在三昧而現種種々身種種々神通種々說法皆以本願力起文淨土の菩薩が、自分の本願にて還相利生するを云ふ、二十二願に出る除其本願を指す。

然るに、我祖は『論註』卷末の他利々他の釋より反照して、淨土の菩薩の還相も往相も、

其本を探る時は、皆如來の本願力に縁ると見極め給ふ。所謂、「覈求其本」の釋意是なり、其次の『註』の文に、「凡是生_三彼淨土_二（_四往相_の）及彼菩薩人天所起諸行_{（還相廻向_の事行_の）}」皆縁_二阿彌陀如來本願力_一故」と云ふ、衆生の往生も、生後の利他たる還相も、如來の本願力の強縁を待て、始て成立することを説き、次に三願を引證して、衆生の往生は第十八願力に縁る、往生して無上覺を證することは第十一願力に縁る、更に二十二願力に縁て還相廻向の大益を得る、我祖は二十二願を還相廻向之願と名づけて、往生する程の者は悉く補處の菩薩となるときめて、其中で其人々の望に任せて、隨類應化を好む者には様々に現身說法度生することを許す、之を補處普賢の徳と云ふ。經文の「除其本願」の除とは、「開也」と註して開許の義、許す意なり、利他の爲には、任意に位地を上下し、又雑多の身を現じ、無量の説法を許すとの意と解釋し給ふ。之が還相廻向の願と呼べる、所以なり。

仍、先輩此本願力を解すに、三義を以て辯ぜられたり。

一には、二十二願の中に説く所の淨土の菩薩の「除其本願」の大悲大願力のこと、淨土の菩薩大悲大願力の鎧を着て、生死煩惱の敵陣に入り、衆生を教化して淨土へ往生せ

しめんとの大悲願力のこと。

二には、正しく二十二の願の御誓に、淨土に生れたる人は定慧平等の寂滅平等身を得て、内の證りは等覺補處の菩薩と同じく、外の用きは普賢の徳を修せしめんと誓ひ給ふ。普賢の徳とは、六道に出て、或は菩薩身を現じ、或は天身を現じ、人身を現じ、畜生身を現じ、種々の身を現じて、衆生を濟度すること、普賢の用きと同じく、觀音の三十三身の如くならしめんと誓ひ給へるが二十二の願の誓なり、故に、淨土の菩薩の還相の用きは、其本を求むれば、二十二の願力の廻向なりと知らしめんが爲に、「本願力廻向故」との給ふ。

三には、此本願力廻向とは、十八、十一、二十二の三願を指す、此時は五門の中の出門計りには非ず、總じて、上來明す因の五念門、果の五功德門、行者の因果の功德は、其本を求むれば、阿彌陀如來の三願力より廻向し給ふ、因の五念と云ふは、第十八願力廻向、果の五功德は十一、二十二の願力廻向、此時は上來の五念五功德を密に結ぶ二句の偈文となる。（開悟院説）

應知とは、自利々他は相關關係なれば、自利を離れたる利他は盲愛、利他を離れたる自利は孤調、二利は相待ち、相助けて完成するものなりと示す語なり。我彌陀は火橋の喩の如く、永劫已來利他を爲しつゝ、自利を完成し、十方一切攝受衆生の願、滿ぜざるに先立て、成等正覺し給へり、三世の諸如來、皆是の如し。利他の爲の巧方便力成就の時が自利圓滿の時にて、正覺已後無窮に利生の益を垂るゝ、二利の相關不離を知らせたる應知なり。

上來の所明を概觀するに、因の方では法藏所修の五念を明して、我等の五念の本を教へ給ひしが、果の五功德門は、總て約末行者の釋體にして、近大等の利益は悉く行者の所得としてある。因は法藏の所修にて、果は行者の所得、仕事は親が働きて、賃錢は小供が受用する、實に難有釋體なり。因の方には法藏所修を表として、行者の所修を影顯し、果の方には行者の所得を表現して、法藏の所得を隱示し、行者の五念の行は其本法藏所修の源より流出づることを教へて、善導の所謂「起善三業、必須眞實心中作」の意（『散善義』）を明したり。是に於て、行者の五因五果は法藏の五因五果の顯現なりと云ふ義

意を領承し得る。

(三) 因行成就

無碍光佛因地時	發斯弘誓建此願
菩薩已成智慧心	成方便心無邪心
成就妙樂勝真心	速得成就無上道
成自利々他功德	則是名爲入出門

(分科) 八句の中、初二句は因位の本願を示す、上來、明せし法藏所修の五念は、無碍光佛因位時の大願を填めん爲の修行なることを明すなり。

發斯弘誓とは、總じて四十八願を指す。
建此願とは、別して十八、十一、二十二の三願を指す、衆生往生の因果は此三願に極まる故なり。

菩薩已成智慧心等の二行四句は、大願成就して大菩提心を満足し、速かに佛果を得給ひしことを明す。

次に成自利々他等の二句は、自利々他成就する故に無上道を得ると明して、入出二門を結ぶなり。

(本據) 第二句は、『大經』の「發斯弘誓建此願已」の文に依る、菩薩已成智慧心等の三句は『論』の「願事成就」の文に「如是菩薩智慧心方便心無障心勝真心能生清淨佛國土」と云ふに依る、速得成就無上道等の二句は、『論』の結文の「如是修五門行自利々他速得成就阿耨多羅三藐三菩提」故の文に依る。終の一句は、「利行滿足章」の論文に依て五門を結ぶなり。

(文解) 弘誓と願との區別は、『述文讀』中_中に出づ、願とは希求の義、「設我得佛」を云ふ、誓とは邀制の義、「不取正覺」是なり。

菩薩とは、法藏菩薩なり。

智慧心とは、大悲を離れざる根本智なり。

次に方便心とは、根本智を離れざる後得智なり、生死涅槃の差別を照して、種々の化用を起し給ふが方便心なり。

次に無執心とは、上の智慧と方便の上に三の部を離れたるが無執心なり。之を『論註』では、離菩提部と云へり、其三の障と云は、

(一)には、凡夫の我執、凡夫は智慧なき故に、我也我所也と執する、之が菩提の部となる、菩薩は智慧ある故に此部を離る。

(二)に、二乗の自樂、二乗は利他の心なし、唯自樂を求むるなり、之が菩提の部となる、菩薩は慈悲ある故に此部を離る。

(三)には、上の慈悲と智慧との二心を以て、凡夫二乗の二部を合せて離れ給ふ。

上來の三部を離れたるが無執心なり、此無執心の體は、慈悲と智慧の二なり。此悲智の二を次第に練り堅め、成熟し終りたる處を妙樂勝真心と云ふ。

次に妙樂勝真心とは、『論註』下_下に釋あり、後得智の大悲を離れざる根本智を指して、妙と云ふ、此智は四徳の中の樂徳なるが故に、樂と云ふ、この妙樂は、三界の諸樂に超へて勝れたる故に勝と云ふ、真心とは虚偽ならず、顛倒ならざる心なり、此妙樂勝真心が法藏成佛の因なり、この因に依て、速かに無上道を成じ給ふ、この成佛の因たる智慧

等を以て名號に攝め、聞信の一念に行者に施し給ふ、故に行者の一心は菩薩の智慧心より生ず、之を淨土の菩提心と云ふ。菩薩の智慧は上求下化なり、此心を得るが故に、行者の意亦願作度生を具足す、菩薩は妙樂心を具足して、此一因に依て無上道の一果を成じ給ふ、此が行者に顯はれて、一心の一因に依て無上涅槃の一果を得る。

次に速得の二字を解せば、『大經』では「速成正覺」とあり、論文には「速得成就」と云ふ、『大經』では菩薩の速なり、論文では行者の速なり、菩薩速かに無上道を成ずるは、我等をして速かに菩提を成ぜしめん爲なり。火橋の喩にて速の意を知るべし。(『註』下註)

次に自利々他とは、因の五念、成功德とは果の五門なり。

(大旨) 此一段は、本願成就して正覺の彌陀と成り給ふことを明す、成佛の因は妙樂心、即ち菩提心の一因なり、成佛の果は無上菩提の一果なり。此一因一果は、近くは上の五因五果を結びて、前段所明の法藏所修の五念の行が、妙樂心に依て導かるゝものなることを示して、五念を菩提心の一因に收め、五功德の果は、外相に約して分開施設して、五等を列ぬと雖も、證大涅槃の上の施設に過ぎざれば、合すれば無上菩提の一果に約ま

ることを示すものなり。

更に、之を論主の一心段と對照して考察するに、偈の始に、一心歸命を明して、次に一心の一因に依て往生淨土の一果を感じる相を示して、一味平等の證果を明せり。所謂、論主の一因一果なり。其一因一果は、もと如來の一因一果の廻向されたもの、論主の一心は、無碍光佛の妙樂心の表現せるもの、論主所得の平等の證果は、實に如來より廻向されし利益他の大果なりと知らしめ給ふ祖意を拜察すべきなり。されば此一段は、近くは五因五果が一因一果に收まることを示し、遠くは最初に明す所の論主の一因一果が如來の一因一果の表現なりと教へ給へるものと伺ふべき所なりとす。

更に、此一段を論文の上で見る時は、「願事成就」に出づる四心を因として、淨土にて速得菩提の果を得ると云ふは、西方願生の菩薩の仕事である。夫を今の偈では、彌陀に約して明してある。斯様に彌陀に約して釋することは、『論註』の他利々他の釋より、本論を逆觀したるものにして、『論』の卷末に行者の速得菩提を明す、何故に速得作佛が出来るか、『論註』は之に答へて、佛力が加はるから早作佛が出来ること云ふ、夫はどうして分

るか、論文に利他の語がある。之が佛力の加はる證據ぢや、然らば、佛力加被の様は云何、『論註』に答へて云く、唯彌陀を信じて、念佛する計りて淨土に往生する、往生すれば、直ちに成佛が出来る様に成就してある。唯、自身成佛するのみならず、未度の衆生を濟度すること迄が出来る様に仕組まれてある。之が十八、十一、二十二願の約束である。彌陀は其様な廣大な力を、何處より得來りたる歟、此問を答へるのが、『大經』勝行段の不可思議兆載永劫の修行である。五兆の修行は法藏の大悲代行である。法藏は其大願大行成就して、正覺の彌陀と成りたる後、功を衆生に廻施する故に、願生の行人は自の行を勵まず、彌陀の願行を我願行として、容易く成佛得脱を得る。之を『淨土論』に照すに、『善巧攝化章』の所明が之に當る、『善巧攝化章』は『論註』の十章の第五にして、行者所修の五念門を明す中、前四章に前四念門を明したれば、此「攝化章」は第五の廻向門を明す所に於て、前來集むる所の功德を衆生に廻向して、淨土往生を勸むることを明す、文相は、元より願生行者の廻向門なれ共、其所明の提撕を見るに、甚だ高尚深遠にして、「起觀生信章」に出づるが如き善男善女では迎も企及し得べき所ではない、深位の菩薩ならて

は、出來得ざる止觀相順の上の廣略修行を説き、其能修の心は權實二智に依て悲智雙行、集むる所の總ての功德善根を一切衆生に廻向して、法界の有情を一束して淨土に攝取せんと作願する様、迎も新發意の菩薩の企圖し得べき所ではない、而も其相、勝行段の法藏の修行の意圖に酷似する所より、我祖は此章の菩薩を法藏菩薩と直觀し、法藏菩薩の廻向門と達觀せられた。是、實に前古未發の大創見にして、先人未到の境地、味へば味ふほど無盡の妙味の存する所である。

斯の如く、此章の菩薩を法藏と極めて見れば、所集の功德善根を法界の衆生に廻施すとは、十方諸有の衆生に名號を廻施することにて、之に依て我國へ引取るが爲なれば、恰も願成就の經意、即ち「速滿寶海」に合する、又、所集の功德善根とは、前四念の功德にて、之を『大經』の勝行段の福智二嚴の勤修に合すれば、恰好に能く合する、而して、「令諸衆生功德成就」は利他廻向とすれば、五念具足する、此五念の行成就して、「利行滿足章」にて二利滿足の佛果に上る、是が勝果勝報段である。此五念の行を導くものは、上求下化の大菩提心にて、所謂妙樂心なり、此妙樂心と無上道、之を無碍光佛の一因一果と云

ふ。

如是く見る時は、『論』の解義分十章は、悉く法藏菩薩の修因感果を明す文となる、「起觀生信章」の五念門は、兆載永劫の修行にして、本願成就の三嚴二淨の報土は、四十八の願心より莊嚴されしものと明すが「淨入願心章」である。次に、「善巧攝化章」にては、前來所集の功德を自分の寶とせず、悉く衆生に廻向して、安樂國に往生せしめんとする、因位で云へば、令諸衆生の利他の大行、果上て取れば、衆生往生の因果たる往還二味を調劑せる名號丸の廻施である、此五念二利の行を因として、「利行満足章」で佛果に登る。されば、一論の全體一部始終は、法藏の因果を明すの外なし。此法藏の因果を總説分の論主の一心往生の因果に對應する時、實に無量の快味を覺ゆる、法藏の因果が其儘論主の因果と表はる、所に、純他力教の特色がある。法藏の「忍終不悔」の菩提心は、論主に廻向されては、金剛不壞の淨土の大菩提心となり、彌陀に等しき無上覺位の因となる。法藏の五兆の大行たる五念の行は、論主に表れては、信海流出の後念報謝の大行となる、法藏に至りては、艱難勤苦の行、行者に現はれては、他力催促の安樂行、親の辛苦で子

が樂をする、「一々誓願爲衆生」なれば、彌陀の一舉手一投足は、總て行者に影響する、衆生の爲の親が阿彌陀佛なれば、衆生の居る所には彌陀は常に離れ給はず、泣いても笑ても、不離の佛であると知らせんが爲、行者の因果を其儘如來の因果として、論文を讀み直して、我を産むの親、我を育む親、我を仕上げる親、其親は、常に我身邊に在て、「無倦常照護」の大悲者なりと知らせ給へる祖師矜哀の引入に感泣せねばならぬ。經・論・釋の文句に點を附け易へることは叡山の學風なるが、行者に屬する文章を其儘如來の者として加點して、我に離れ得ざる爲物の親を兒孫に遺訓されたる、深遠なる思召の程を感佩せねばならぬ。

第三項 曇鸞讚

一 他利々他

曇鸞和尙 大巖寺

婆藪盤豆菩薩論

本師曇鸞和尙註

願力成就名五念、佛而言宜言利他、
衆生而言言他利、當知今將談佛力、

上來、『淨土論』に依て、入出二門を約本約末兩重に釋して、行者の入出二門が願力廻向なりと云ふ義を述べ了りたるが、如是き義門は如何なる義脈を歴て成立するものなるや、其義門の成立する本源を尋ね、理由を明徴にして、他力廻向義の本義を提示し、「入出二門名他力」の義旨を確立するが曇鸞讚の主旨なり。

之に就きては、先づ他利々他の深義を伺はねばならぬ。此深義釋の出で来る本は、『淨土論』の卷末に「速得成就阿耨菩提」とあるより起りしものにて、之に就き、『論註』下三行に問答が設けてある。問の意は、願生行者が五念門に依て淨土に往生したのち、淨土にて五功德の果を漸次に増進獲得して大涅槃を證ると説き乍ら、最後に到りて速得菩提とは、前後相違でないかと云ふ問なり。之を答へて、「論言修五門行以自利々他成就故、然覈求其本、阿彌陀如來爲増上緣、他利之與利他、談有左右。若自佛而言宜言利他、自衆生而言宜言他利、今將談佛力、是故以利他言之、當知此意也」文答の

意は、論文に自利々他成就とあるより見れば、二利満足せるが故に成佛が出来る、然も二利満足は容易の業でない、何故に速かに二利満足するや、それは、行者の自力ならば手間が入るかなれども、阿彌陀佛が助勢して下さるから早く出来るのである。喩へば徒歩で十日か、つた東京が、汽車の急行に乗れば、十時間で往かれる様なものである。阿彌陀様から五念門二利の切符さへ貰へば、乗つて感謝して居る内に、ハヤ東京に到着する、難有ことには、五念門の行はいつの間やら阿彌陀様が御勤め下されて、信の一念に切符を頂戴する計りて淨土行の汽車に乗られる、乗つた上は感謝の思より稱名相續しつゝ、有縁の人を一人でも淨土に參る様誘導する丈で、別にひまのかゝる仕事は一つもない、淨土に到着したら、一足飛に往生即成佛の大益を得る、そこで『論』に「速得成就菩提」と云ふたのである。

然れば、丸切他力成佛の法であるが、左様な事が『論』の何處に出て居るか、そこは凡眼では分らぬ、容易に見へぬ處を見分けたのが鸞師の炯眼で、深義と云はれる所である。論文に「修五門行自利々他」とある利他の文字は、他力を顯はす表徴である。

若し、自利他利としてあつたなら、行者の自行化他である。然るに、自利他利でなく、自利々他とある。之が他力廻向を顯はす印である。乃て、六要師は此一段『論註』の文を引て、「今家特立如來他力廻向之義專依此文」(六要一社三)と申された。

是より、正しく他利々他の義を述べんに、先づ他利々他の名目は多く諸經論に出て、利他と他利とは同意義に用られて居る、『薩遮尼乾子經』九十一には、自利々他のことを自利他利と説きて、「一切行皆爲自利亦爲他利」文と云ひ、『同』^{千六}には「能利自己亦能利他」文と云ひ、天親の『勝思惟梵天無所問經論』上十三「依自利々他如實修行」文『同』中^{千十}「於無量爲利自身利他身」文同じく天親の『寶髻經優婆提舍』五には「自利益他利益」の語あり、又『菩薩地持經』一十三「自利他利」とあるを、異譯の『善戒經』五^{千四}には「自利々他」と説けり、其他、『十住論』七十一、『同』十五^{千六}『大乘莊嚴經』三五、『同』^{千九}『瑜伽』三十五^{千六}、『同』^{千五}『雜集論』十二^{千六}、『同』十四^{千六}等、皆自利々他と自利他利を通用してある。

然るに、今此に鸞師の云はる、他利々他は、諸經論に出づる通用の他利々他ではない、文法の上より見て、力の強弱を表はす他利々他と見る考である。喩へば、亡敵、々亡と云

ふが如く、亡^レ敵と云へば、能滅の力を表はす語であるが、敵亡ぶと云へば、敵が力盡きて亡びたことを表はして、能滅者の威力は表はれて居らぬ。今の他利々利が丁度夫と同じで、利他と云へば、利^レ他^ヲの故に能利益の強き大悲心を表はす語であるが、他利と云へば、他が利せらるゝ義、即ち他の衆生が餘分の恵を受けることが表となりて、能施者の力が影に隠れる。乃て利他と云へば、積極的に他の爲に利益を謀ると云ふ爲物身の義を顯はすに反して、他利と云へば、直ちに自利を豫想して自も利し、亦他にも利益を與へやうと云ふ第二義的の意味に聞へる。

之に就き、善き例を探り出されたが海東師の『顯深義記』である。即ち『唯識論』(十^{千七})に、佛果の自利々他を明して、「自性身正自利攝、寂靜安樂無^レ動作故、亦兼^レ他利、爲^レ増上緣^レ令^レ諸有情得^レ利益^レ故」の文である。佛身の中で、他受用身及び變化身は唯利他身である。殊更に、下地の者の爲に現ずる身なれば、自利の義はない。然るに、自性身は本來自利身なれ共、自利の徳が自然に他の衆生に及びて、其利益を蒙る故に兼他利と云ふ、此場合の他利とは、他の衆生が其餘澤を被るのであつて、正客でなく御招待であ

る。乃て他利は招伴を顯はす語、利他は正客を表はす語、一切衆生を正客として、饗應するが佛の大利他行である。自分の食膳の相手に、人を招く招伴の施行は衆生の他利行である。

此考を以て、『論』の結文の「修五念門行自利々他」の文を見るに、願生行者が五念門を修して自利々他するとあるけれども、何を申すも凡夫の身、前四念の自利行と、教人信の廻向門の化他行では、迎も速得菩提の正因になりそうに思へぬ、況して唯知作惡の下品の機では、報土往生は迎も叶はぬ、然るに論文には五念門自利々他の行を成就するとあるが、如何にも合點が行かぬ、下品の凡夫に利他行と云ふ様な高尚な心が有りそうな筈がない、よし有つたとした所で、自利と併行する他利行位である。乃て凡夫の所修として見る時は、「修五門行自利他利」とあるが當然である。然し、自利他利では速得菩提は出来ぬ、無力の凡夫をして、速得菩提せしむるものは何である乎、無力の者に強き力を與へて、速得菩提の大果を與ふるは、偏に彌陀が五念の行力を與へて下さるからである。凡夫の背後に在て、凡夫を推出して、淨土へ往生せしむる廣大の力に依て、速得菩

提が出来ると知らせるのが自利他利の文字である。

此二大字は、無碍光如來の全身の力のこもつて居る強き力を表はす文字にして、衆生往生の因果、悉く願力廻向なることを現はす一大表徴である。されば、利他とは行者の化他にあらず、如來の利他である。利他が如來の者なれば、自利も隨て如來に屬する筈、然らば、「修五門行自利々他成就」とは、如來の自利々他成就にして、因位の昔、五念の行を修して自利々他成就し給ひし功德を、願生行者は聞信の一念に、夫を受取て我物として、三業に顯はしたのが此に出てある「修五門行自利々他」なり。

五念の行は、其昔、法藏に由て行ぜられ畢りてあるゆへ、凡夫は之を行じて正因とするにあらず、唯報恩感謝の行動に出づるのみである。之が五念の起行である、五念の起行は一心より流出せるもの、而して一心こそ證大涅槃の眞因にして、如來の永劫に積累されし行功を全領する時に起る他力の信心なれば、獲信の一念に五念の行功は全領して居る故に、禮拜も讚歎も作願觀察も凡て一心等流の報恩行、他力の難有味を朋同行に傳へるが廻向門なれば、自信教人信の外なし、仍て五念自利々他成就とは後念相續の報恩行、

本に戻せば一心の一因にして、換語すれば、他力廻向の信心を得たこと、他力の一心の一因に依て、阿耨菩提の一果を得ると云ふが「利行満足章」の早作佛である。

問云、上來の如く、利他の二字を如來の他力と見るは、玄忠何の見る所ありて如是き解釋を下すや。

答云、此は一論の大體より論及する義にして、一文一句に依るものにあらず、玄忠は凡夫の入報を可能ならしめん爲に、案出されしものにて、若し普通の常規に従へば、惑染の凡夫は報土に生じ難し、然るに、彌陀は爲物身なるが故に、慈悲を以て衆生を我淨土に引接し給ふ。又、安樂淨土は攝衆生の世界なる故に、一切往生人に無生の生を與ふるなり。如是く、淨土の依正は共に衆生利益の爲に出來上りし者なるが故に、彌陀の大慈悲の顯現なり。依て「淨入願心章」には三種莊嚴は如來の四十八願より成ずることを明せり。

依て、其四十八願を檢べて見るに、第十八願には、三信十念と行者の往生が誓ふてある、十念念佛で往生が出來るとは何故か、念佛の中に、彌陀の行功がこもつてあるか

らであらう、されば、念佛は衆生往生の正因である。稱名は正因ではあるが、不如實修行の稱名は破闍滿願の利益がない、佛智不思議の御助けを信じて稱へる稱名でなければならぬ。乃て、正因を約法は稱名正定業、約機は信心正定業と申し傳へる、(約機で稱名正定業を語ると、能稱正因の邪義に陥る、注意すべし)第十八願で往生が出來ると云ふ事は、往生の因種を名號に攝めて、之を廻向するからであらう、成就の文に、聞名の一念に即得不退の益を得ると説くは、此意を顯はしたものである。聞名とは名號を聞くことであるが、唯聞く計りではない、佛願の生起本末を聞き、疑なく佛智不思議を信じたのでなければ、聞いたのではない、信の一念に彌陀の力が衆生に全領されるゆへに、即得往生の利益を得る、之を『論』では「速滿寶海」と云ふ。

されば、衆生の往生の出來るのは、全く第十八願力によるのである。而して往生すれば、直ちに正定聚の菩薩となる。淨土に入りて見れば、人天三乘様々の聖衆が夫々の相を表はして居るが、因果不二の世界であるから、内證は皆平等一味である。初地即二地、二地即八地である。二十二の願に、「超出常倫諸地之行現前」と説くからは、内證平等の

證りの上より、思ふ様の種々の形を現して、隨類應同すること、觀音の三十三の現身説法の如きものである。

十一願文計り見て居ると、正定と滅度との間に、格段な距離があるやうに思へるが、二十二願の超倫現前の約束を併せて考へる時は、往生即成佛の我祖の御己證が會心される、二十二の本願は超出常倫の超越證計りてなく、還相廻向の大用が説かれてある、之が補處普賢の徳である。

上説の如く、願生行者が淨土に往生して大涅槃を證り、其上に還相廻向の利他の大行をする事迄が、十一と二十二の本願に誓はれてある。さすれば、十八願で往生し、十一願で必至滅度の涅槃を悟り、二十二の願で還相廻向をする、衆生往生の因果が三願で満足すること出來てある。此衆生往生の三願は、何に由て成就されたか、申す迄もなく、因位永劫の五念門の修行の功に依るのであらう。最初、彌陀が衆生の爲に五念の行を成就し、其功を聞信の一念に廻向するから、衆生が樂に五念を行ずることが出來るのである。

されば、今、此論文に「修五門行自利々他成就」とは、本に約すれば、法藏因位の所修の五念二利の行である。夫が行者に譲り渡されて、行者の物として顯れて居るから、行者の五念二利で作佛の果を得る様に見へて居るけれども、其實、行者所修の五念二利の中には、彌陀の智慧が輝き渡りて居る、永劫の行力が蘊在し居る故に、早作佛の結果が得られると、佛力他力の強縁を知らせるのが今この利他の二字である。『顯深義記』^{五六}他力廻向の本據を『論』及『正依經』より考へて、數文を引證せり、可見。

次に、『論註』の上の文を解釋して、前來の説明を證明すべし。

増上縁とは、有力増上縁にて、與力不障の増上縁にあらず、増上の因縁と云ふ意義に取らねば、下に出づる他力の喩に合はぬ、行者所修の五念門の本は、彌陀の因位永劫の修行により成就せられし物を廻向するから、行者の五門行が容易く成就すると顯はす所なれば、阿彌陀如來を最勝増上の因縁とすると云はねばならぬ。

次に、他利利他の釋義であるが、之には古來幾多の異義がありて、仲々面倒な事であるが、今は、異説を擧ぐる事は他の講録に譲りて、唯正義と信ずる所を述べれば、他利

とは他利、若くは他利（利）と讀む心持で、他人が徳分を受けることを顯はす語、利他とは利（利）他（利）と讀むから、他の人の爲を謀ることにて、能利の力を顯はす語、他利々他共に他を利することではあるが、利他の語は佛の強き救済力を顯はす故に、佛の慈悲行を顯はすには利他の語は適當する、故に佛よりして言はゞ、利他と云ふべしと云ふ。又、他利の語は能利の力を顯はすこと弱し、故に、衆生の教人信の化益を顯はすには、他利の語が適切である。故に、衆生よりして言へば、他利と云ふべしと云ふたのである。

「有左右」とは、強弱又は甲乙と云ふ程の意味で、同じ二つの文字なれど、位置の上下によりて、意味に左右甲乙が出来るると云ふ意である。然るに、今、論文を見るに、「修五門行自利々他速得」等とありて、行者の五門行に利他の文字が使ふてある。此は行者所修の五念は、もと彌陀如來より貰ふたものであると云ふ印である、本來、行者の五念ならば、自利他利となければならぬ。然るに、そうでないのは佛の利他、他力より賜はりし五念である證據であるとして、次に「生彼淨土」として五念門に由て、淨土にて入證する往相も、「彼菩薩人天所起諸行」の還相も、十八、十一、二十二の願力廻向なる旨を顯はしてあ

る。

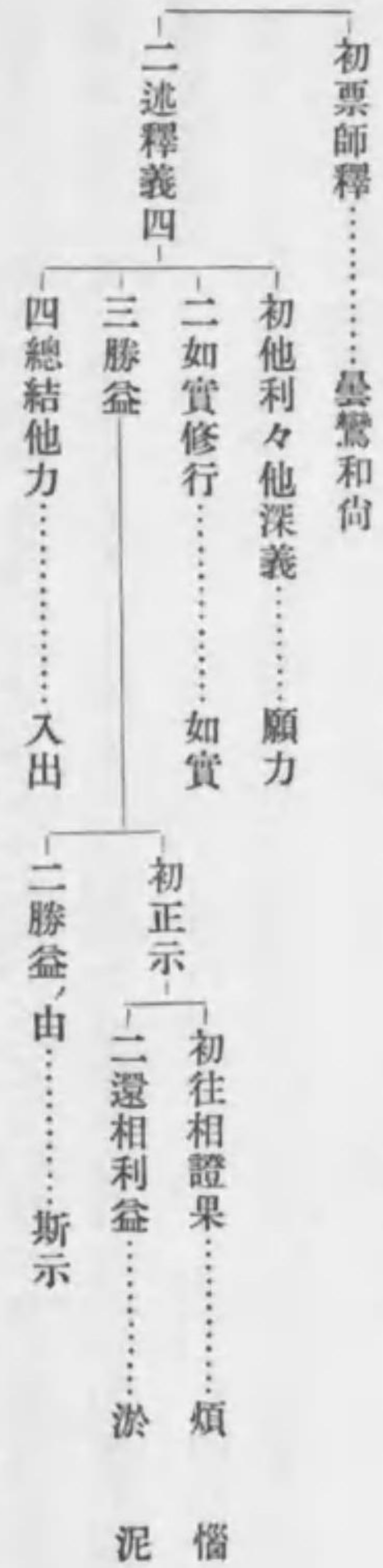
されば、五念門は第十八願で成就され、證大涅槃の證は十一願の必至滅度で成就され、還相廻向は二十二願の利益である、如是く、三願に由て衆生往生の因果満足すると云ふのが他利々他の深義釋である。

其次に、自力他力の例を出して、自力とは劣夫跨（驢）が如し、遠行す可らず、他力とは、得通者の車に乗て、四天に遊行する如しと云ふ、之にて、始めて行者の五念が、全く如來廻向の物たることが知れるのである。五念が如來廻向なれば、五功德の廻向なることは勿論である。

問云、「利行満足章」では、五念成就の人を菩薩としてある。然るに、前來の説明では、凡夫として居るは何故ぞや。

答云、五乘齊入の本願なれば、菩薩も所被の一分に相違なければ、『論』は且らく聖者に約して菩薩と説きて（此義は「善巧攝化章」已下聖者に約して菩薩と呼べり）菩薩を擧げてあれども、彌陀の大悲は「本爲凡夫兼以聖人」なれば、凡夫を正意とする、玄忠の意

は、彌陀の本願の正機を下品の凡夫とすること、上卷八番問答に顯はれたり。此機が論主の誘ふ機類にして、利行満足の益をうべき機類なることは鸞師に異存はない筈である。(文解) 文解に先立て、此一章の大意を述べし、先づ分科せば



曇鸞讚一章の大意は、結末の「入出二門名他力」の一句にある。之が本偈の結論にして、亦、此一章の大意である。

入出とは、前にも出した如く、五念五功德に各々入出があるから、因果十門のことである。因果十門が他力とは、如何なる事か、因が他力なれば、果の他力なる事は當然である。そこで、先づ、因の五念門の他力なることを知らせるが初の「願力成就名五念」

の一句である。

五念門とは禮拜等の五であるが、往生の因行として見る時は、第二の讚歎門の稱名が主となりて、其他は伴である。何故ならば、彌陀の本願の上に、禮拜や讚歎の行が正因とは誓ふてない、第十八願では、唯乃至十念の稱名、即ち、信具の行を正因と誓ふてある。されば、往生の行としては、稱名一行でなければならぬ。之が五念門を扱ふに、約法では助正主伴を分つ義門で、五念の中、第二の稱名を主とし、餘四を助伴と見る、助伴を主正に攝して、稱名正定業で押立てる義門である。然し、『淨土論』や『論註』に何とあらうと、彌陀の本願に會はぬことは、何處迄も會通せねばならぬ。然らば、何故に本願にない五念門を、往生の正因と云はれたのであらうか。

此は、本願の稱名を機相へ下して示されたもので、喩へば王來ると云へば、澤山な家來が附て來るやうに行者が信の上より稱名を稱へる時には、必ず禮拜し、作願し、觀察し、廻向する、即ち後念相續の相て正因を知らせたもの故に、五念を往生の因と云ふたものである。されば、五念正因とは、約法では稱名正因と決擇すべし。但し、此は法の

上の話で、之を直ちに機に下して取扱ふと、稱名正因即口稱募りとなる、乃て約機の時
は、三信正因と云ふ、『論』論註に、所謂如實修行相應の一心が正因となる。されば、
五念門とは、約法は稱名約機は信心、一心一行と決擇すべし。

此一心一行は、即悲願の信行にして、第十八願の三信十念である。今、『論註』では信
を行に攝めて、「十念々佛便得往生」とあるのが、五念門の總體たる稱名である。第十八
願では、稱名で往生が出来ると誓約されてある。即ち、五念門で往生するのは、第十八
願力によるのである。然らば、永劫の修行に由て、第十八願成就したのが、衆生往生の
正因たる五念成就である。若人聞名の一念に、念佛の信心を決定して、他力の願船に乗
じて、光明の廣海に浮ぶ時は、禮拜、讚歎の行も自ら運ばれ、作願廻向の報恩行も任運
に造作せられる、之が一心等流の五念報恩の行である。一心一行の正因が他力なれば、
五念等流の行業は、無論如來大悲より催さる、無作の妙行である。此五念の報恩行は、
何から出るかと、其本源を知らせるのが、第二段の如實修行相應の信心である。

稱名念佛は、本願の行に相違は無けれども、無名無實に唯稱へては、破滿の利益はな

い、信の上の稱名でなければ、五念起行の業作は起らぬと、行烟の起る源は信火にある
ことを示し、其信心には、衆生を淨土へ送りて、證大涅槃せしむる力用あることを示す
が、第三段の「不斷煩惱得涅槃」の一節である。

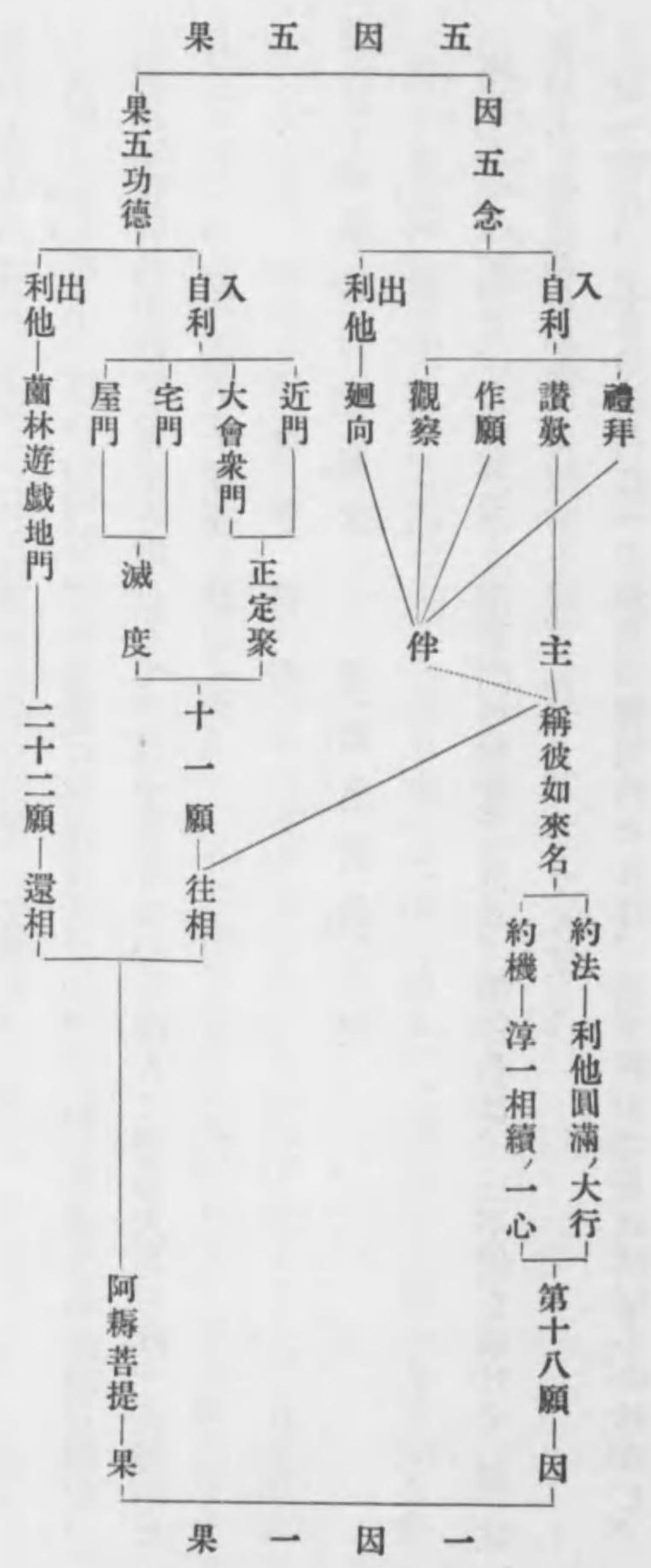
既に、淨土にて悟りを開きし上は、涅槃の大用より化他の巷に出て、迷の衆生を開
化して、煩惱の泥中より他力信心の花を開かせる、之が還相廻向の作用である。此還相
の大悲利物の相を、第四段に現はして、「淤泥者經說言等」とのたまふ。

上來、如實修行の信心を因として、證大涅槃の大果を感じ、更に、涅槃の大用として
還相の大悲を起すことは、全く本願力の廻向によることを顯はすが次に出づる「如來本
弘誓」等の二句なり。

上來は即ち、『論註』卷末三願的證の意にして、如實修行の信心は第十八願力廻向、之
に依て、報土頓證の益を得るは十一願の必至滅度の願力、又、還相廻向の作用は、二十
二願の廻向なる不思議力に依て、一因一果を得る、因も他力なれば、果も願力廻向なる
故に、煩惱成就の凡夫が大涅槃を頓證すると顯はすが此一章の主旨にして、最後に之を

結びて、衆生往生の因果が願力廻向なれば、入出二門は他力であるぞと結びたるなり。
 此一章を熟讀するに、初後の二句は五因五果の開門を用ひ、中間の三節は一因一果の合門の法相が用ひてある。是、全く『論註』卷末の五因一果の法相を、因果共に開し、共に合して、開合自在の範を示し給ひしものなり。上來の所明を一括して表示すること下の如し。

- 一、衆生往生の因果は、三願に由て成就せらる。
 - 二、三願を成就せしむる者は、五念永劫の修行に由る。
 - 三、衆生は名義相應の一念に、五念の行功を獲得するが故に、無上涅槃の大果を得る。
 - 四、故に、入出二門名他力なり。
- 左に十門、二廻向、三願との交渉を圖表して一目瞭然たらしむ。



次に文解を爲さば、
 初に「願力成就名五念」の七字を解すに、此文は、『論註』卷末の「修五門行自利々他」の文を解釋するので、『論』の顯文では、願生行者の自利々他の行が成就したことに見へ

て居るが、『論註』の三願的證の文意から見ると、如來の本願力で成就なされた五念門である。三願の中、五念門は乃至十念の稱名にして、稱名往生は全く第十八願成就の爲なれば、五念門は其本、第十八願力成就のもの、夫を衆生に廻向されるゆへに、親の物を我物として、之を信行して往生成佛の果を取るのである。

次に「當知」の二字、『論註』では最後の句に在り、今、句頭に置換へ給ふ祖意如何、開悟院云く、『論註』と此文と照合して、二十返計り心を沈めて讀む人あらば、其義心に浮ぶべしと、諸子宜しく試案し給ふべし。

二 如 實 修 行

如 實 修 行 相 應 者

隨 順 名 義 與 光 明

以 斯 信 心 名 一 心

(本據) 初二句は、『論註』下二讚歎門の釋意に依る、第三句は、三不信を擧げて「與」此相違名三如實修行相應一是故論主建言「我心」の文に依る。

此一節は、五念の起行は一心流出の報恩行なれば、卷て收めて見れば信心の外なし、

所謂一拳五指の喩の如く、開けば五念、合すれば一心なり、五指の五念を、信心の一拳に收めたが唯今の文なり。

「如實修行相應」とは、名義と光明とに隨順することを云ふ。

隨順とは、相應することである。名號の義と光明の徳とに、相應して稱ふるを如實修行と云ふ。

名義とは、名號の謂れなり、一心に我を頼む衆生をば、如何に罪深くとも、必ず救ふとあるは、名號の謂れなり、此謂れを聞きて、不了佛智の疑の闇晴れて、信心歡喜する一念に、即得往生の大益を得る、之が名義に相應したのなり。如實修行相應は信心一つに定めたり、信心を得れば、疑の闇はれて往生立處に定る故に、破闍滿願の利益を得る、之を「無碍光如來ノ名號ハ、無明長夜ノ闇ヲ破シ、衆生ノ志願ヲミテタマフ」と云ふ。次に光明の徳とは、破滿の二徳なり、光明を以て、疑の闇を破して信心決定せしむるは、破闍の徳なり、「無碍光ノ利益ヨリ、威徳廣大ノ信ヲ獲」とは、破闍の義なり。

次に滿願とは、現益て取れば、入正定聚なり、何故に正定聚に住するや、云く、攝取

不捨の故に正定聚に住す(『末燈鈔』)と、正定不退豈滿願にあらずや、當益て云はゞ、涅槃の證果なり、「カナラス煩惱ノコホリトケ、スナハチ菩提ノミットナル」豈滿願に非ずや。又、存師の『見聞集』に依て之を見れば、「無碍ノ佛智ハ行者ノ心ニ入り」と云ふ、光明の體は佛智なり、佛智が行者の貪瞋水火の心中に滿入する時、他力の信心を得れば、疑闇の破れて明朝の境地に出るもの、豈破闇にあらずや、「行者ノ心ハ佛ノ光明ニオサメトラレタテマツリ」とは、信心の行者は攝取の懷に抱かれて安らかに眠る、豈滿願にあらずや、如是く、名義に相應し光明を體得するとは、信心を得ることなり。故に、

次に信心を出して斯信心等と云ふ、斯信心とは、淳一相續の三信にして、本願の三信即一の信樂又成就の一念なり、之を、論主は偈に一心と云ふ、名義と光明とに隨順する一心の信心なり。依て、信心を得るものは淳一相續の三心を得る、信心を得ざる者は、名義に相應せず、光明智相に隨順せざる故に、三不の相違を取る、論主では、名義不相應の一不、玄忠は開きて三不となす、此三不と相違するを如實修行相應と云ふ、此如實修行の信心を、論主は初に我一心と云たものなり、此一心は等流して五念の起行を産み、

當來には往生成佛の大果を感じるなり。

三 報土勝益

煩惱成就凡夫人	不 _レ 斷煩惱得涅槃
則斯安樂自然德	游泥華者經說言
高原陸地不生蓮	卑濕淤泥生蓮華
此喻凡夫在煩惱	泥中生佛正覺華
斯示如來本弘誓	不可思議力即是
入出二門名他力	

此一段の中に、初四行は報土にて成佛の證を得て、更に、穢國の衆生を濟度すると云ふ、往還二種の勝益を明す、前に明す如實修行の信心を因として、今の報土得證の一果を得ることを明すなり。煩惱成就の凡夫が、唯信心の一因にて得證の果を得るは、全く如來の本願力の然らしむる所なりと結ぶが、

「斯示如來」等の三句の結文なり。五行半十一句の中、初三句は報土に往生して大般涅槃

槃を證ることを明す、據は『論註』下七を清淨功德の文なり。文云「有凡夫人煩惱成就亦得生_レ彼淨土、三界繫業畢竟不_レ牽則是不斷煩惱得_レ涅槃分_二」と云。

則斯安樂自然徳の一句は、『大經』の「其國不逆違自然之所牽」の文と、『論註』の「三界繫業畢竟不牽」の文とを合糅して作句し給ふ。此三句の中に、果の五功德門の中、前四功德を攝盡すと可知。

煩惱成就凡夫人とは、本願の正所被の機を出す。不斷煩惱得涅槃の上に、『正信偈』では「能發一念喜愛心」の句あり、今も獲信の意味を胸に置きて讀めば、通暢し易し。

不斷煩惱得涅槃とは、元は『維摩經』弟子品の初に出づる文字にして、維摩居士が大乗の煩惱を生擒して、我用を爲さしむると云ふ圓頓一乘の見地より、俗塵を避けて山林に宴座する舍利弗を呵する語なり。

『維摩經』では、「不斷煩惱而入涅槃是爲宴座」とあり、今之を借り來りて、淨土の勝益圓頓の妙旨を顯はす、『論註』では、涅槃の下に分の字あり、之に就いて『顯深義記』四_二分の字を釋するに、三義を出せり。

一に、分は因の義として、信の一念に涅槃の因を得たことに見る、此は現生で煩惱は斷ぜざれども、信の一念に法徳として三世の業障消滅する故に、當來涅槃を得べき因を得たゆへに得涅槃分と云ふ。

二に、分は未圓の義と見れば、涅槃の一分を得たこと、此は彼土正定聚で伴莊嚴を顯はす義邊なり。

三に、分圓無碍の義、此は因果不二の證を云ふ、香月院は之を補足して、分齊の義として、涅槃の滿果を顯はす義として成立せられた。

第一の義は、涅槃の因たる信心を得れば、法徳として迷の因を斷たる、故に、必定涅槃を得らるゝ身と成つたと云ふ意。『正信偈大意』信心獲得の『御文』改邪鈔末_二は此意なり、二に、彼土正定聚の義は、十一願文に「國中入天」と云ふを初として、『論』の妙聲功德の文を『一多證文』_七に、彼土此土兩不退の文點を附けて其義を示せり、其他、『小經』には「衆生皆生阿鞞跋致」とあり、此は伴莊嚴に約する義なり。三には、淨土の土徳として無上涅槃を超證する義、此時は、分齊の義にして、因分果分の分と同じく、